

上郷町埋蔵文化財発掘調査報告書第23集

藪越遺跡

—— 貸店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

1991.3

長野県下伊那郡上郷町 丸山 俊一
長野県下伊那郡上郷町教育委員会

上郷町埋蔵文化財発掘調査報告書第23集

藪越遺跡

—— 貸店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

1991. 3

長野県下伊那郡上郷町 丸山 俊一
長野県下伊那郡上郷町教育委員会

序

平成2年度、上郷町飯沼3,406-1番地へファッションセンターしまむらの店舗設計計画を申請しましたところ、埋蔵文化財包蔵地藪越遺跡ということで、長野県教育委員会の御指導もあって、上郷町教育委員会に発掘調査を委託いたしました。

当遺跡は、北に古くから『宇沼の里』と呼ばれ水田遺跡を想定される湿地帯を控え、南に生活用水として栗沢川が流れる台地上に立地します。以前から、雲彩寺周辺より山田町長さん宅のあたりにかけて、縄文時代晩期より平安時代へかけての遺物が散見されています。また、父や祖父から「桑園改良の天地返しの折に新田籠三杯も土器のかけらを栗沢川に捨てた」との話や、壺・瓶・甗・皿は勿論、勾玉等の玉類・青銅の耳飾・独鈷石・磨製石鏃・石包丁等々豊富な遺物の出土の話を目にしてきました。また、近くには雲彩寺古墳という郡内有数の封土を持つ前方後円墳も築かれています。そうしたものを築く文化的土壌をもっていたところであり、その人々が住んでいた場所と想像すると、夢は限りなく広がり発掘成果に期待してまいりました。

想像以上に深い所からの住居址の発見等、大変な作業を予定通り終了することができました。ここに報告書の発行ができますことは、上郷町教育委員会の方々や発掘調査に従事されました作業員の皆様の献身的な御努力によるものと、心から厚く御礼申し上げます。

なお、当調査成功も、ファッションセンターしまむら様の御理解御協力があったからこそであり、深く感謝申し上げます、ここに記して序文といたします。

平成3年3月20日

地主 丸山 俊一

例 言

1. 本書は、長野県下伊那郡上郷町飯沼3,409番地丸山俊一氏が計画した貸店舗建設に伴う上郷町飯沼3,406-1番地「藪越遺跡」の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、丸山俊一氏からの委託を受け上郷町教育委員会が実施した。
3. 本遺跡の略号はYBNとし、発掘作業から整理作業まで一貫して使用した。
4. 本書を作成するにあたっての作業分担は以下の通りである。
遺構実測・遺構写真・遺物実測・遺物製図……山下誠一・吉川金利
図面修正・遺物写真……山下誠一
なお、石器実測は飯田高校教諭桜下光男氏にご協力いただいた。
5. 本書に掲載した遺構図の中に記した数字は、それぞれの床面ないしは周囲からの深さをcmで表している。
6. 本書は、Ⅲ-1-①・④を吉川金利が、それ以外を山下誠一が執筆した。
なお、農業改良普及所上郷担当の近藤武晴氏に炭化米の分析をしていただき、玉稿を賜り付編として掲載した。
7. 本書の編集は山下誠一が行った。
8. 本書に関連した遺物及び記録・図面類は上郷町教育委員会が管理し、上郷考古博物館で保管している。

本文目次

序文	
例言	
I 経過	1
1. 調査に至るまで	1
2. 調査の経過	1
3. 調査の概要	2
4. 調査組織	2
① 調査団 ② 事務局	
II 遺跡の立地と環境	3
1. 自然的環境	3
2. 歴史的環境	7
3. 層序	9
III 調査結果	11
1. 竪穴住居址	11
① 1号住居址 ② 2号住居址 ③ 3号住居址 ④ 4号住居址	
⑤ 5号住居址 ⑥ 6号住居址 ⑦ 7号住居址 ⑧ 8号住居址	
⑨ 9号住居址	
2. 溝址	24
① 溝址1 ② 溝址2 ③ 溝址3 ④ 溝址4 ⑤ 溝址5 ⑥ 溝址6	
3. 掘立柱建物址・柱穴群	31
① 掘立柱建物址1 ② 柱穴群	
4. 遺構外出土遺物	33
① 縄文土器 ② 須恵器 ③ 土製品 ④ 石器	
IV まとめ	34
付編	37
後記	95

挿 図 目 次

挿図 1	藪越遺跡位置図	4
挿図 2	藪越遺跡発掘位置図及び周辺図	5・6
挿図 3	藪越遺跡基本土層柱状図	8
挿図 4	藪越遺跡上層遺構全体図	9
挿図 5	藪越遺跡トレンチ及び下層遺構全体図	10
挿図 6	1号住居址	12
挿図 7	2号住居址	13
挿図 8	2号住居址カマド	14
挿図 9	3号住居址	15
挿図10	4号住居址	16
挿図11	5号住居址	18
挿図12	5号住居址カマド	19
挿図13	6号住居址	20
挿図14	7号住居址	21
挿図15	8号・9号住居址	23
挿図16	溝址 1	25
挿図17	溝址 2	26
挿図18	溝址 3	27
挿図19	溝址 4	28
挿図20	溝址 5	29
挿図21	溝址 6	30
挿図22	掘立柱建物址 1	31
挿図23	柱穴群	32

図 版 目 次

第 1 図	1号住居址、2号住居址出土遺物	39
第 2 図	2号住居址出土遺物	40
第 3 図	3号住居址出土遺物 (1)	41
第 4 図	3号住居址出土遺物 (2)	42

第5図	4号住居址出土遺物	43
第6図	5号住居址出土遺物	44
第7図	5号住居址、6号住居址出土遺物	45
第8図	6号住居址、7号住居址出土遺物	46
第9図	7号住居址、8号住居址出土遺物	47
第10図	8号住居址、9号住居址、溝址1出土遺物	48
第11図	溝址1出土遺物	49
第12図	溝址2、溝址4出土遺物	50
第13図	溝址4、溝址6出土遺物	51
第14図	溝址6出土遺物(1)	52
第15図	溝址6出土遺物(2)	53
第16図	溝址6出土遺物(3)	54
第17図	溝址6出土遺物(4)	55
第18図	溝址6、遺構外出土遺物	56
第19図	3号住居址、遺構外出土遺物	57
第20図	遺構外出土遺物、1号住居址出土銭、遺構出土鉄器	58

写真図版目次

図版1	遺跡遠景(西より望む)	遺跡遠景(北西より望む)	59
図版2	調査地遠景(西より望む)	調査地近景(北西より望む)	60
図版3	1号住居址	1号住居址炭分布状態	61
図版4	1号住居址炭分布状態(部分)	1号住居址炭分布状態(部分)	
	1号住居址炭分布状態(部分)	1号住居址炭分布状態(部分)	
	1号住居址炭化米出土状態	1号住居址炭化米出土状態	
	1号住居址炭化米出土状態	1号住居址銭出土状態	62
図版5	2号住居址	2号住居址カマド	2号住居址カマドたち割り
	2号住居址カマドたち割り	2号住居址坏出土状態	63
図版6	3号住居址	3号住居址遺物・礫出土状態	64
図版7	3号住居址カマド	3号住居址カマドたち割り	3号住居址遺物出土状態
図版8	4号住居址	4号住居址炉址	4号住居址壺出土状態
	4号住居址挟入打製石庖丁出土状態	4号住居址有肩扇形状石器出土状態	66
図版9	5号住居址	5号住居址カマド	5号住居址カマドたち割り
図版10	6号住居址	6号・7号住居址	68

I 調査の経過

1. 調査に至るまで

長野県下伊那郡上郷町飯沼南条在住の丸山俊一氏が所有する飯沼3,406-1番地に貸店舗建設の計画を立て、平成2年5月22日に農地転用の申請書を農業委員会に提出した。当該地は上郷町の埋蔵文化財包蔵地「藪越遺跡」として登録され遺物多出地域として知られていたため、町の教育委員会では同年6月28日付で丸山氏に埋蔵文化財の保護についての指導文書を送付した。

事業実施が確定した平成2年8月20日に、丸山俊一氏・工事施工業者の株式会社ヤマウラの担当者・借主の株式会社しまむら担当者と町教育委員会担当職員により保護協議が実施された。その結果、調査にかかる費用の全額を丸山氏が負担して建物部分を対象として発掘調査を実施して記録保存を計り、駐車場部分は遺構面が深いことが予想されるので埋設保存することとした。調査は事業実施前の9・10月に実施し、整理作業を年度内に済ませて報告書を刊行することで合意した。

これを受けて上郷町教育委員会では、丸山氏と8月31日に藪越遺跡埋蔵文化財発掘調査委託契約を取り交わし、文化庁あてに発掘調査の通知を提出した。

2. 調査の経過

過去に遺物が多く出土しているとはいえ具体的な遺跡の状況が明らかでないため、試掘調査を実施するのが最良の方法といえた。しかし、予算と他の発掘調査との関係で時間も限られていたため、当初から重機を導入して調査区を拡張し、順次調査するように計画した。

平成2年9月10日にバックホーを導入して調査区の拡張を開始し、翌日にテント・発掘器材を搬入して本格的な調査を開始した。

最初から多量の遺物が確認され、なんらかの遺構が存在することは予想できたが、砂質の沖積面であるためにプラン検出が困難をきわめた。まず、白っぽい砂が覆土で比較的容易に確認できた溝址を掘り下げる。9月18日までに溝址6を除いて掘り上がったので、土層確認のため先行トレンチを設定することとする。用地境界側の一部は地山面までおろし、ほかは基盤上の灰黒色土までを掘り下げる。この作業の過程で竪穴住居址の存在が確認され、上層・下層の2面に遺構面があることが判明した。

まず、上層の調査に重点を置き、下層はトレンチで遺構が確認できた箇所を拡張することとした。上層は10月17日までにほぼ終了し、下層は拡張に時間がかかったが10月26日に写真撮影まで

済ませることができた。

その後、カマド・炉址のたち割り調査をなし、土層図や平面図の作成を行って、11月1日に現場におけるすべての作業を終了させた。

その後、時間を見つけて遺物の整理作業を実施して原稿を執筆し、本報告書刊行となった。

3. 調査の概要

当初は建物部分を対象として全面発掘の予定であったが、遺跡が沖積地に立地して遺構検出面が一様でないため、層位毎の調査面積の相違がある。また、排土置場と調査期間・費用の関係から建物部分で調査できない箇所が生じてしまった。

測量は調査区に任意の点を設け、そこからトランシットを用いて10mの大グリットと2mの小グリットを設定する簡易遣り方によった。グリットは南北方向に数字、東西方向にローマ字で表した。基準点は平板測量を使用して測った。標高は、別府地区にある標準三角点から引き出し、調査区に独自のベンチマークを設けて使用した。

層位毎の調査面積と調査遺構は次の通りである。

古墳時代から中世面 …………… 790㎡、竪穴住居4軒・溝址6本・掘立柱建物址1棟・ピット
古墳時代下層 …………… 165㎡、調査遺構なし
弥生時代 …………… 72㎡、竪穴住居址5軒

4. 調査組織

① 調査団

調査担当者	山下 誠一				
調査員	吉川 金利				
作業員	井坪 芳一	伊藤 千代	太田 沢男	大原 久和	岡島 亘
	上沼 文代	北林 覚男	北原久美子	桑原かほる	小西 広司
	小林百合子	原 礼三	下沢 敏文	下沢 貞満	下井 正俊
	末元 淳一	篠田せい子	中原 友江	古林登志子	野牧 安美
	松下 光利	松田紀美子	麦島 孝男	矢花喜代子	広瀬しず子

② 事務局

上郷町教育委員会

吉川 昭文（教育長）	林 慶一（事務局長）	吉川 勝一（社会教育課長）
山下 誠一（社会教育係）	吉川 金利（社会教育係）	下島 美和（社会教育係）

Ⅱ 遺跡の立地と環境

1. 自然的環境

藪越遺跡の所在する長野県上郷町は、長野県の南端を南北に走行する南・中央アルプスの谷間に広がる飯田盆地の中央に位置する。町を象徴する野底山が北西にあり、ここを源として清流野底川と土曾川が南流して飯田松川と天竜川に注いでいる。町の東側には天竜川を境として喬木村が、西は野底川を挟んで飯田市街地が、南は松川を境として飯田市松尾が、北は土曾川によって高森町と飯田市座光寺がそれぞれ隣接する。面積は約26km²で、東西に細長い緩傾斜の地域である。一帯は諏訪湖に源を發して南流する天竜川とその支流によって形成された河岸段丘や扇状地上に、往古から現在に至る人々の生活舞台が展開している。

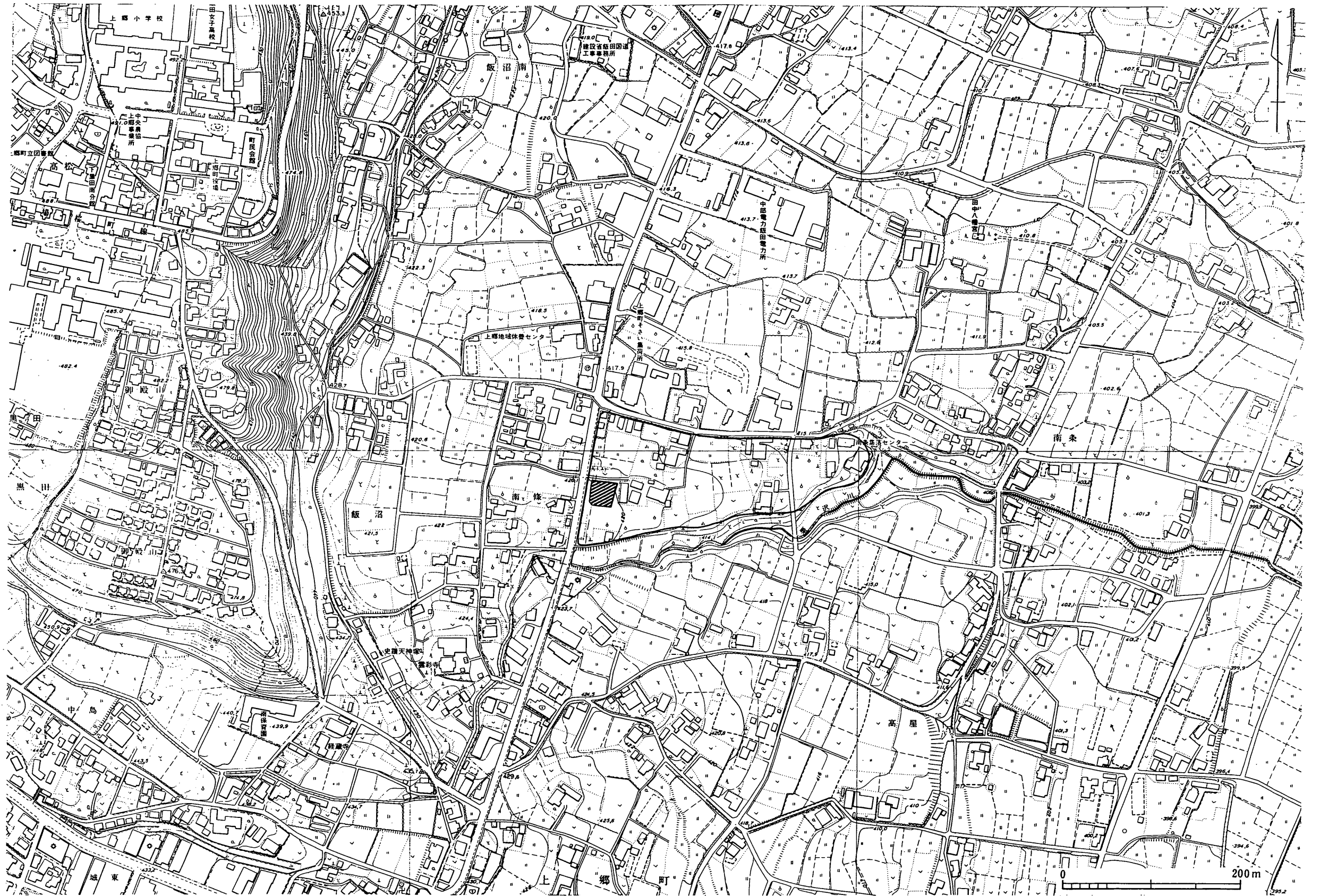
『下伊那の地質解説』によれば、伊那谷の段丘は火山灰土の堆積を基準として、高位面・高位段丘・中位段丘・低位段丘Ⅰ・Ⅱの五段階に編年されている。上郷町の地形の特徴として、町の中央部を南北に横断する大段丘があり、これを境として俗に上段（うわだん）と呼称される洪積土壌地帯の中位段丘及び低位段丘Ⅰと、下段（しただん）と呼ばれる沖積土壌面の低位段丘Ⅱとがみられる。その段丘崖の比高差は約50mあり、前者には黒田地籍が、後者には別府・飯沼地籍がある。低位段丘Ⅱ地帯は天竜川の現河床面海拔398mとの比高差30～3mを測り、大段丘崖下を中心に湧水や地下水が豊富である。そのため、かつての沼沢の凹地は、現在も典型的な水田地帯となっている。この段丘中央部を国道153号線が、突端部を農免道路が南北に走向する。ちなみに、低位段丘Ⅱ地帯は三大別でき、天竜川現河床面よりやや上段の海拔398～405mの南条面、一段と高く海拔407～418mの別府面、さらにその上段の飯沼面に細別される。

藪越遺跡は上郷町飯沼字藪越・藪添・中垣外・沢・沢洞・いせや・さかい畑・ほり田に所在し、低位段丘Ⅱ南条面および別府面の海拔415～420mに立地する。南側が比高差4～8mを測る栗沢川の浸蝕谷で、北側は緩やかに傾斜しながら凹地の湿地帯に連続している。東側は徐々に狭くなり、西側は国道153号線を挟んで雲彩寺遺跡と接している。総体とすれば、北側に広がる広い湿地帯に面する微高地上に立地し、その地目は、水田・畑・果樹園で、宅地化された箇所も多い。今次調査地は遺跡範囲の西端にあたり、国道153号線を挟んで西側は雲彩寺遺跡に接している。

本遺跡から飯田松川との間は上郷町でも密に遺跡が立地する箇所といえ、高屋遺跡・矢崎遺跡・中島遺跡等縄文時代以降継続的に生活空間として利用されてきたと考えられる。生産地や湧水などの生活条件に恵まれ、集落を営むのに絶好の自然環境といえる。



挿図1 葛越遺跡位置図 (1:50,000)



挿図2 藪越遺跡発掘位置図及び周辺図(1:5,000)

2. 歴史的環境

上郷町の遺跡調査は、大正13年鳥居龍蔵博士が『下伊那の先史及び原始時代図版』を編纂する際、市村咸人氏と郡下一帯を調査したのを端緒とする。現在の上郷町の遺跡は、昭和57年度の詳細分布調査により明確にされたもので、一般遺跡69カ所・古墳32基・中世城跡3カ所の合計104遺跡が登録され、平成元年3月に古墳4基が追加された。一般遺跡を時代別に区分すると、縄文時代50、弥生時代47、古墳時代21、奈良・平安時代65、中世42を数えるが、単純遺跡は少なくその大半が複合遺跡である。

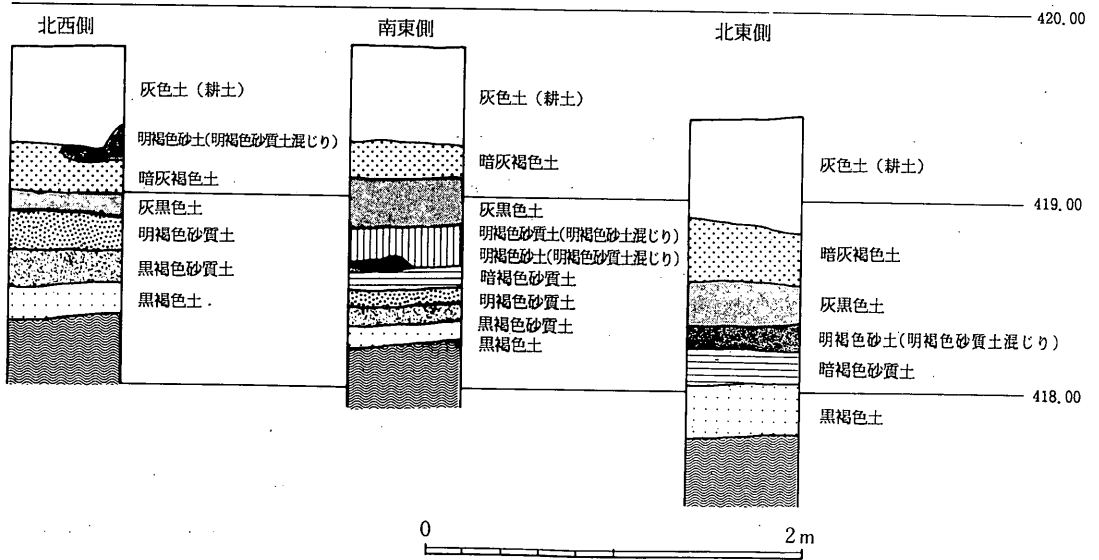
まず上郷町の歴史的変遷を概観してみると、12,000年以前の旧石器時代の遺構・遺物は現在のところない。上郷町最古の文化は、上段の姫宮遺跡出土の表裏縄文式土器片と、同じく柏原A遺跡出土の石器剥片とより、縄文時代草創期からその黎明を知ることができる。次の縄文時代早期になると比較的山寄り八王子遺跡など5遺跡から、押型文土器や繊維を含む条痕文及び擦糸文土器が出土しており、平成元年1月の西浦遺跡の町道新設に伴う調査において押型文の住居址が検出されている。約6,000年前の縄文時代前期の遺跡は姫宮・日影林・大明神原など8遺跡があるが、いずれも上段の中位段丘と低位段丘Ⅰ地帯であり、下段の飯沼・別府地域からの発見がなく、未だ沖積地帯への進出はなかったと考えられていたが、町道改良による矢崎遺跡の発掘調査において前期後半の竪穴住居址が検出されており（上郷町教育委員会1989C）、見直しが必要となった。しかし、次の縄文時代中期になると、低位段丘Ⅱ地帯の南条面下段を除き、全町内に遺物の散布が目立ち、人々の生活の舞台の広がりを示している。特に、中期の遺跡49カ所中栗屋元・大明神原遺跡は重要遺跡である。この後に続く約4,000～3,000年前の縄文時代後期には遺跡は極端に減少し、上段を中心にして8遺跡が判明している。さらに、最終末の縄文時代晩期の遺跡は3カ所が知られていたが、近年矢崎遺跡より条痕文土器片が多量に発見され（上郷町教育委員会1988A）、弥生時代の始まりとも関連して、その出土意義が注目されている。

次の弥生時代は水稻栽培を経済基盤とする新文化であり、下伊那地方へは美濃・尾張・三河地方から東漸したものと推定される。弥生時代前期の遺物は少なく、中期に至って遺跡数が増大する。特に、南条面に立地する棚田遺跡は、県下初の弥生時代の水田址が発見されたことで有名である（上郷町教育委員会1987）。また、該期の遺跡の大半は下段の飯沼・別府地籍に集中することから、低位段丘Ⅱ地帯にみられた湿地帯を利用しての水稻耕作の展開が類推されている。約1,800年前の弥生時代後期になると、その遺跡は山麓地帯から天竜川氾濫原に至る間に44カ所あり、高燥段丘上での陸耕と稲作が考えられる。その代表的なものが、住居址43軒を検出した高松原遺跡（飯田高等学校1977・上郷町教育委員会1984）と木炭棺などの新知見を提供した垣外遺跡（上郷町教育委員会1989A）である。

古墳時代は集落址と墓域に区別される。上郷町の古墳は煙滅古墳を含めて36基で、その大部分

は別府地籍の台地端に立地するが、いずれも後期古墳であり、天神塚と番神塚の両前方後円墳以外は全て円墳である。当時の集落は古墳の近在にみられ、現在のところ上段になく、下段の経済的基盤の豊かな地域に発見されている。代表的な集落として、古墳時代の前期及び後期の土師器を多量に出土した南条の藪越遺跡と飯沼北的の場遺跡等があり、前者は今次調査でその一端が明らかとなった。また、矢崎遺跡内には煙滅した鳥屋場古墳と久保古墳があり、当該期の土師器や須恵器が周辺一帯から発見されている。

次の奈良・平安時代の遺物は全町内に散布しているが、下段地帯の栗沢川・土曾の右岸に所在する高屋・堂垣外遺跡には多量の須恵器片がみられる。とくに、堂垣外遺跡は平成元・2年度の調査で、古墳時代から平安時代までの集落とそれに伴う貴重な資料が得られつつあり、注目される。また、昭和62年度に調査した矢崎遺跡は平安時代の大集落址で、大規模な鍛冶遺構の検出とフイゴ羽口や鉄滓等の多量の出土遺物により（上郷町教育委員会1988A）、上郷町の重要遺跡となった。この低位段丘Ⅱ地帯は、伊那郡衙と言われる飯田市座光寺の恒川遺跡群と同一段丘面上にあり、しかも古代条里制遺構の存在が地割と地名から推測される地帯であり、古代史研究上注目すべき地域である。また、海拔410mラインは都と国府を結ぶ官道東山道の通過候補地であり、製鉄史研究者の注目の的となっている。この地方は『和名抄』、『伊呂波字類抄』等の文献から、古代伊那郡五郷のひとつである麻績郷に所属し、平安時代末期には近衛家の郡戸庄であった。このように、藪越遺跡周辺一帯の別府・飯沼・座光寺地区は、当地方の文化高揚地帯であり、恵まれた自然・歴史的環境の中に本遺跡は立地しているのである。



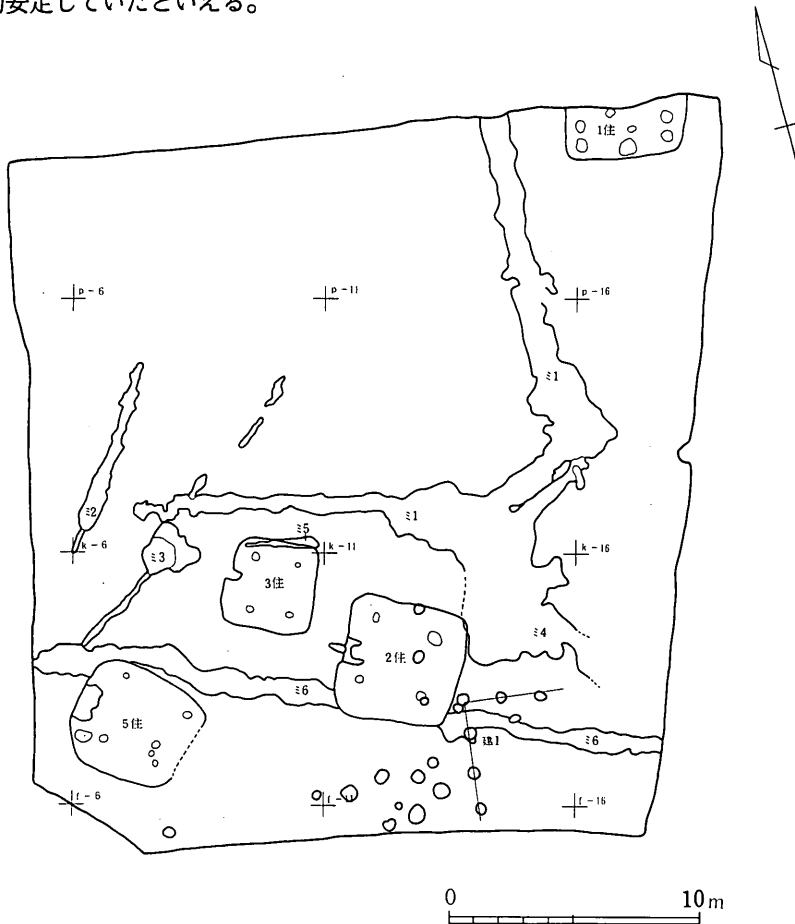
挿図3 藪越遺跡基本土層柱状図 (1:40)

3. 層 序

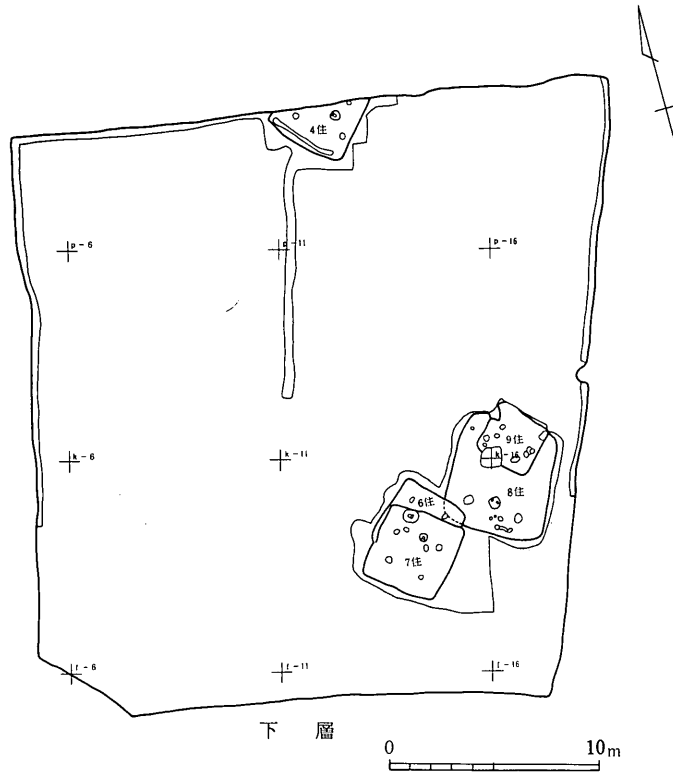
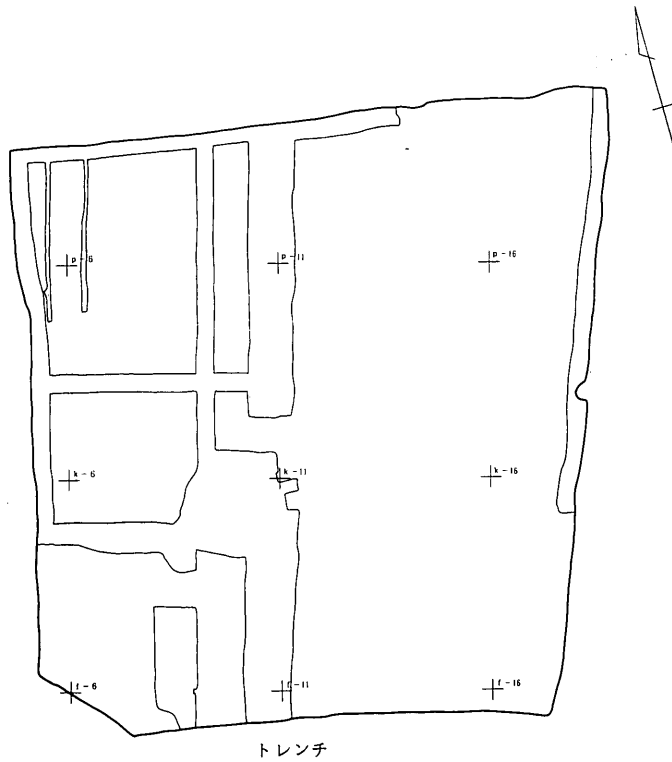
遺跡が沖積地に立地するため、わずかな場所の違いで層位が変化し一定でない。挿図3で模式的に表したので、説明を加える。北西側は5号住居址の北側の用地境界壁、南東側は8号・9号住居址東側の用地境界壁、北東側は3号住居址東側の用地境界壁で作成した。

基盤は黄色砂質土で表土からの深さは一定でないが、東・北方向に深くなる傾向が認められる。中世の検出面は暗灰褐色土で、奈良時代はその下層の暗灰褐色土層となる。古墳時代では暗灰褐色土から明褐色砂質土であるが、分かりにくい傾向にある。弥生時代は基盤の黄色砂質土が検出面となり、その上層の黒褐色土に比較的多くの弥生遺物が包含されていた。その他、基盤上面で縄文土器がわずかに得られており、明確な遺構は確認できなかったが、該期の遺構の存在も考えられる。

弥生時代と古墳時代間に約50cmほどの層位の違いがあり、短期間による堆積が考えられる。その後は比較的安定していたといえる。



挿図4 上層遺構全体図



挿図5 トレンチ及び下層遺構全体図

Ⅲ 調査結果

1. 竪穴住居址

① 1号住居址 (挿図6、第1・20図、図版3・4)

遺構 調査区の北東側 r-16 を中心として検出された。北側が調査区域外のため、遺構の約半分を調査したにとどまった。東西方向が4.6mを測る隅丸の竪穴住居址で、主軸方向は不明である。壁高は43~27cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は不良で炭化材を除去した面とした。支柱穴はP1・P2と考えられるが詳細は不明である。P4の性格は不明であるが、他のピットも炭化材の出土状況や深さ等から柱穴と考えられる。床面直上から覆土にかけて焼土と大量の炭化材が検出されており、焼失家屋である。炭化材の建築部位は想定できなかったが、一部に壁板と思われる板状の炭化材や、竹の炭化材を検出した。また、特筆すべき点は大量の炭化米が出土したことである。量的にはまだ水選等整理が済んでいないので正確な数値は表わせないが、深いテン箱一杯以上はある。出土位置は炭化材の分布にほぼ従い、特にP5・P6の周辺から多く出土した。出土状況は炭化材の間から出土しており、また炭化した竹と交互に出土し、3~4段の層になっていた箇所もある。いずれも炭化米は床面直上で検出される場合はほとんどなく、竹を含めた米の周辺の炭化材の一部は貯蔵容器の可能性はある。

遺構の性格としては遺物の量・大量な炭化米の出土から考えれば、米の貯蔵庫的役割を持つ施設の可能性がある。

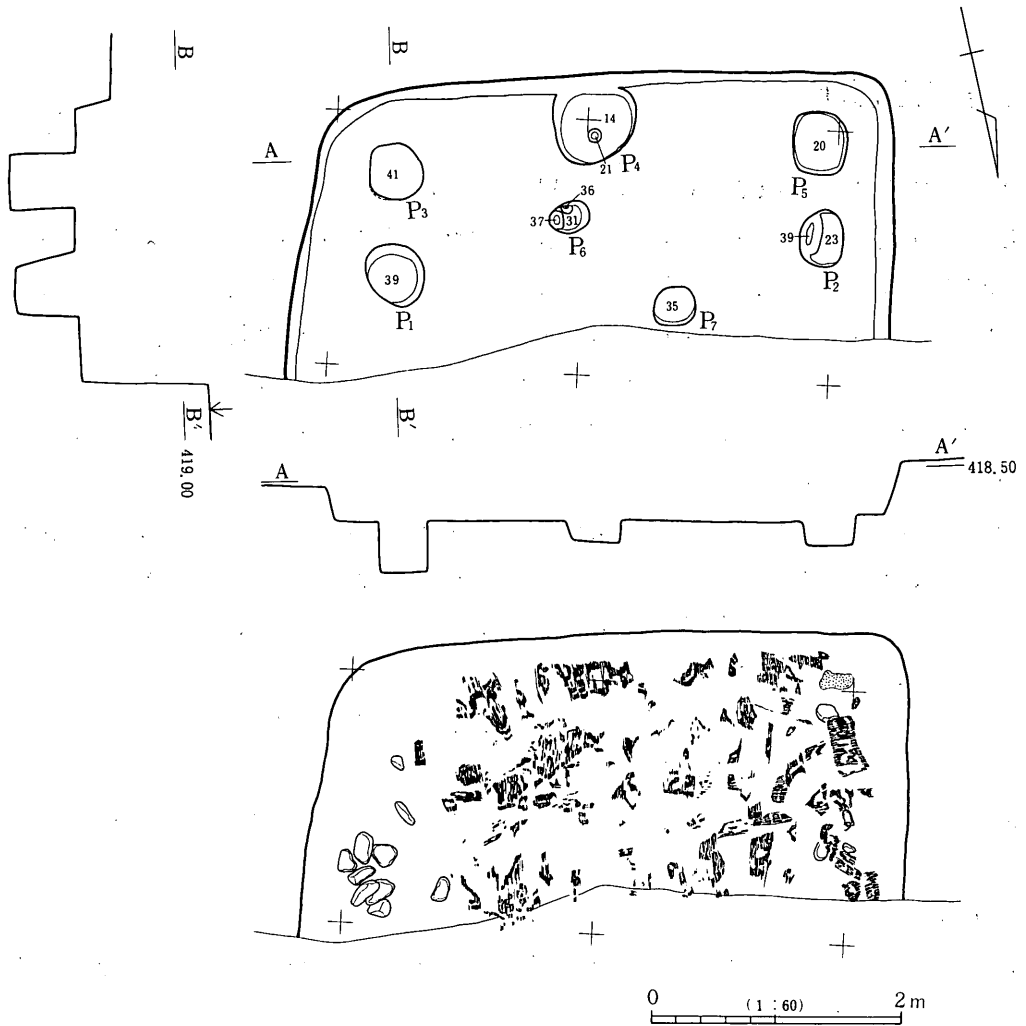
遺物 出土量は極めて少なく、銭と陶器である。

銭は宋銭の「治平元寶」(20-10)で、住居址南西コーナーの床面から2cmほどの覆土中から出土した。陶器は黄瀬戸碗(1-1)である。

宋銭の鑄造年代(1064~1067)と出土陶器より中世に位置づけられる。

② 2号住居址 (挿図7・8、第1・2図、図版5・27)

遺構 調査区南側 h-12 を中心にして検出し、全体を調査した。古墳時代前期後半の溝址6を切る。4.8×4.7mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN61°Wを示す。壁高は67~38cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。床面は細線で示した内側の住居址中央部分は黄色土使ってはり床とし、たたきに堅く極めて良好であるが、壁際は軟らかく不良である。支柱穴はP1~P4で、そのほかの穴の用途は不明である。P3西側とP1南東側に台石がある。カマドは北西壁中央に位置する粘土カマドで、黄色土を用いて構築し、小さな石を心材としていることも考えられる。煙道が壁外へ70cm伸びるのが確認できた。焚口部の焼土はあまり認められず、総体とすれば残存



挿図6 1号住居址

状態は悪い。

遺物 土器・石器・鉄器があり、出土量は比較的多く、床面ないしその直上とカマドからが主体となる。

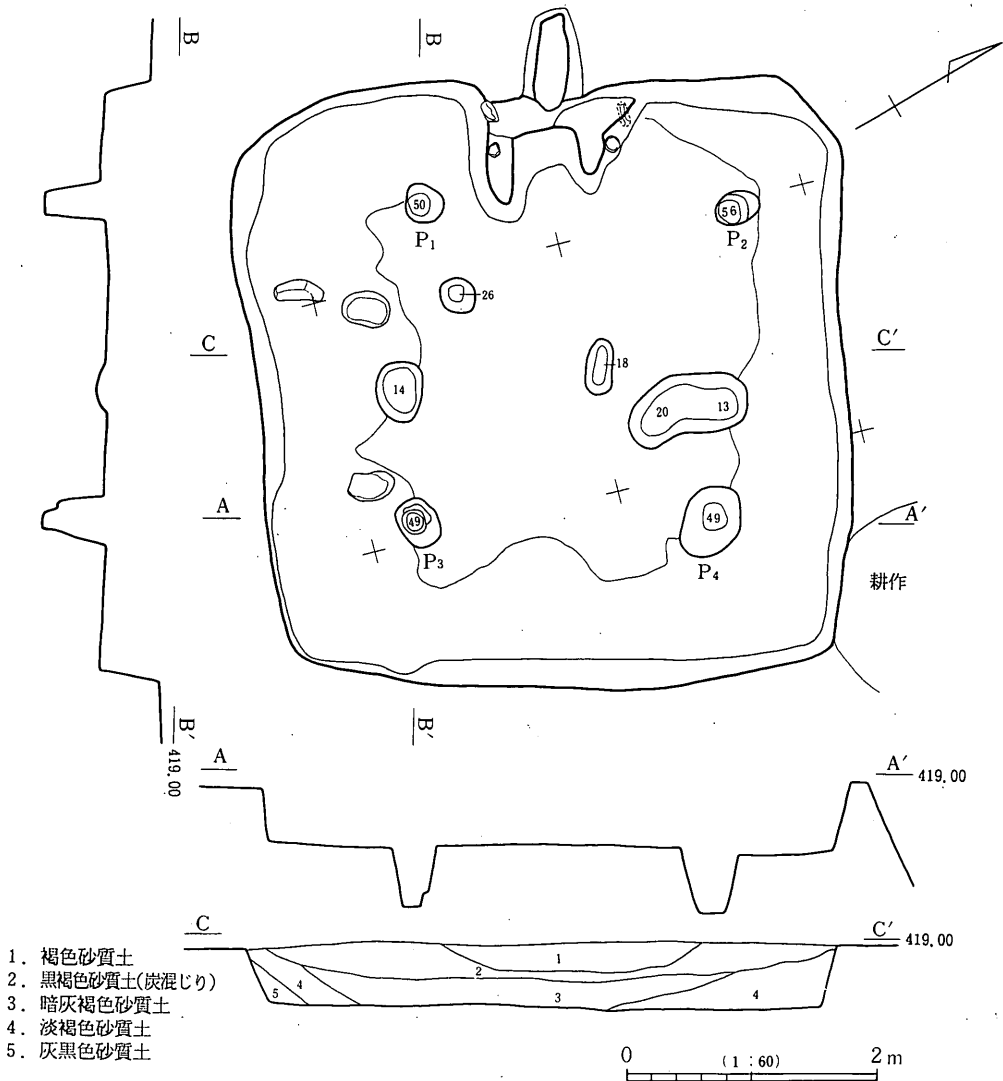
土器は土師器壺（1-2）、甕（1-3~16）・甌（2-1）・小型丸底土器（2-2~6）・坏（2-7~10）・高坏（2-11~16）・手づくね（2-17）、須恵器罍（2-18）・高坏（2-19）がある。

土師器壺は直線的に外反する口縁部を持つ（1-2）。甕は、外湾して外反する口縁部と球形に近い胴部を持つもの（1-3~5）、外反する口縁部のもの（1-6~8）、緩やかに外反する

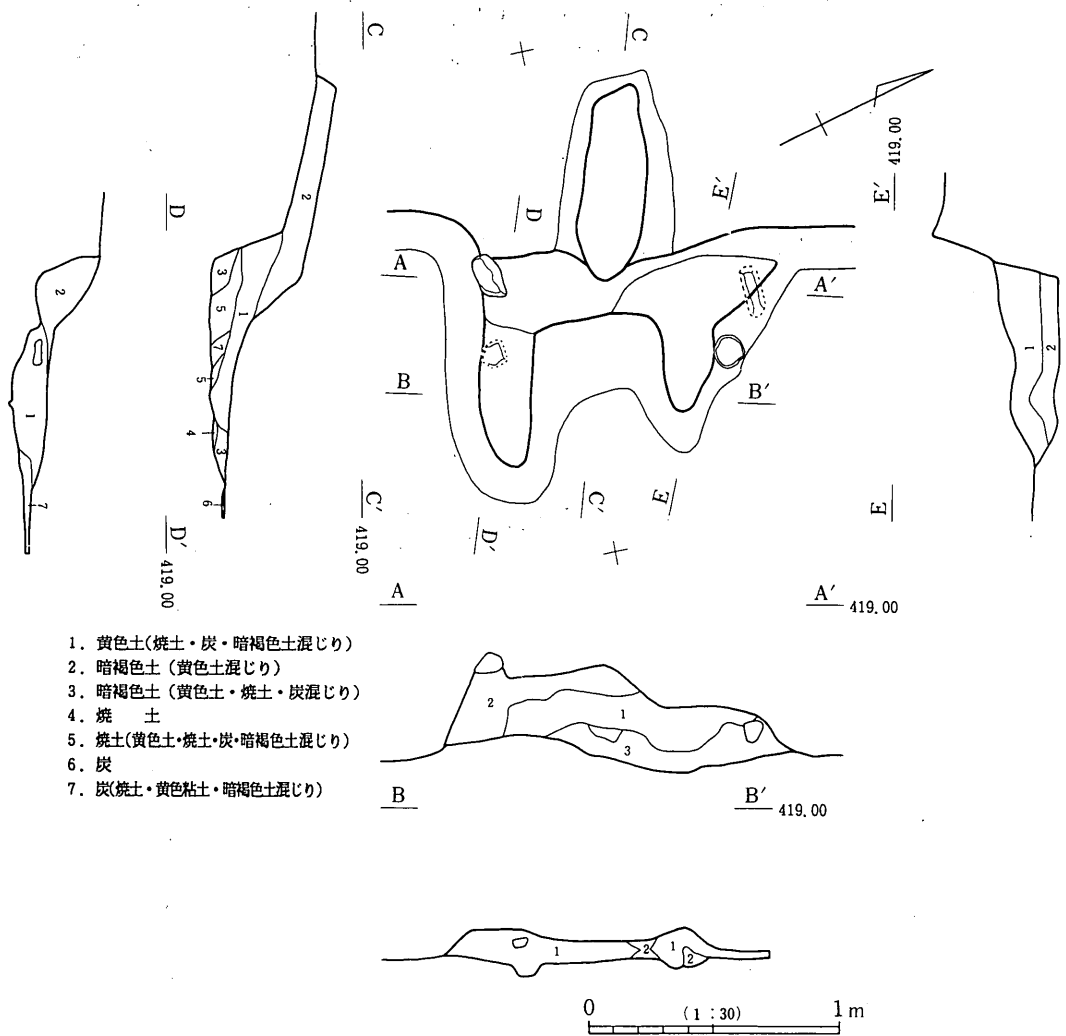
口縁部と細長い胴部を持つもの（1-9・10）がある。小型丸底土器は短く外反する口縁部とやや扁平な球形の胴部を持つ（2-2~6）。坏は、口縁部が直立気味なもの（2-7・10）・内傾するもの（2-8・9）があり、7~9は黒色土器である。高坏は破片が主体であり、溝址6等からの混入の可能性もある。

石器は、抉入打製石庖丁が3点（2-20~22）出土したが、この時期まで残存する可能性は少ない。

出土遺物より、古墳時代後期前半に位置づけられる。



挿図7 2号住居址



挿図8 2号住居址カマド

③ 3号住居址 (挿図9、第3・4・19・20図、図版6・7・28)

遺構 調査区中央付近のj-9を中心にして検出し、全体を調査した。溝址5に切られる。3.6×3.6mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN62°Wを示す。壁高は27~14cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は明褐色砂質土まで掘られ、一部たたき状だか全体に軟弱で不良である。主柱穴はP1~P4で、そのほかの穴の用途は不明である。カマドは北西壁中央に位置する石芯粘土カマドで、右袖の石で確認できた。左袖は石がなく土の違ひも確認できなかったので、掘り下げてしまった。焚口部の焼土はほとんど認められず、残存状態は極めて悪い。

遺物 土器・石器・鉄器があり、覆土中に礫とともに散在した。

土器は土師器甕(3-1・2)・甑(3-3・4)・高坏(3-5)、須恵器高坏(3-6、

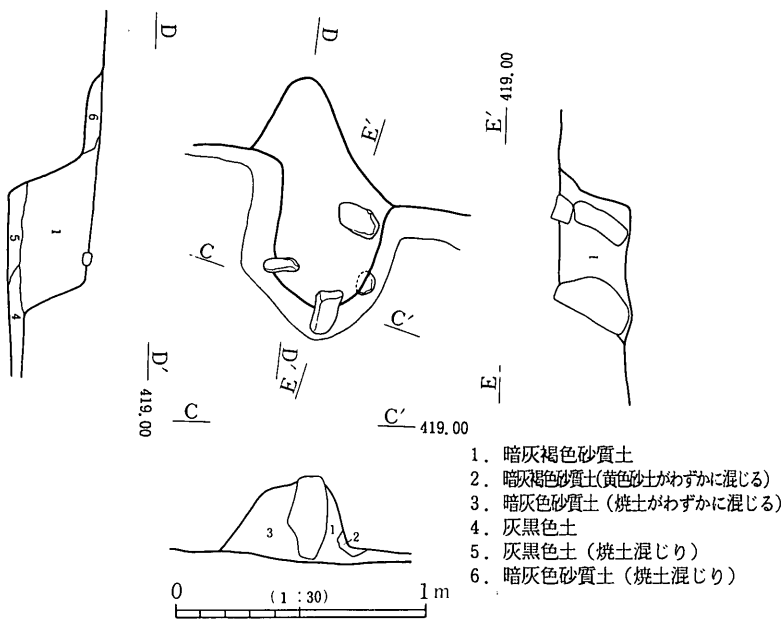
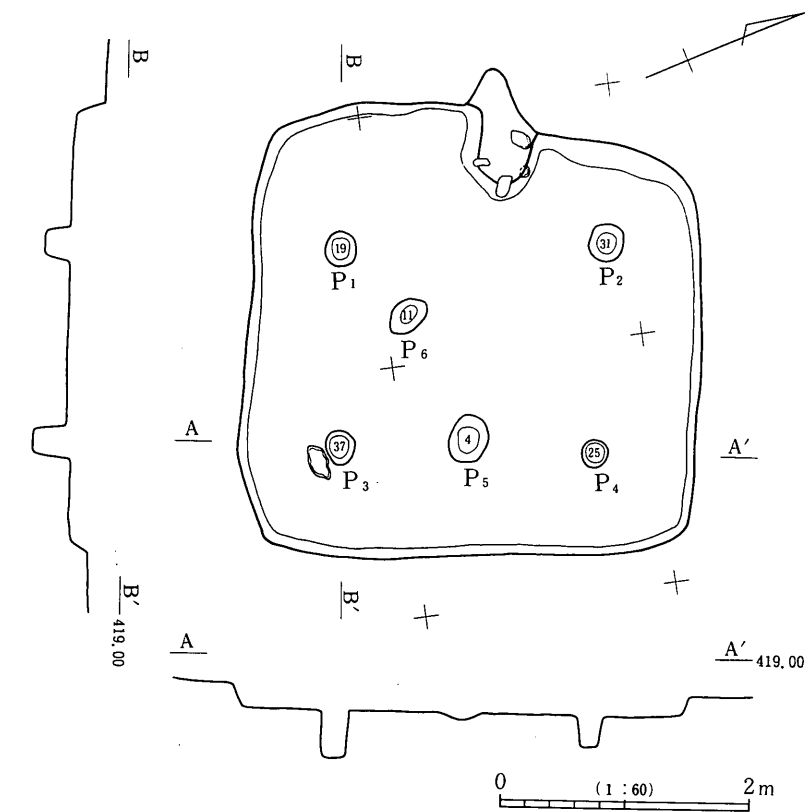


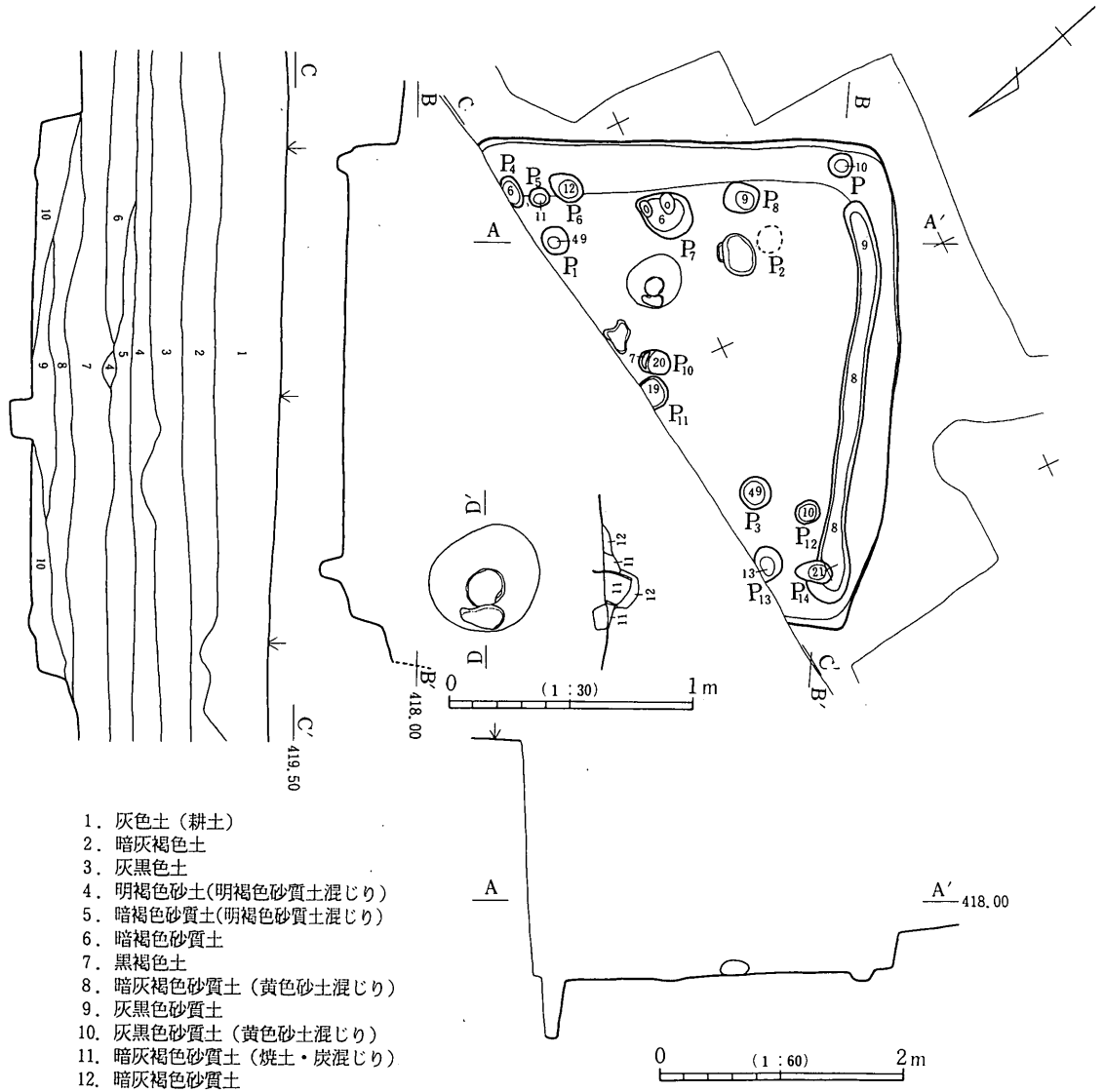
插图9 3号住居址

19-1)がある。19-1は溝址1・遺構外出土遺物と接合した。3-7は口縁部内面に竹管文が施文され、弥生土器の混入品と考えられる。

石器は編物用石錘(第4図)が9点あり、4の側面には使用痕が認められる。

鉄器はカマドから刀子の刃部(20-16)が出土した。他に、用途不明の鉄器片もあるが、保存状態が悪く図化できなかった。

出土遺物より古墳時代後期前半に位置づけられる。



挿図10 4号住居址

④ 4号住居址 (挿図10、第5図、図版8・29)

遺構 調査区の北東側s-12を中心にして検出した。北側が調査区域外のため、遺構の約半分を調査したにとどまった。3.9×3.4mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN228°Eを示す。壁高は41~28cmでほぼ垂直である。床面は後述するが壁際を除きはり床になっており、たたき状に堅く良好である。支柱穴はP1~P3であり、P2は遺構実測の際書き忘れてしまい、写真で位置・大きさを確認した。P10・P11は間仕切りの性格であると思われる。また、床面南東壁際に細線で示したはり床消失面と南西側に長さ325cm、幅20~30cm、深さ8~9cmの周溝的な施設があり、住居の拡張を示す。P2脇にある石は台石と思われる。炉址は南東側支柱穴中間のやや内側に位置する炉縁石を有する土器埋設炉で、床面を46×41cmに掘り凹め甕の胴部を用いている。炭・焼土ともあまり認められなかった。

遺物 土器・石器があり、いずれも壁際の床面上で出土している。

土器は壺(5-1~4)・甕(5-5~11)・高坏(5-12)がある。

壺は外反する口縁部が端部で『L』の字に折れて受け口状をなし、頸部に波状文を施す外来系土器(5-1)と、三河の影響を受けた外来系土器の広口壺(5-2)があり、後者は無文で胴部はナデ調整される。

甕は図示できたものは口縁部が折れ曲るように強く外反し、無文のものが多い。5-5は炉址の埋設土器である。

高坏は脚部で丁寧なヘラミガキ調整が施される。

石器は、有肩扇状形石器(5-13)・抉入打製石庖丁(5-14・15)がある。13の刃部にはロー状光沢物が付着しており、14の刃部とB面中央部に横方向の使用による磨滅痕が顕著に認められる。

出土遺物より弥生時代後期後半に位置づけられる。

⑤ 5号住居址 (挿図11・12、第6・7図、図版9・30)

遺構 調査区南西隅のg-7を中心にして検出し、全体を調査した。古墳時代前期後半の溝址6を切る。プラン検出に手間取ったため、時期の古い溝址6から調査しかつトレンチで南東壁を掘り下げてしまったので、平面形の把握に問題を残す。4.8×4.3mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN52°Wを示す。壁高は27~20cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は明褐色砂質土まで掘られ、一部にはり床が認められたが全体に軟弱で不良である。支柱穴はP1~P4で、そのほかの穴の用途は不明である。カマドは北西壁中央に位置する石芯粘土カマドで、4個の袖石を確認したが、本来の位置にあるものはない。焚口部の焼土は顕著に認められたが、全体の残存状態は不良である。

遺物 土器・石器があり、覆土中に礫とともに散在した。

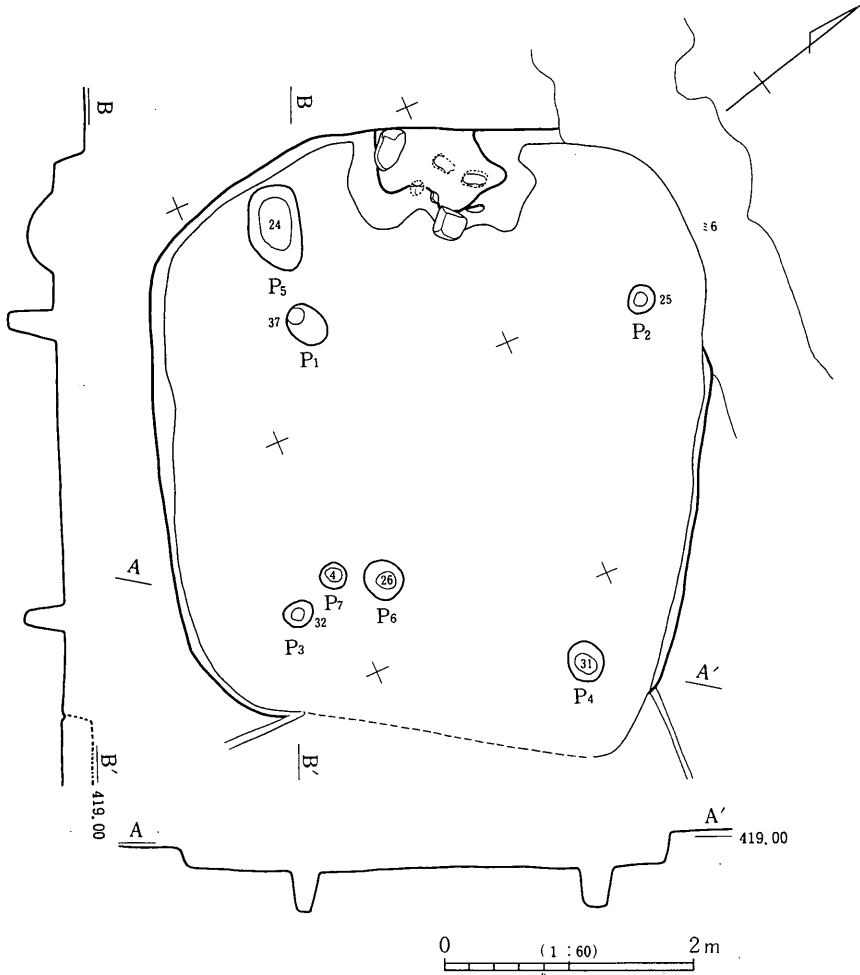
土器は、土師器甕(6-1~9)・甑(7-1)・坏(6-10~12)・高坏(6-13~19)があ

る。

土師器甕は外湾して外反する口縁部と球形に近い胴部を持つもの（6-1~3）である。坏は、わずかに扁平な球形を呈するもの（6-10・11）、底に綾を持って大きく外反する皿に近い形態のもの（6-12）があり、11・12は黒色土器である。高坏は、柱状の脚部か中ぶくれになるもの（6-15）とならないもの（6-13~16）がある。

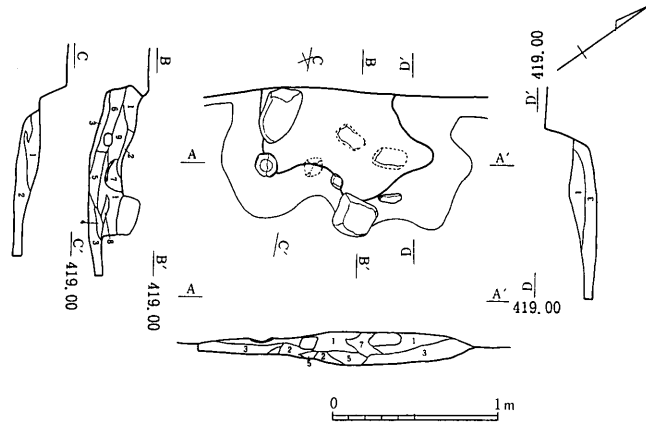
石器は、混入品と考えられる打製石斧（7-2）とほぼ全面使用された砥石の破片（7-3）がある。

出土遺物から古墳時代後期前半に位置づけられる。



挿図11 5号住居址

1. 褐色土（焼土混じり）
2. 暗褐色土（わずかに焼土が混じる）
3. 黒褐色土（黄白色砂土混じり）
4. 黒褐色土（炭混じり）
5. 焼土
6. 焼土（わずかに黄色粘土が混じる）
7. 焼土（褐色土混じり）
8. 黄色粘土
9. 黄色粘土（粘土・褐色土混じり）



挿図12 5号住居址カマド

⑥ 6号住居址（挿図13、第7・8図、図版10～12・31）

遺構 調査区南東側 i-14を中心にして検出し、全体を調査した。弥生時代後期の7号・8号住居址を切る。当初は1軒の竪穴住居址と考えて調査を進め、途中で2軒の重複であることが判明したので、南東・南西壁は把握できなかったが、土層観察によりその立上りと切り合い関係は確認できた。3.5×3.4mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN43° Wを示す。壁高は40～25cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。床面は大部分が7号住居址覆土中に黄色砂土ではり床され、たたき状に堅く極めて良好である。支柱穴はP1～P4で、P7は間仕切り用と考えられるが、そのほかの穴の用途は不明である。炉址は北西側支柱穴中間のやや内側のP2寄りに位置する炉縁石を有する土器埋設炉で、床面を74×68cmの楕円形に掘り凹め、底部を欠く甕を埋めている。土器の周辺に焼土が顕著に認められた。

遺物 土器・石器があり、出土量は多くない。

土器は、甕（7-4～7）・高坏（7-8）がある。

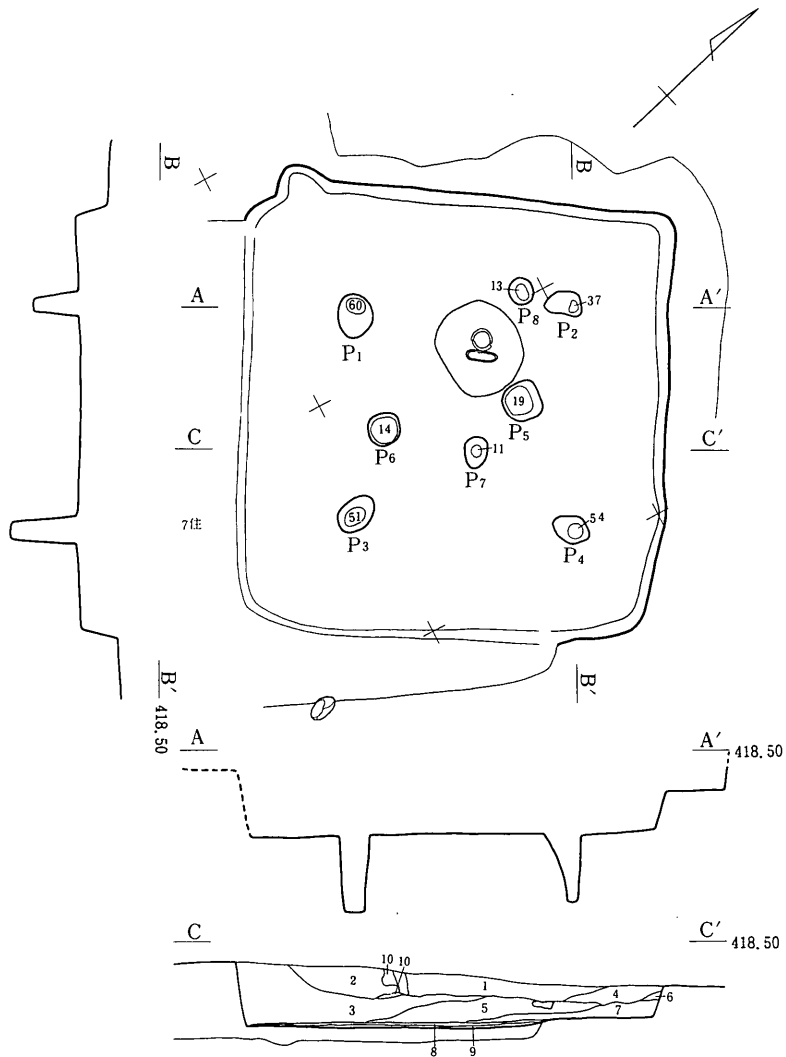
甕は口縁部が強く外反し、波状文が施文されるもの（7-4）と無文のもの（7-5・6）がある。前者は炉址の埋設土器で、覆土から出土した底部と接合して完形に復元できた。波状文は右回りで、2回の断絶が認められた。高坏はいわゆる欠山型の高坏で、外来系土器である。

石器は、打製石斧（8-1・2）・有肩扇状形石器（8-3～5）・横刃形石器（8-6）があり、1を除いてすべて破損している。

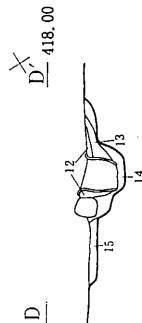
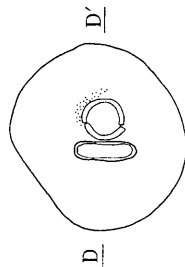
出土遺物より弥生時代後期後半に位置づけられる。

⑦ 7号住居址（挿図14、第8・9図、図版10・12・13・32）

遺構 調査区南東側 h-14を中心にして検出し、全体を調査した。北側を弥生時代後期後半の6号住居址に切られるが、深く掘られるので同址の床面下にも壁が確認できた。3.9×3.8mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN42° Eを示す。壁高は58～43cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。切り合い部分では17～13cmである。床面は全面黄色砂土層まで掘られ、一部でたたき状と



1. 暗灰色砂質土(黄色砂土が少し混じる)
2. 暗灰色砂質土
3. 灰黒色砂質土
4. 灰黒色砂質土(黄色砂土が少し混じる)
5. 灰黒色砂質土(炭混じり)
6. 黄褐色土
7. 黒褐色砂質土
8. 暗灰色泥質土
9. 黄色砂土(灰黒色砂質土混じり、はり床)
10. 灰白色砂土(粒が細かい)
11. 灰白色砂土(粒が粗い)
12. 暗灰褐色砂質土(焼土・炭混じり)
13. 焼土
14. 褐色砂質土
15. 暗灰褐色砂質土



挿図13 6号住居址

なるが、軟らかく状態は悪い。支柱穴はP1～P4で、P5・P9は入口施設と考えられる。炉址は北東側支柱穴中間に位置する炉縁石を有する土器埋設炉で、床面を40×38cmの円形に掘り凹め、ほとんど口縁部を欠く甕を埋めている。土器の周辺に炭土が認められ、それを除くと焼土が確認できた。南隅から南東壁際にかけて1.8×0.5mの範囲に、多量の礫が認められた。出土位置は南隅付近では高く徐々に低くなって北東側では床面上となる。礫の多い遺跡ではないので、意図的に入れられたと考えられるが、役割は不明である。

遺物 土器・石器があり、出土量は多くない。

土器は、壺(8-15)・甕(8-7～13)・高坏(8-14)がある

甕は口縁部が強く外反し、波状文や斜走短線文が施される。7は炉址の埋設土器で、わずかに口縁部が残っていて完形に図上復元できた。高坏はいわゆる欠山型の大型高坏で、外来系土器である。15の壺の底部は木葉痕があり、弥生時代中期からの混入資料と考えられる。

石器は、有肩扇状形石器(9-1)・抉入打製石庖丁(9-2)があり、後者は使用による磨滅痕が認められる。

出土遺物より弥生時代後期後半に位置づけられる。

⑧ 8号住居址 (挿図15、第9・10図、図版14・15・33)

遺構 調査区南東側j-16を中心にして検出し、全体を調査した。弥生時代後期後半の6号・9号住居址に切られる。3.9×3.8mの隅丸長方形の堅穴住居址で、主軸方向はN148°Wを示す。壁高は41～18cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。床面は全面黄色砂土層まで掘られ、たたき状に堅く良好である。支柱穴はP1～P4で、主軸方向に細長く検出され、割り材使用の柱が考えられる。そのほかの穴の用途は不明である。炉址は、南西側支柱穴中間に位置する地床炉で、58×52cmの楕円形でわずかに焼土が認められた。

遺物 土器・石器があり、出土量は多くない。

土器は、壺(9-3)・甕(9-4～9)がある。

壺は受口壺で、頸部に波状文・口縁部に刺突文が施される。甕は、口縁部がゆるやかに外反して波状文が3段施文されるもの(9-4)と台付甕(9-9)がある。前者は4号住居址覆土中の資料と接合した。

石器は、側面に剥離痕のある礫(9-10)・有肩扇状形石器(9-11・10-1)・有柄石器(9-12)・抉入打製石庖丁(10-2)・横刃形石器(10-3)・磨製石鏃の未成品(9-13)・同完成品の破片(9-14)・調整痕のある剥片(10-4)がある。

壺の形態は弥生時代後期後半に特徴的なものであるが、甕や台付甕は後期前半と考えられる。石器の磨製石鏃は後期後半で消滅すると考えられている。以上のように、二時期の資料が混在しているが、弥生時代後期前半の可能性が高いと考えている。

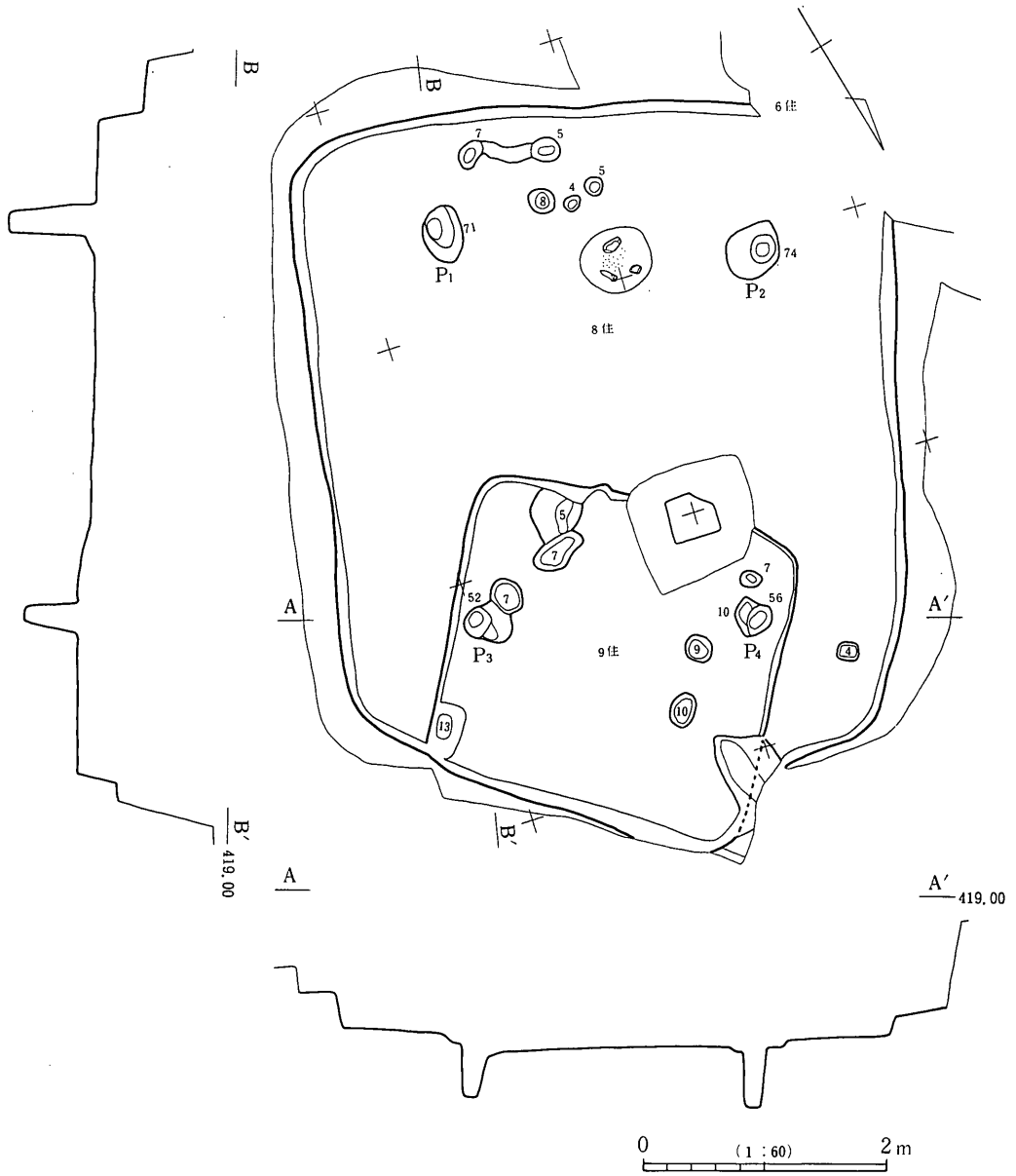


插图15 8号·9号住居址

⑨ 9号住居址 (挿図15、第10図、図版14・15・33)

遺構 調査区南東側 k-16を中心にして検出し、測量用の基準杭の設置箇所を除いて全体を調査した。弥生時代後期の8号住居址を切る。2.7×2.6mの隅丸方形の竪穴住居址で、長軸方向はN45°Wを示す。壁高は33cm前後を測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は全面黄色砂土層まで掘られ、全体に軟らかく状態は悪い。主柱穴は確認できず、用途の特定できる穴もない。炉址はない。床面上や覆土中に炭が認められ火事と考えられる。炭は細かいものが主で、床面上全体に広がる傾向が確認できた。

遺物 土器・石器があり、出土量は少ない。

土器は、口縁部が強く外反する無文の甕(10-5)・甕底部(10-6・7)・高坏脚部(10-8)がある。

石器は、有肩扇状形石器(10-9・10)・横刃形石器(10-11)がある。

竪穴住居址の規模が小さく、炉址や主柱穴がない等の住居址構造が特殊であることや、遺物出土の状況も通常の竪穴住居址とは異なる。以上の点から、特別な役割を果たした施設と考えられるが、その用途等を特定できる資料は得られなかった。

出土遺物から弥生時代後期後半に位置づけられる。

2. 溝 址

① 溝址1 (挿図16、第10・11・20図、図版17・34)

遺構 調査区西側中央部 k-7から東側で、明褐色砂質土層に明褐色砂土・灰白色砂土の落ち込みがあり確認した。遺構検出面が砂質であるので溝址覆土との区別がつけ難く、結果的に掘り過ぎ部分が生じた可能性もある。調査延長は約32mで、北側に延長する。西側から k-14付近までは南東方向に延長し、方向を東に曲がって4m続き、更に北の方向に曲がって用地外まで伸びている。幅・深さ共一定でなく断面形も様々で、深くえぐられた箇所や幅の広い部分が認められる。とくに、溝址4と重複する中央部分は幅が広がり、両者の区別がつけられなかった。屈曲する箇所の4mは溝が分流して2本となる。

遺構の状況から小沢川の痕跡と考えられ、西から北に流れたものといえる。ただし、遺物が多く出土しており、すべてが流れ込みによるものとは考えられないので、生活用水路としての利用も十分考えられる。

遺物 土器・石器・鉄器があり、出土量は比較的多い。

土器は、土師器甕(10-12~16)・高坏(11-1・2)、須恵器蓋坏(11-3・4・7)・高台坏(11-8~10)・ヘラ切り坏(11-12)・糸切り坏(11-13)・盤(11-11)、灰釉陶器長頸壺(11-5)がある。

石器は、打製石斧が2点(11-14・15)ある。

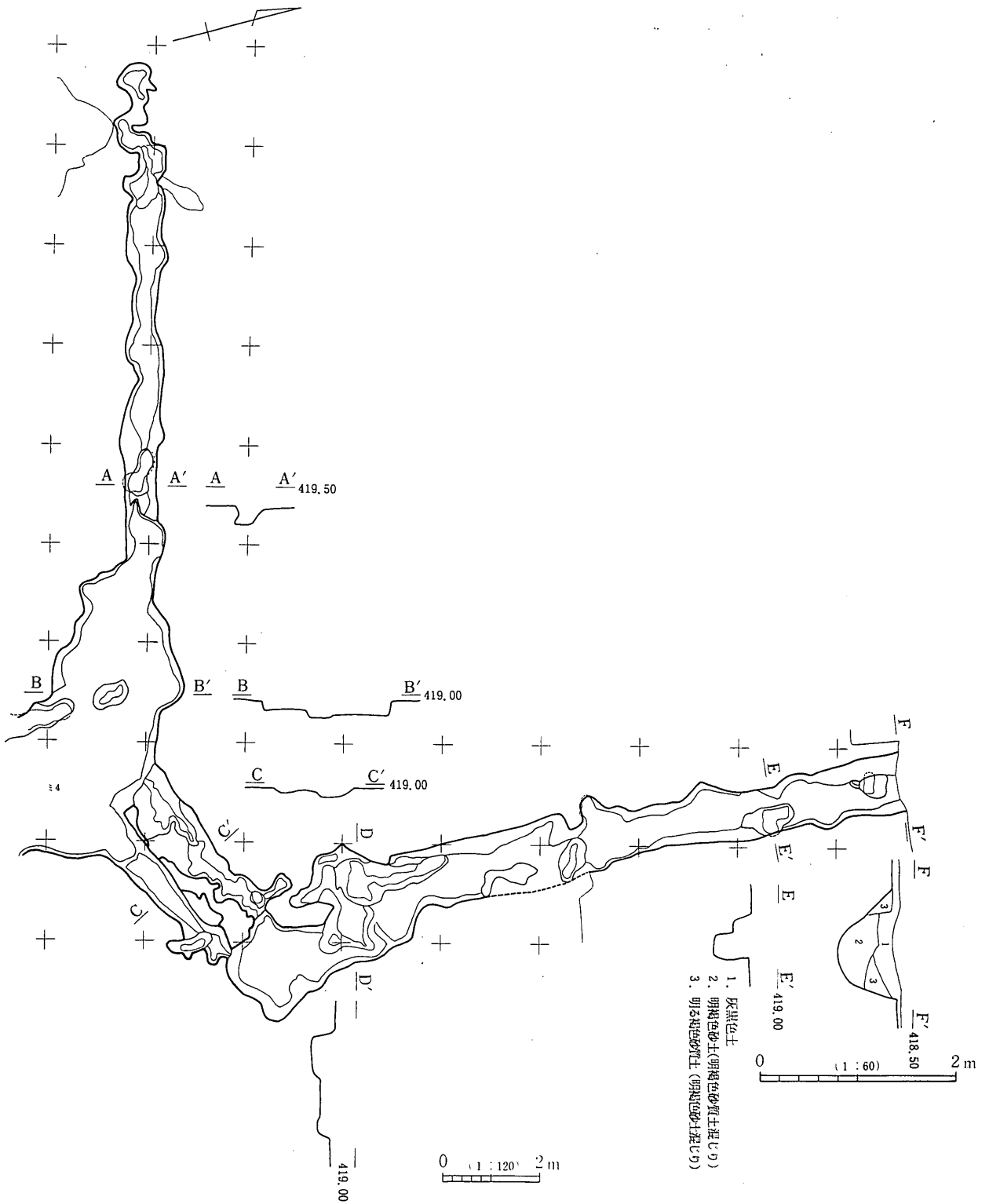


插图16 溝址 1

鉄器は、鉄鏃（20-17）・器種不明の鉄片 2 点（20-18・19）と鉄滓の小破片が 4 点あり、3 点（20-20～22）を図化した。

層位から確実に紛れ込み遺物と考えられる打製石斧を除くと、古墳時代後期前半と奈良時代の 2 時期の遺物がみられる。前者は周辺からの出土も多く、確実に本址に伴うとは判断できない。よって、奈良時代に位置づく可能性が高い。

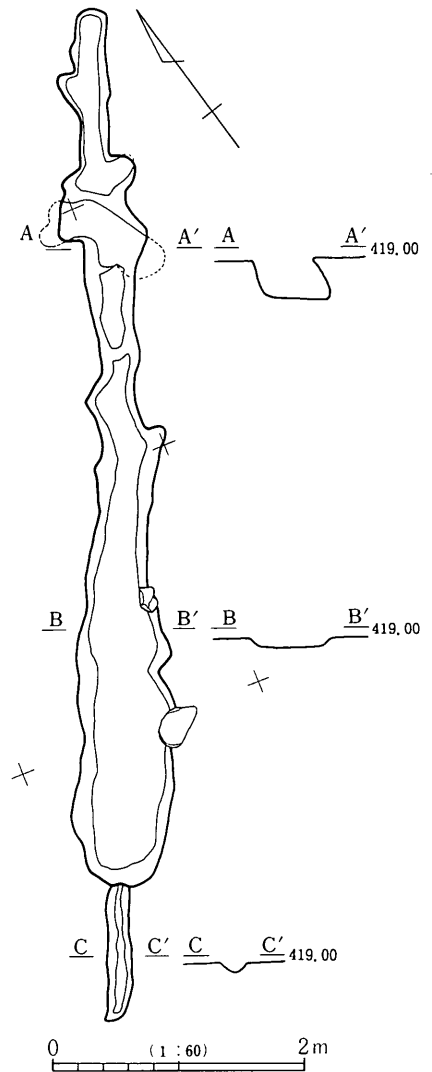
② 溝址 2 （挿図17、第12図、図版18）

遺構 調査区西側 k-6 から n-7 にかけて検出した。調査延長は 8 m で、両側は確認できなかった。ほぼ直線的に N35° E の方向を示す。幅 100～20 cm ・ 深さ 37～4 cm を測り、断面形は不定形である。覆土は灰白色砂土が主体で、容易に検出できた。遺跡の状況から自然の川の流路であり、短期間に流れたと考えられる。両側は確認できなかったが、調査層位の問題もあり、延長していたと考えている。

遺物 土器の破片が少量出土した。

土師器甕（12-1～5）・高坏（12-6）である。

出土遺物から古墳時代前期後半に位置づけられる。



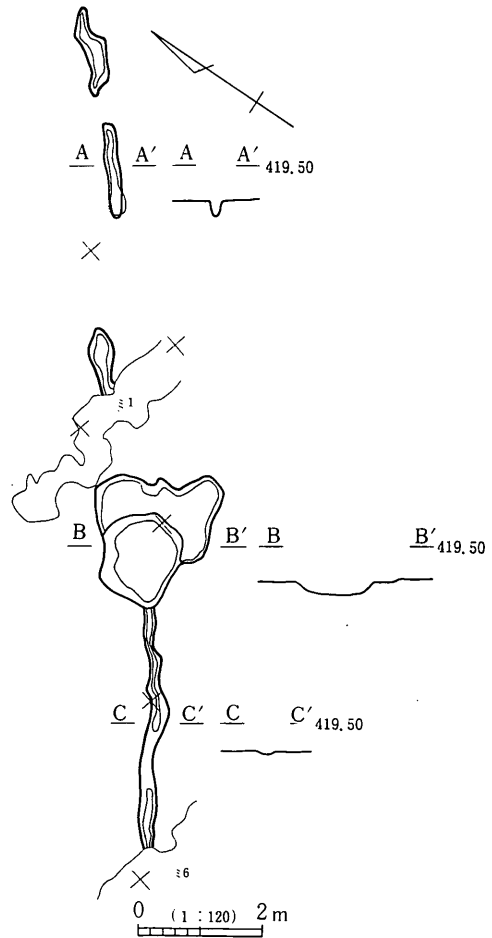
挿図17 溝 址 2

③ 溝址3 (挿図18、図版18)

遺構 調査区西側 i-6 から n-10 にかけて検出した。奈良時代の溝址1に切れ、古墳時代前期後半の溝址6と重複する。調査延長は13.3mで、途中で2箇所の断絶がある。わずかに蛇行しながらN53° Eの方向を示す。幅40~10cm・深さ5cm前後から31cmを測り、断面形は不定形である。途中のj・k-7付近では不定形に広がり、深さは13cmを測る。ただし、この箇所は若干掘り過ぎた可能性がある。覆土は灰白色砂土が主体で、容易に検出できた。遺跡の状況から自然の川の流路であり、短期間に流れたと考えられる。両側や途中で確認できない箇所があるが、溝址の底部が確認できたということもあり、更に延長していたと考えている。

出土遺物はない。

確定した時期を示すことはできないが、古墳時代の可能性が高い。



挿図18 溝址3

④ 溝址4 (挿図19、第12・13図、図版19)

遺構 調査区南東側で検出した。不手際から h-16 から南側が図化できていないが、蛇行しながら続いていた。奈良時代の溝址1と重複し、覆土の違いが区別できなくて同時に掘り下げてしまった。また、覆土と検出層の区別が難しく、結果的に掘り過ぎてしまった箇所があるかもしれない。延長は約15.5mで、蛇行しながらN30° Wの方向を示す。幅400~60cm・深さ20~33cmを測り、断面形は不定形であり、一部で二段の掘り込みをなす。覆土は明褐色砂土で、検出層の明褐色砂質土と明確な差がなかった。規格性のない遺構の状況から自然の川の流路であり、短期間に流れたと考えられる。

遺物 土器があり、すべて破片だが出土量は比較的多い。

土器はすべて土師器で、壺(12-7~9)・甕(12-10~16)・小型丸底土器(12-17・18)・高坏(12-19~21・13-1~9)がある。

壺は、有段口縁部のもの（12-7）と直口壺（12-9）である。甕は、くの字口縁の平底甕で、胴部は球形を呈すると考えられる。小型丸底土器は、口縁部が短く外反する。高坏は、柱状の脚部をもつものに限られる。

出土遺物から古墳時代前期後半に位置づけられる。



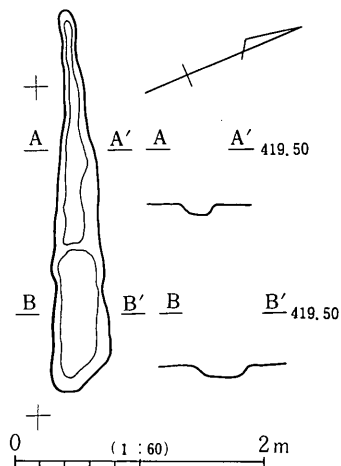
挿図19 溝 址 4

⑤ 溝址 5 (挿図20、図版19)

遺構 調査区中央部 k-9・10で検出した。古墳時代後期の4号住居址を切る。調査延長は3mで、N77°Wの方向を示す。幅44~10cm・深さ9~4cmを測り、断面形は逆台形をなす。覆土は灰白色砂土が主体で、容易に検出できた。遺構の状況から自然の川の流路であり、その底部を把握したと考えられる。

出土遺物はない。

確定した時期を示すことはできないが、切り合い関係から古墳時代以降に位置づけられる。



挿図20 溝址 5

⑥ 溝址 6 (挿図21、第13~18・20図、図版20~23・35)

遺構 調査区南側を横断する形で検出した。古墳時代後期前半の2号・5号住居址に切られる。調査延長は約25mで、両側に延長する。方向はほぼ直線的で、N68°Wを示す。幅126~42cm・深さ48~15cmを測り、断面形は様々で深くえぐられた箇所や二段の部分が認められる。覆土は灰白色砂土が主体で、容易に検出できた。遺構の状況から小沢川の痕跡と考えられ、北西から南東に流れたものといえる。溝内から多量の遺物が出土しており、その出土状況から流れ込みによるものとは考えられない。方向も一定していることも考慮すれば、集落内に引かれた生活用水路と考えられる。

遺物 土器・石器・鉄器があり、出土量は極めて多い。

土器は、土師器壺(13-10・11、14-23)・甕(13-13~16・14-1~10・15-1~9)・小型丸底土器(14-11~22)・鉢(14-24~26)・高坏(15-10~19、16-1~19、17-1~23)がある。

壺は直口壺で、小型丸底土器に含めた中の14-11・14~16は壺に含むべきものかもしれない。甕はくの字口縁で球形の胴部を呈する。鉢は、口縁部が外反しするものと(14-24)胴部に段を持つもの(14-25)・底部から内湾して立ち上がるもの(14-26)がある。高坏が最も多く、そのほとんどが有稜の坏部と柱状の脚部を持つものである。

石器は、横刃形石器(18-1・2)・砥石(18-3)・石製紡錘車(18-4)・環状石製品(18-5)がある。

鉄器は、鉄鎌片(20-23)・刀子片(20-24)がある。

出土遺物から古墳時代前期後半に位置づけられる。

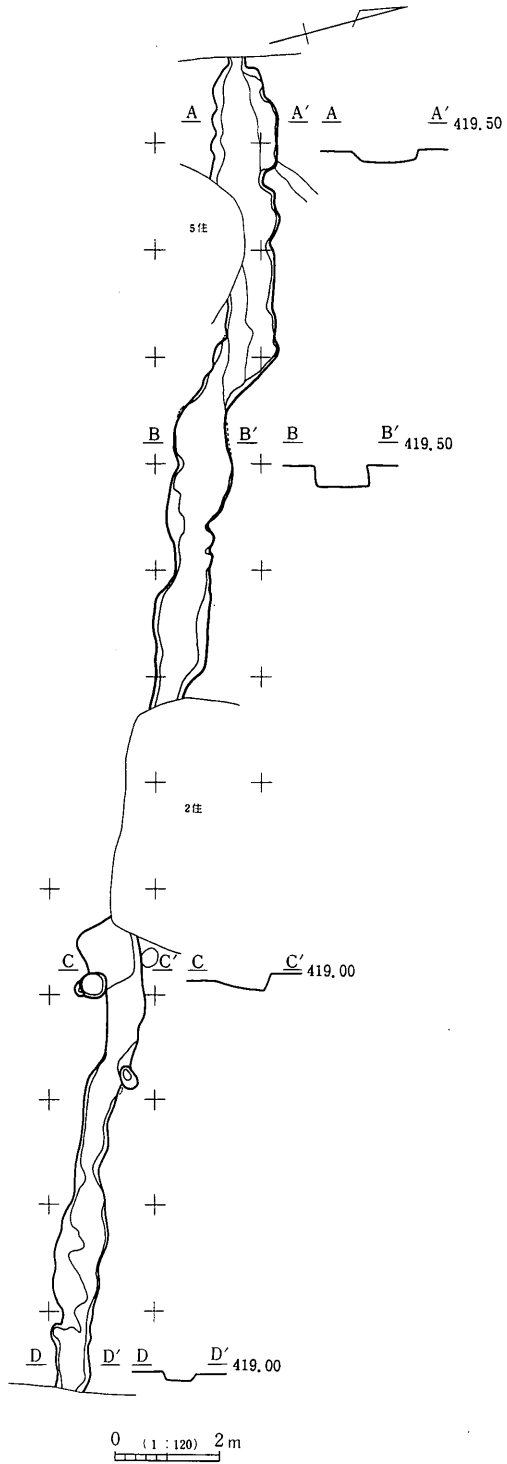


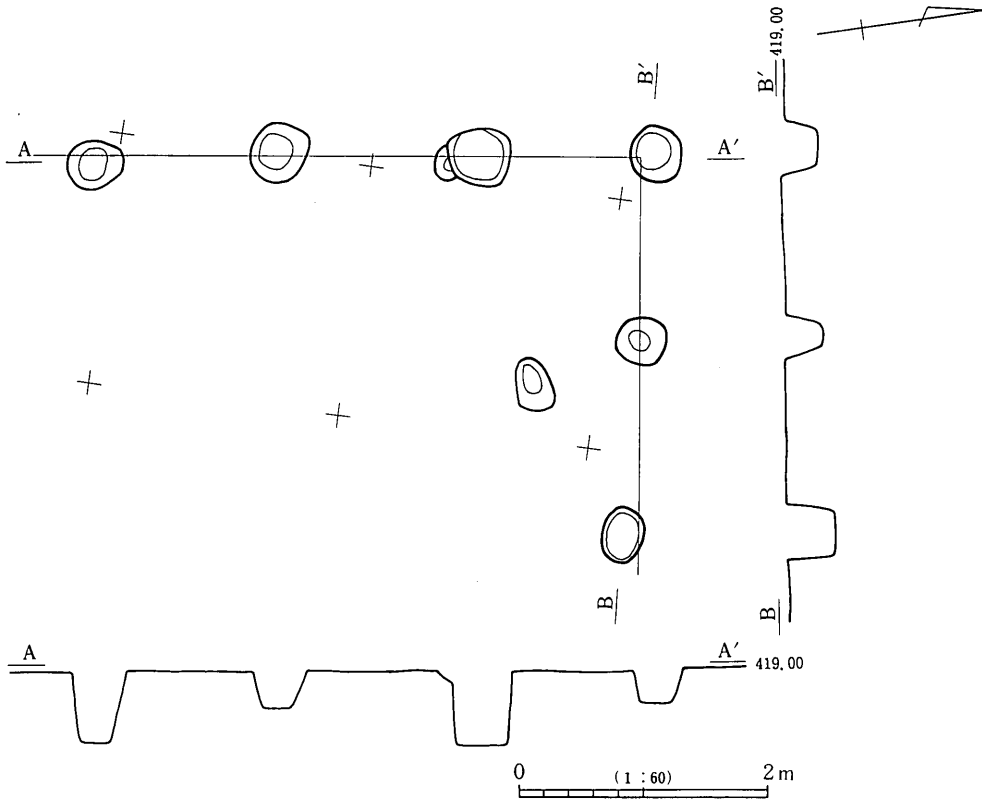
插图21 溝址 6

3. 掘立柱建物址・柱穴群

① 掘立柱建物址 1 (挿図22、図版24)

遺構 調査区南東側で6個の柱穴がし字状に並び建物址ととらえた。東側の穴は検出できなかった。2×3間以上の掘立柱建物址で、調査範囲での長軸方向はN8°Eを示す。柱掘り方は直径50~32cmの不整形円形を呈し、深さは60~29cmを測る。ただし、覆土の見極めが難しかったので、掘り過ぎた穴もあると考えられる。

出土遺物はなく時期は不明であるが、中世の可能性が高いと考えている。



挿図22 掘立柱建物址 1

② 柱穴群 (挿図23、図版25)

遺構 調査区南側建物址1の西側に柱穴が集中して検出した。掘立柱建物址と考えて調査を進めたが規格性が認められなかったので、柱穴群とした。直径70~28cmの不整形円形を呈し、深さは46~16cmを測る。ただし、掘り過ぎの穴があると考えられる。穴の検出が難しかったことを考慮すれば、まだ穴があった可能性があり、掘立柱建物址の穴の一部である可能性が高い。

出土遺物はなく時期は不明である。

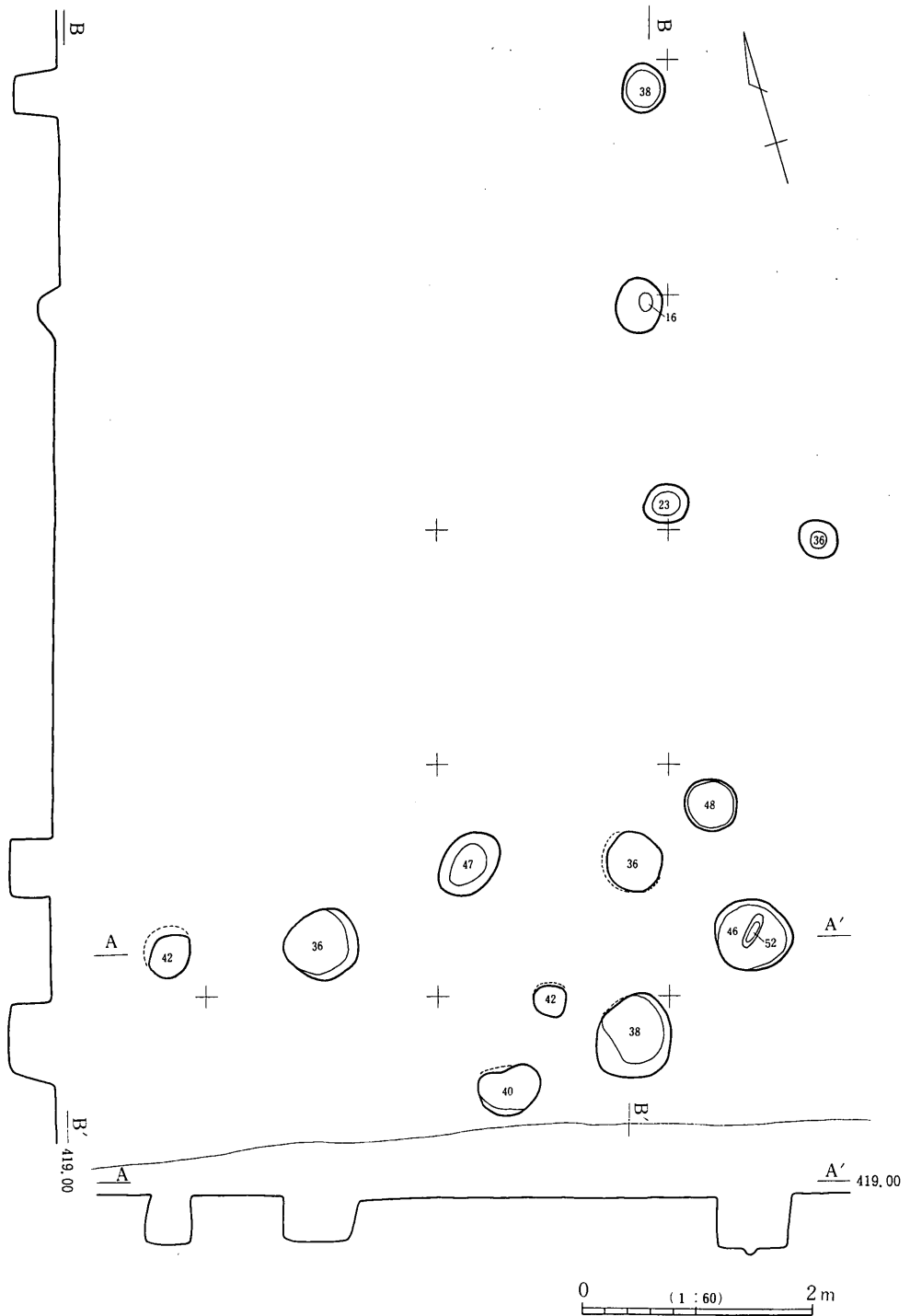


插图23 柱穴群

4. 遺構外出土遺物

すべてを図化できなかつたので、特徴的なものを選択して掲載した。最も出土量の多かった古墳時代の土師器はすべて省略し、弥生時代の土器も省略した。

① 縄文土器 (第18図)

6号住居址付近の黄色砂土上面からまとまって出土した。

18-7~12は縄文時代中期後半の深鉢片で、沈線と縄文が施される。18-6は縄文時代早期の条痕文系土器の可能性はある。

② 須恵器 (第18・19図)

明褐色砂質土からの出土がほとんどである。

時期は古墳時代と奈良時代の2時期のものがある。前者は蓋坏(18-13~16)・高坏(19-2)で、後者は高台坏(19-3・4)・短頸壺(19-5)である。

③ 土製品 (第19図)

細い棒状器具で刺突された土製品(19-6)がある。

④ 石器 (第19・20図)

完形品や半完形品はすべて図化した。下層の黒褐色土からの出土が多い。

打製石斧(19-7)・有肩扇状形石器(19-8~11)・抉入打製石庖丁(19-12~14、20-1~4)・横刃形石包丁(20-5)・磨製石鏃未成品(20-6)・同完成品片(20-7)・環状石器(20-8)・有孔円板状石器(20-9)がある。

IV ま と め

今次調査によって検出された遺構・遺物は、すでに述べてきたとおりである。時間などの制約により一部遺物の資料化ができず、十分な説明や検討が加えられてないのは遺憾である。ここでは、調査によって得られた成果・問題点を指摘してまとめとしたい。

これまで、上郷町における集落の発掘調査は、大明神原遺跡（上郷町教育委員会1985・1986A・1990）・高松原遺跡（飯田高等学校1977・上郷町教育委員会1984）・垣外遺跡（上郷町教育委員会1989A）に代表されるように、いわゆる上段の洪積段丘面を主体に行われてきた。飯田・下伊那全体を見ても、同様な傾向を指摘することができる。しかし、近年恒川遺跡群（飯田市教育委員会1986）が契機となって、下段の沖積段丘の大規模調査が開始され、その様相が明らかになってきている。上郷町では、矢崎遺跡（上郷町教育委員会1988A）・兼田遺跡（1988B）がその端緒といえる。それらの成果をみれば、各時代にわたり新しい知見を提供し、上段とは異なった様相が明らかになりつつある。そうした中で本遺跡の発掘調査は、過去に遺物が多く拾われているとの記録が残されており、南条地区の本格的集落調査も初めてであり、様相解明のてがかりとなると考えられた。発掘調査の結果、本文で述べたように弥生時代・古墳時代の集落の一端が明らかとなり、縄文時代から中世に至るまでの遺物が得られたわけで、不十分ではあるが当初の目的は達成できたと考えている。

集落について

沖積地なのである程度予想はしていたのであるが、遺構検出面の見極めが難しく、かつ生活面が複数認められたので、下層調査が一部に限られてしまった。そうした限定はあるが、まず集落について考えてみたい。

竪穴住居址が検出された時期は上層の古墳時代後期・中世と下層の弥生時代後期である。上層に関していえば、調査区内におけるすべての竪穴住居址は把握できたが、下層に関していえば、一部に限られる。

古墳時代の竪穴住居址は調査区の南側に集中する傾向が認められる。土器の様相から見て、同一の時期に営まれたと考えられ、該期集落の北端を調査した可能性が高い。北側は、座光寺境の土曾川自然堤防上の微高地まで、広い範囲の湿地帯が続き上郷町随一の稲作地帯であり、該期でも同様であったと考えられる。それは、不十分ではあるが、棚田遺跡（上郷町教育委員会1986B・1987）・ヒエ田・一丁田遺跡（上郷町教育委員会1989B）の調査結果からも推測することはできる。南側は、飯田松川の自然堤防上に至るまで遺跡が連続し、南条天神塚をはじめとして古墳が集中する箇所である。生産地に北面する微高地に集落を構築し、ここから松川までの間は、粗密あるとしても集落域と考えられる。そして、その端の段丘面を中心にして古墳を構築したものと

いえる。

集落が営まれる直前の古墳時代前期後半は、溝址が認められただけである。しかし、包含層も含めて多量の遺物が得られており、周辺には集落が構築されている可能性は高い。

弥生時代後期は何度も述べたように、一部の調査に止まってしまった。調査区内に他の住居址が存在する可能性は高いが、限定された中でも得られた情報は貴重である。6号～9号住居址は近接した位置で検出されており、一時期の集落ではないことが確実である。主体は後期後半であるが、8号住居址は後期前半である可能性が高く、後期全般にわたる集落である可能性を指摘したい。上段の弥生集落は、多くは1時期もしくは2時期くらいで集落が断絶するのに対し、長期間に利用が考えられ当遺跡の状況は、下段地帯の特徴といえるかもしれない。例えば、松川町の的場遺跡（松川町教育委員会1973）や恒川遺跡群等を挙げることができる。いずれも、広い水田可耕地が周辺に広がっており、稲作との深い結び付きをうかがえる。いわば、高い生産力を備えた沖積段丘面に立地する集落が、拠点的な役割を果たしていたことが想定できる。それは、下段地帯に連続して存在するのではなく、間隔を置くと考えられ、その一つに当遺跡が該当するかもしれない。これらは資料を積み重ねていくことで検証可能で、その一助となると考える。

遺構検出面について

上下2層にわたり遺構検出面が見られ、その間に70～40cmほどの厚い堆積が認められた。沖積地なので当たり前かもしれないが、その厚さには驚かされた。たった200年足らずの間の堆積であり、古墳時代から中世までは、ほぼ同一面で把握できたことを考えれば、この間の堆積が大きかったことを物語っている。今後、同様立地条件の遺跡調査において考慮されなければならない視点といえる。

1号住居址の炭化米について

科学的な分析は近藤武晴氏の報文を参照いただくとして、ここでは出土状態から推測できることを考えてみたい。すべての整理が済んでいないのでどれ程の量が出土したのかという基本的なデータが欠落している。しかし、現場から得られた情報でも推測可能な部分も多い。おおよそ半分の調査にもかかわらず、大量の炭化米が出土したのは、遺構が通常の竪穴住居址ではなく倉庫的な用途だったことが考えられる。ただし、単独の検出であり、掘立柱建物址が同じ時期と想定しても、集落構成を推察するには材料が少なすぎる。しかし、高床倉庫以外にもこうした役割の遺構がある可能性が考えられることが判明したのは、成果といえる。

遺物について

遺構や遺構外から大量の遺物が出土した。主体は、弥生時代後期・古墳時代前期後半・古墳時代後期前半・奈良時代で、土器と石器がおもなものである。しかし、どの時期をとっても断片的な資料で全組成を示し得るものではない。

弥生時代後期でいえば、4号住居址出土の外来系土器の広口壺は、当地方でも類例が少ないので貴重な資料といえる。古墳時代後期は、まだ当地方の報告例が少なく土器の編年的研究もこれ

からである。よって、詳細な位置づけはできなかったが、後期前半と考えた。その根拠は、胴部が丸みを帯びた甕や半球形の坏の存在からである。しかし、一部では溝址からの紛れ込み遺物と考えられるものも含んでおり、良好な資料の蓄積を待って再検討する必要がある。

今次調査によって得られた成果・問題点について記してきたが、十分に整理できたものでなく、思いつくままに述べたにすぎない。今後の調査に生かしていきたい。

おわりに、埋蔵文化財の保護に深い理解を示された丸山俊一氏と、貴重な時間を割いて石器の実測をしていただいた桜下光男氏、炭化米の分析をいただいた近藤武晴氏にお礼を申し上げます。

[引用・参考文献]

- | | | |
|-------------|-------|--------------------|
| 飯田市教育委員会 | 1986 | 『恒川遺跡群』 |
| 飯田高等学校 | 1977 | 『高松原』 |
| 上郷町教育委員会 | 1984 | 『高松原Ⅱ』 |
| 上郷町教育委員会 | 1985 | 『黒田大明神原』 |
| 上郷町教育委員会 | 1986A | 『黒田大明神原Ⅱ』 |
| 上郷町教育委員会 | 1986B | 『南条棚田遺跡Ⅰ』 |
| 上郷町教育委員会 | 1987 | 『南条棚田遺跡Ⅱ』 |
| 上郷町教育委員会 | 1988A | 『矢崎遺跡』 |
| 上郷町教育委員会 | 1988B | 『兼田遺跡』 |
| 上郷町教育委員会 | 1989A | 『ツルサシ・ミカド・増田・垣外遺跡』 |
| 上郷町教育委員会 | 1989B | 『ヒエ田・一丁田遺跡』 |
| 上郷町教育委員会 | 1989C | 『中島・矢崎遺跡』 |
| 上郷町教育委員会 | 1990 | 『大明神原遺跡Ⅲ』 |
| 下伊那地質誌編集委員会 | 1976 | 『下伊那の地質解説』 |
| 松川町教育委員会 | 1973 | 『的場』 |

付 編

1号住居址出土炭化米の形態的見地からの分析

近 藤 武 晴

1. はじめに

日本に於ける水稻の作付は、弥生時代の後期にはすでに本州の最北端にまで作付けされていた。そして、当時作られた稲は現在われわれが作っている稲と同様に、丸形のいわゆる日本稲であったと云われている。

しかしながら、日本各地にはその当時から多くの系統の稲が栽培されていたと云う報告がある。その一部として現在、古代米などと呼ばれ「…神社米」などという名前で幾つかの品種が残っている。これはいわゆる赤米と呼ばれているもので、現在の白い米とは異なり米粒自体が赤味を帯びているものである。そしてこの赤米にはインド稲のように粒形比（長／幅比）が大きいものと、比較的小さい日本米がある。

この様に当時も現在のように多くの品種があったと考えられているが、今回出土した炭化米について形態的見地からの分析を行い当時の水稻栽培品種について考察を行った。

2. 調査方法

炭化米の粒長、粒幅をノギスにより測定し粒形比（長／幅比）を求める。

3. 結 果

図1 炭化米調査粒形比度数分布

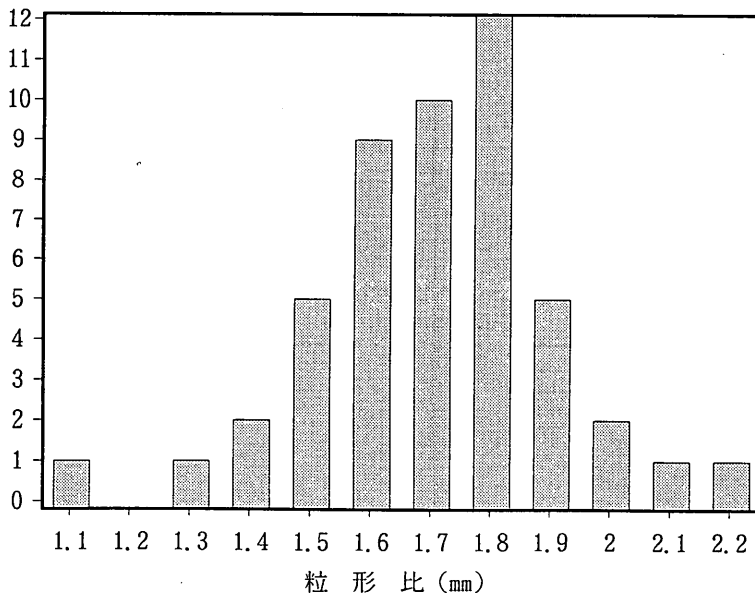


表1 粒形比度数分布

粒形比階級	1.1	1.2	1.3	1.4	1.5	1.6	1.7	1.8	1.9	2.0	2.1	2.2
粒形比度数分布	1	0	1	2	5	9	10	12	5	2	1	1

・平均粒形比 1.65

4. 考 察

まず、粒形による日本型とインド型との判定区分のことであるが、元来厳密には日印両型の区分は粒形だけでは完全ではない。しかし、この考え方を許容した場合、今の考古学では短粒型と長粒型の境界を概ね2.0あたりに置いている場合が多い。今回もその考え方を適用していることを前提としていきい。

表2 福岡県小郡町出土炭化米

分類	粒長	粒幅	長／幅
インド型1	5.6	2.6	2.18
2	5.0	2.4	2.14
日本型1	4.7	2.9	1.65
円粒型1	4.8	3.6	1.56
2	4.2	3.2	1.40

表2に示したのは福岡県小郡町での郡衙址発掘の際奈良時代の建物といわれる「正倉掘立柱」の遺構のそばで大量に発見された炭化米の調査結果である。これと今回出土した上郷町の炭化米を比較してみると、平均粒形比では1.65と福岡県出土炭化米の日本型に合致する値である。

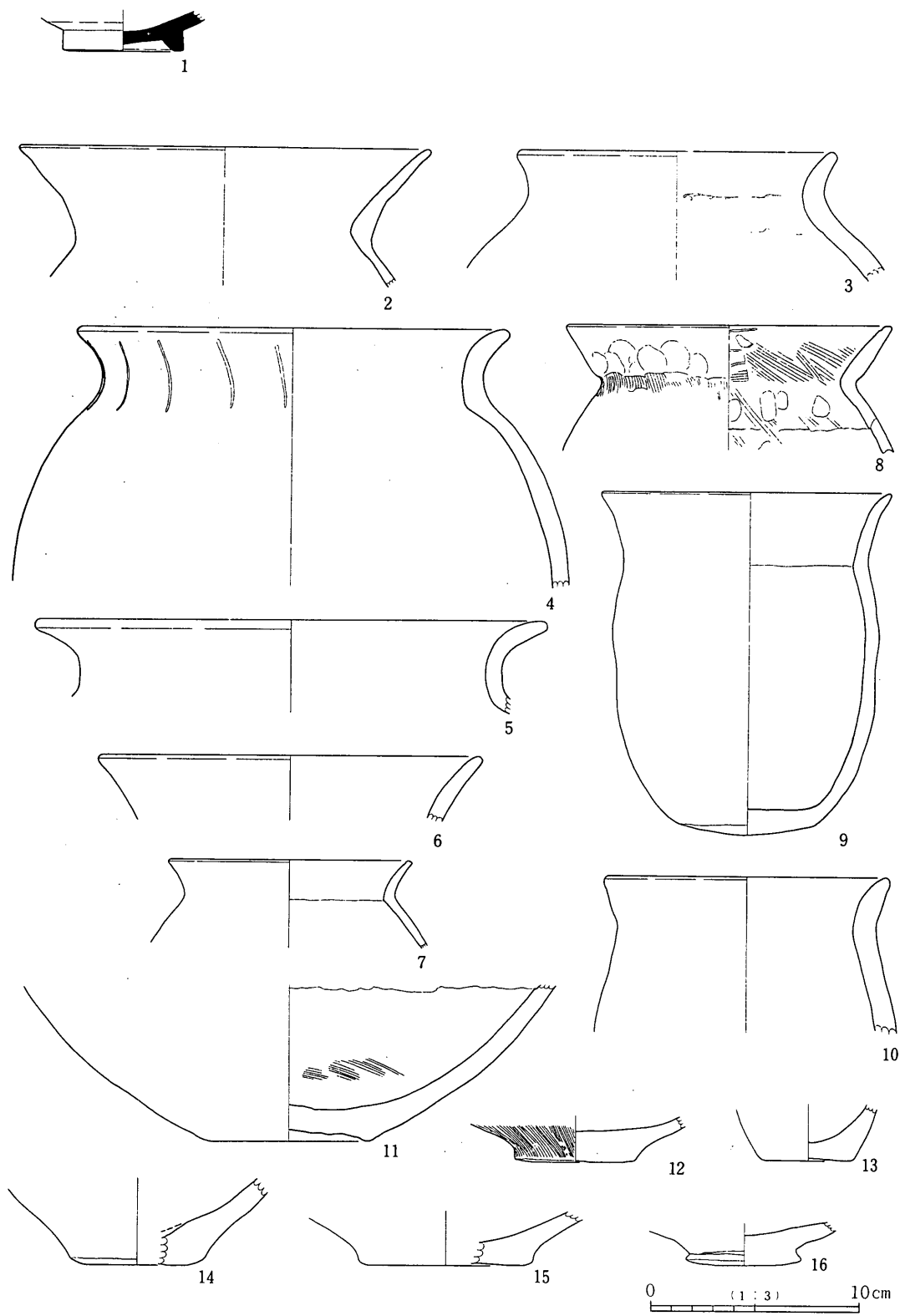
しかしながら、図1及び表1を見ると粒形比の分布には非常にバラつきが見られる。そこで、部分的に比較をしてみるとわずかではあるが粒形比が2.0を越えるものがあり、また粒形比が1.4以下のものも見られる。

したがって、今回出土した上郷町の炭化米についても福岡県小郡町出土炭化米と同様に日本型の稲にインド型の稲が混在し、栽培されていたのではないかと考えられる。

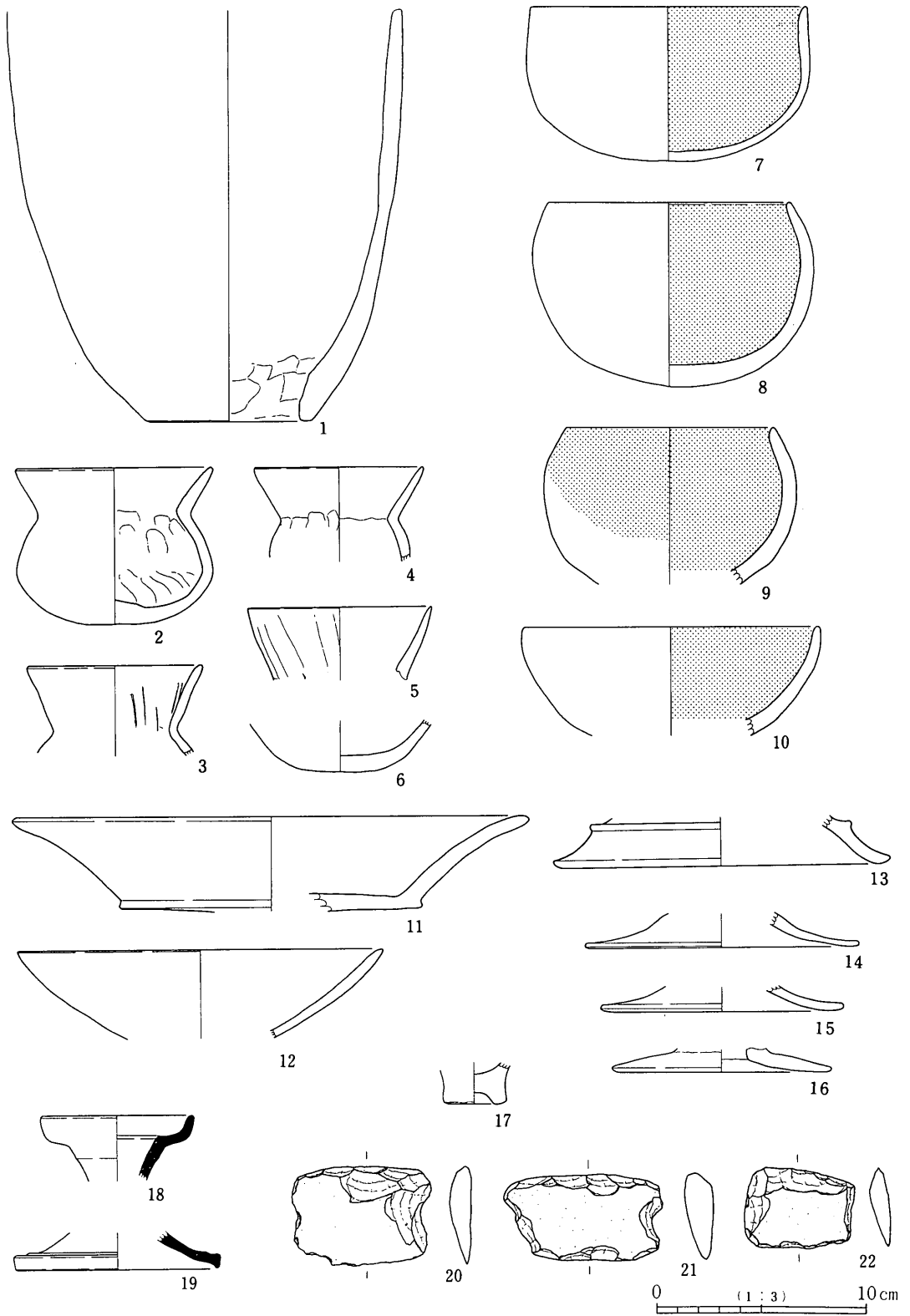
加えて、塩尻市の平出遺跡より出土した古代米については粒形比が、2.3であったことから、当上郷町に於いてもインド型の稲が存在していたと考えても良いのではないだろうか。

5. む す び

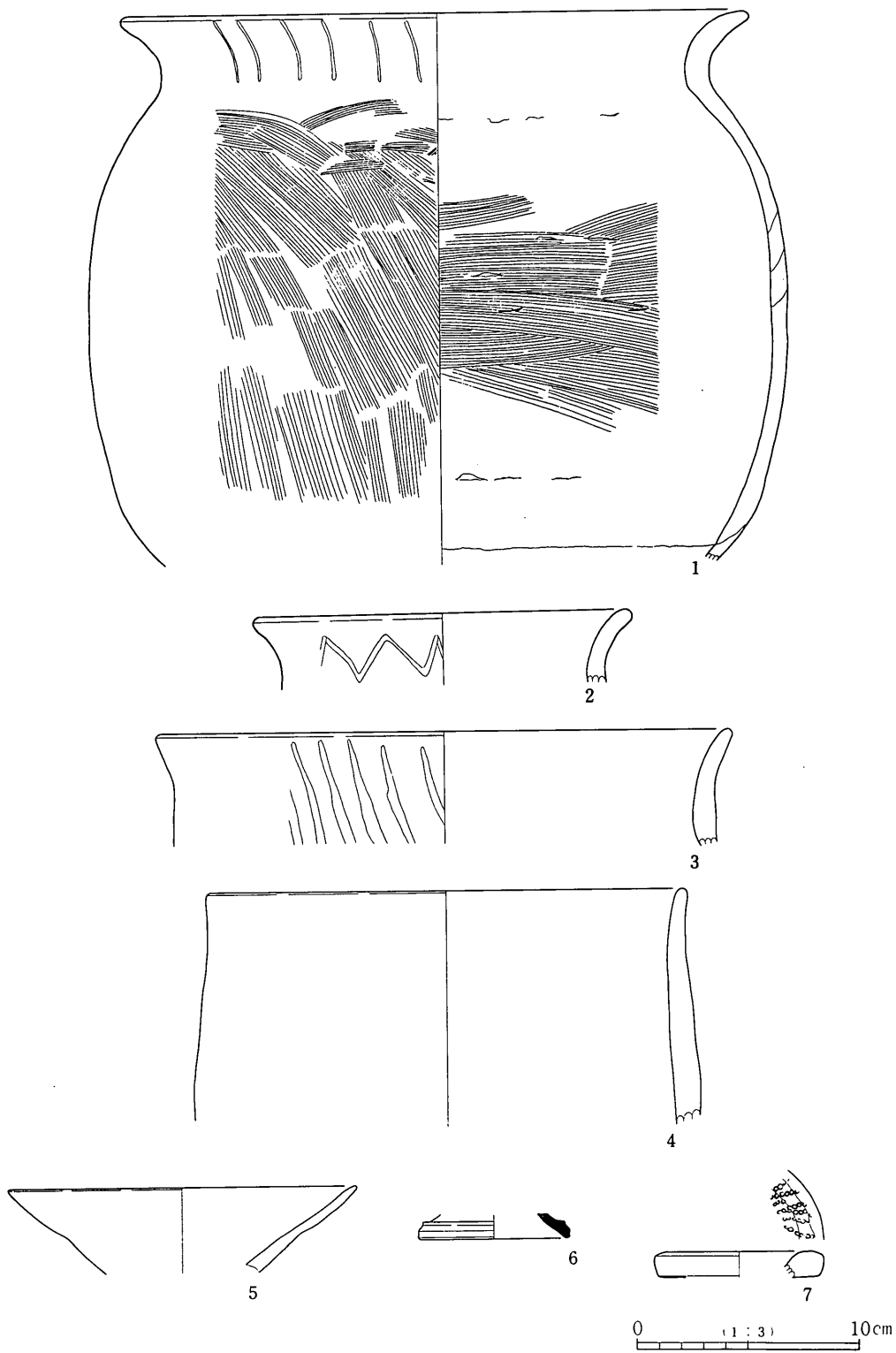
今回の調査は上郷町に於いて当時どの様な稲が栽培されていたかという点についてごく簡単に調査を行ったものである。したがって、予備調査的な域を抜け出してはいないが、今後の調査の一助となれば幸いである。



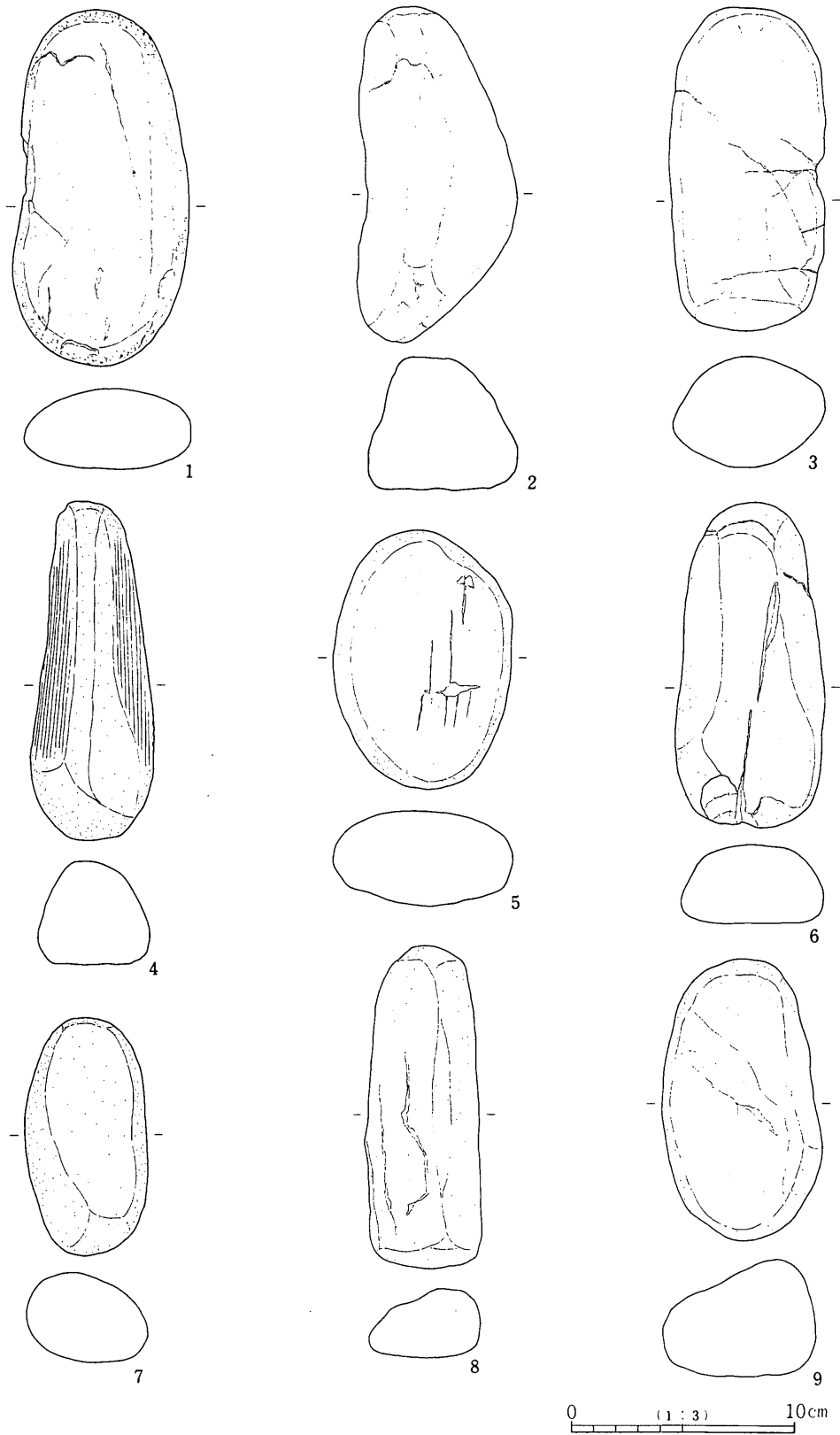
第1图 1号住居址(1)、2号住居址(2~16)出土遺物



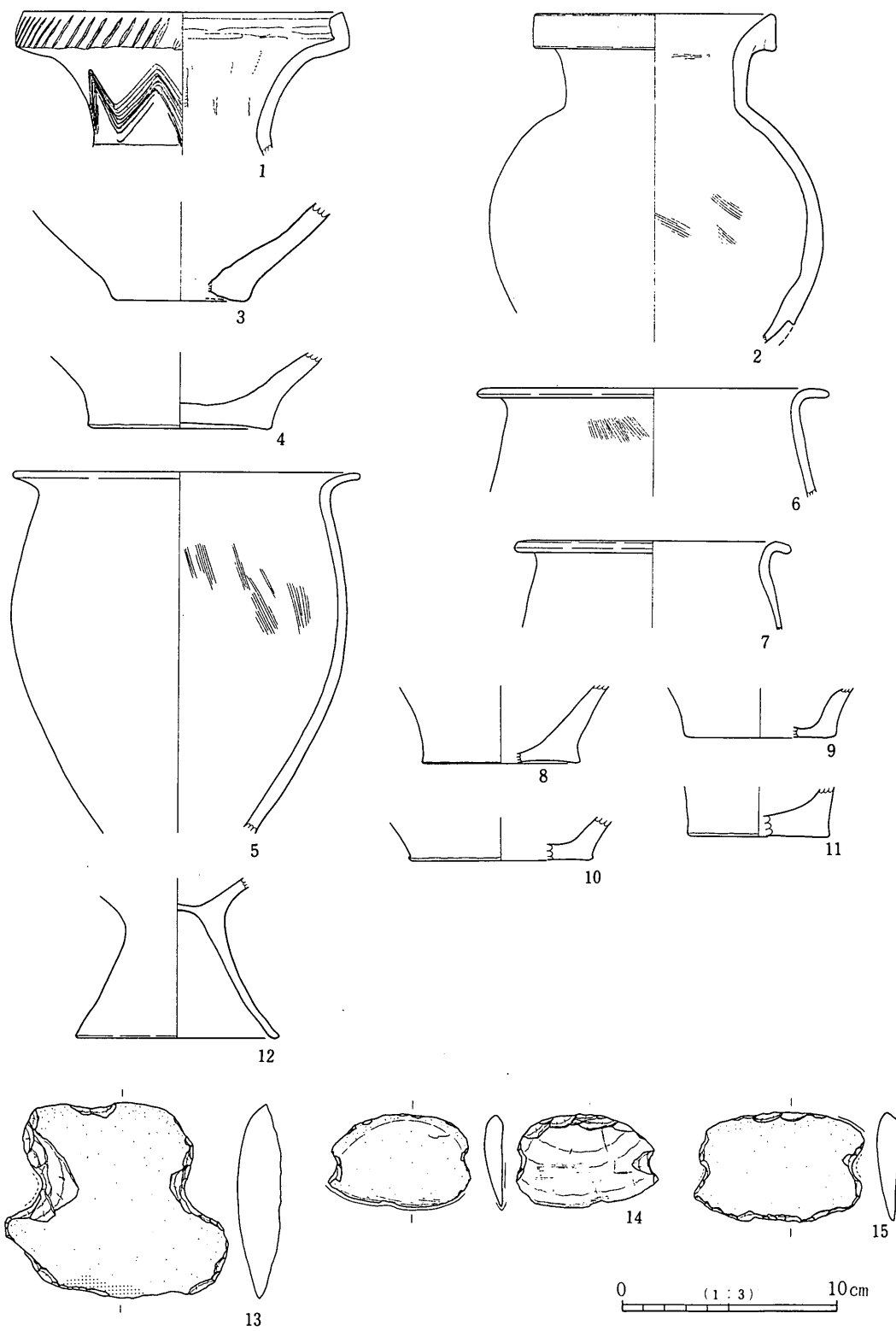
第2图 2号住居址出土遺物



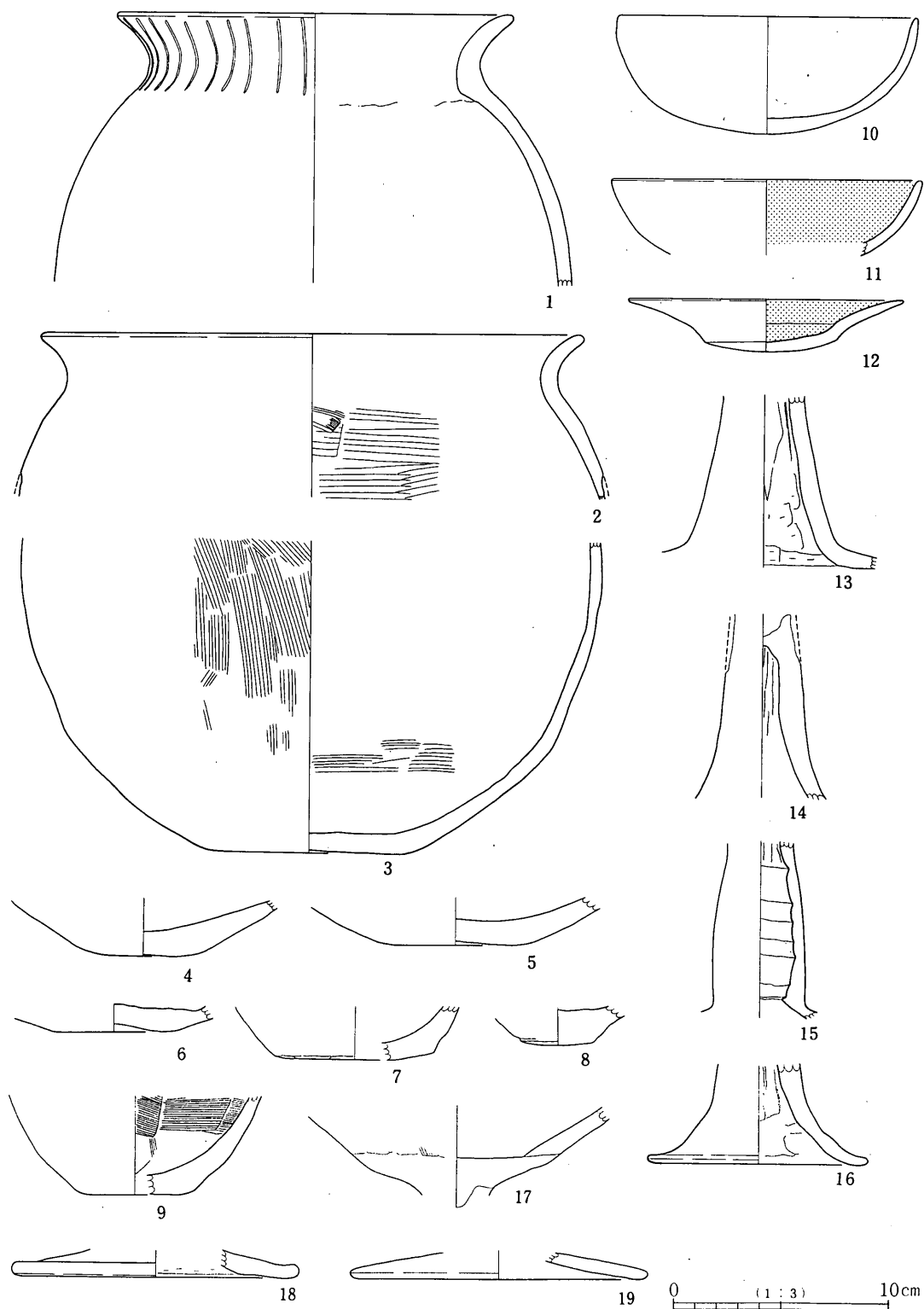
第3图 3号住居址出土遗物(1)



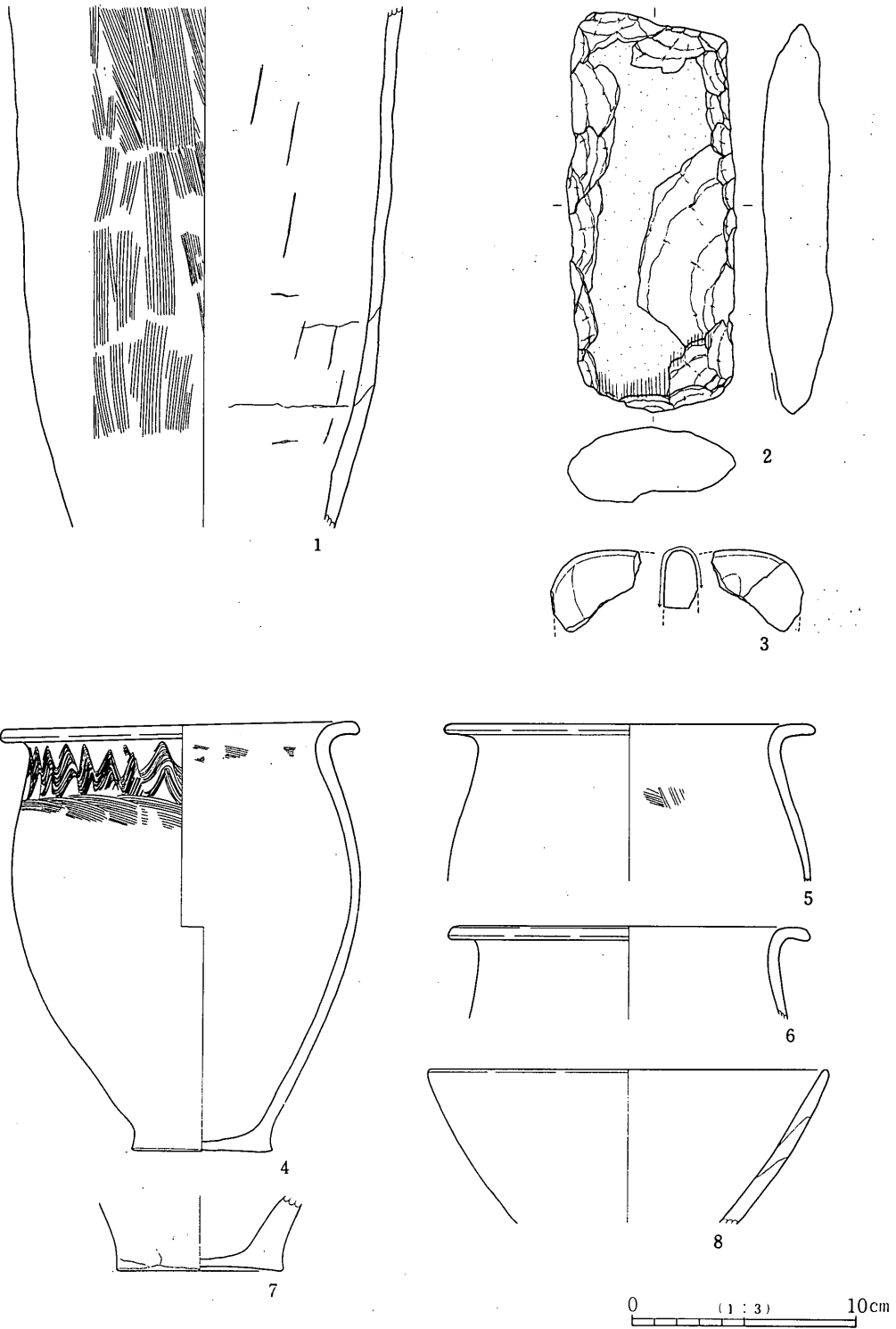
第4图 3号住居址出土遗物(2)



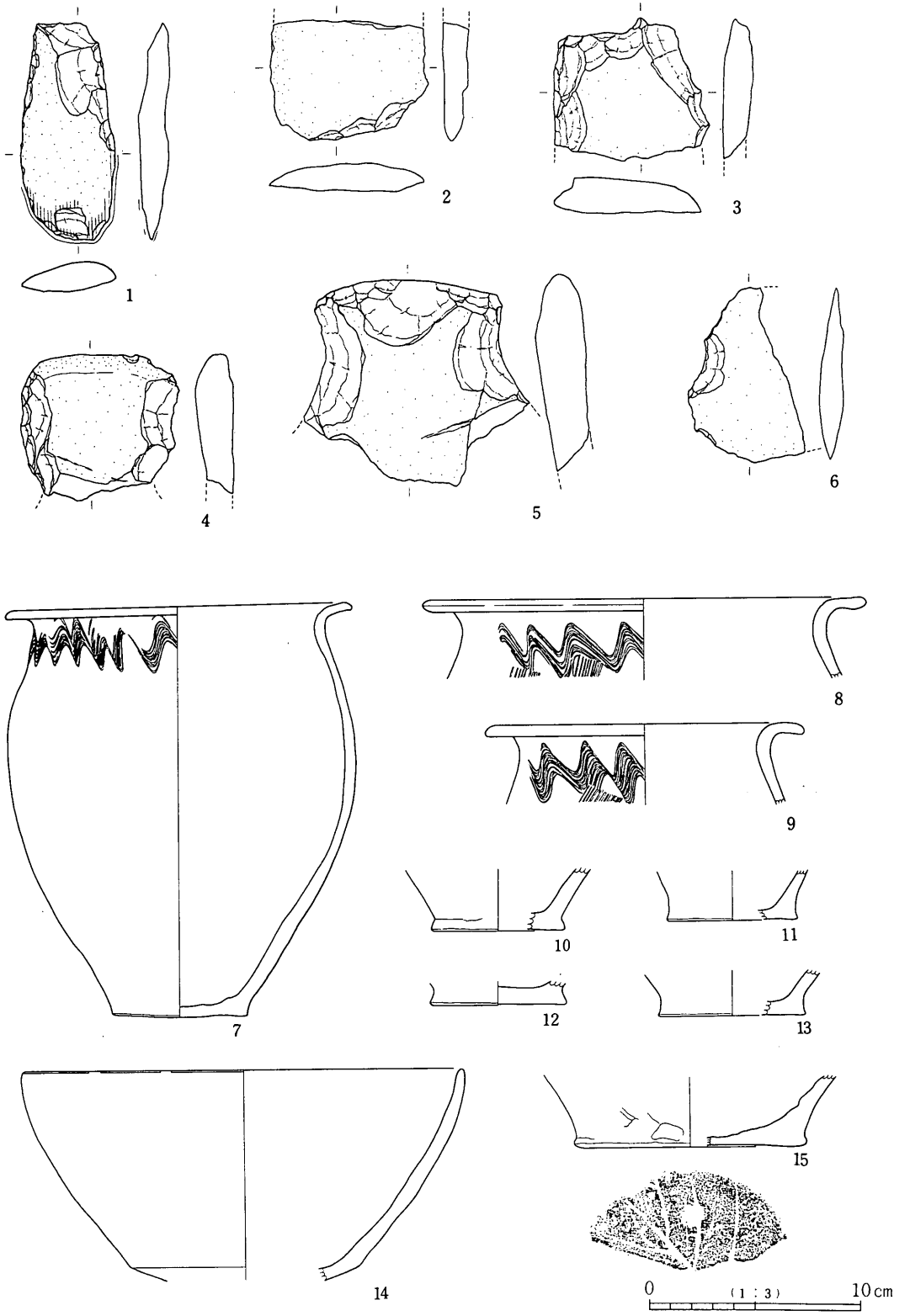
第5图 4号住居址出土遗物



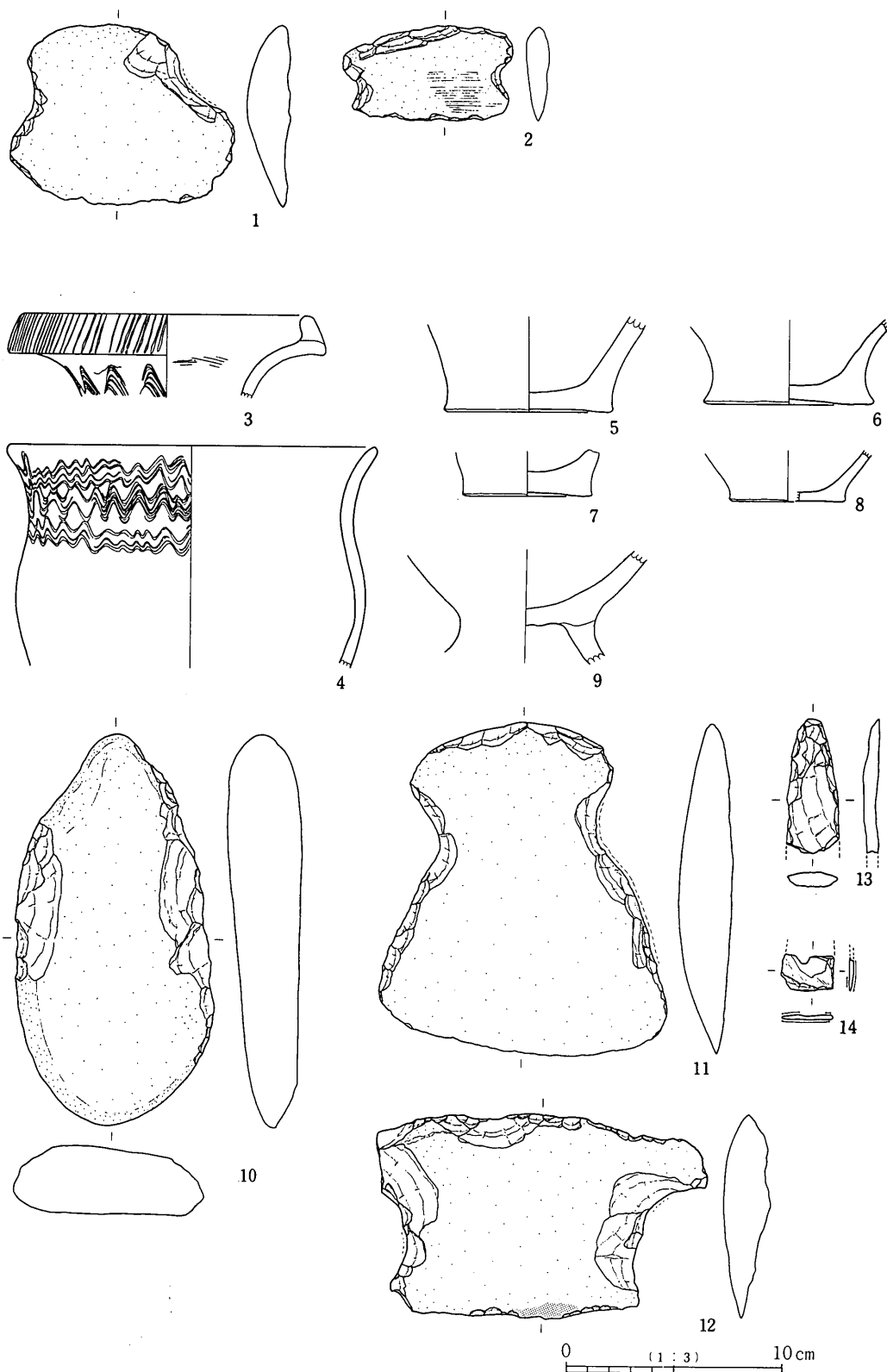
第6图 5号住居址出土遺物



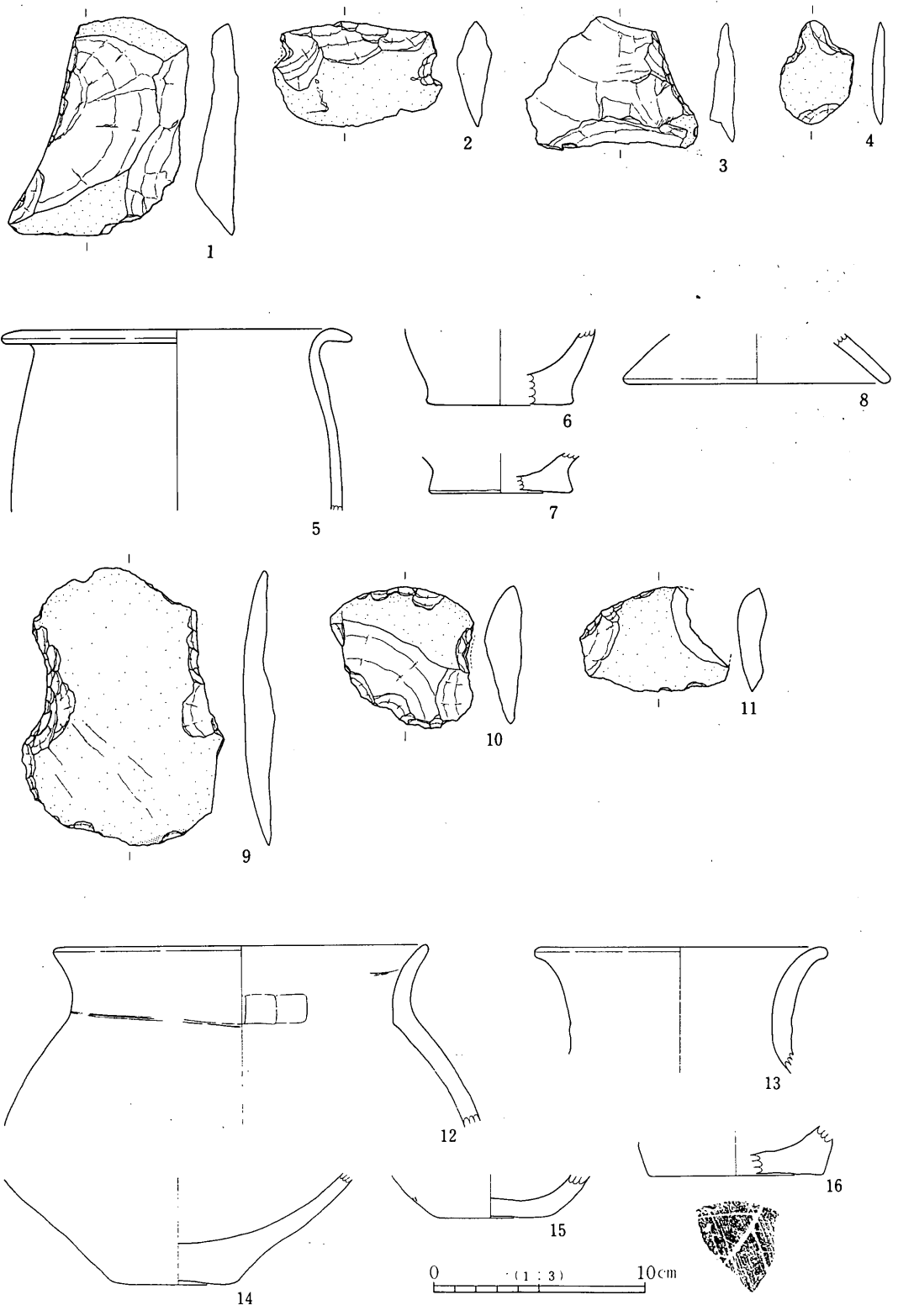
第7图 5号住居址(1~3)、6号住居址(4~8)出土遺物



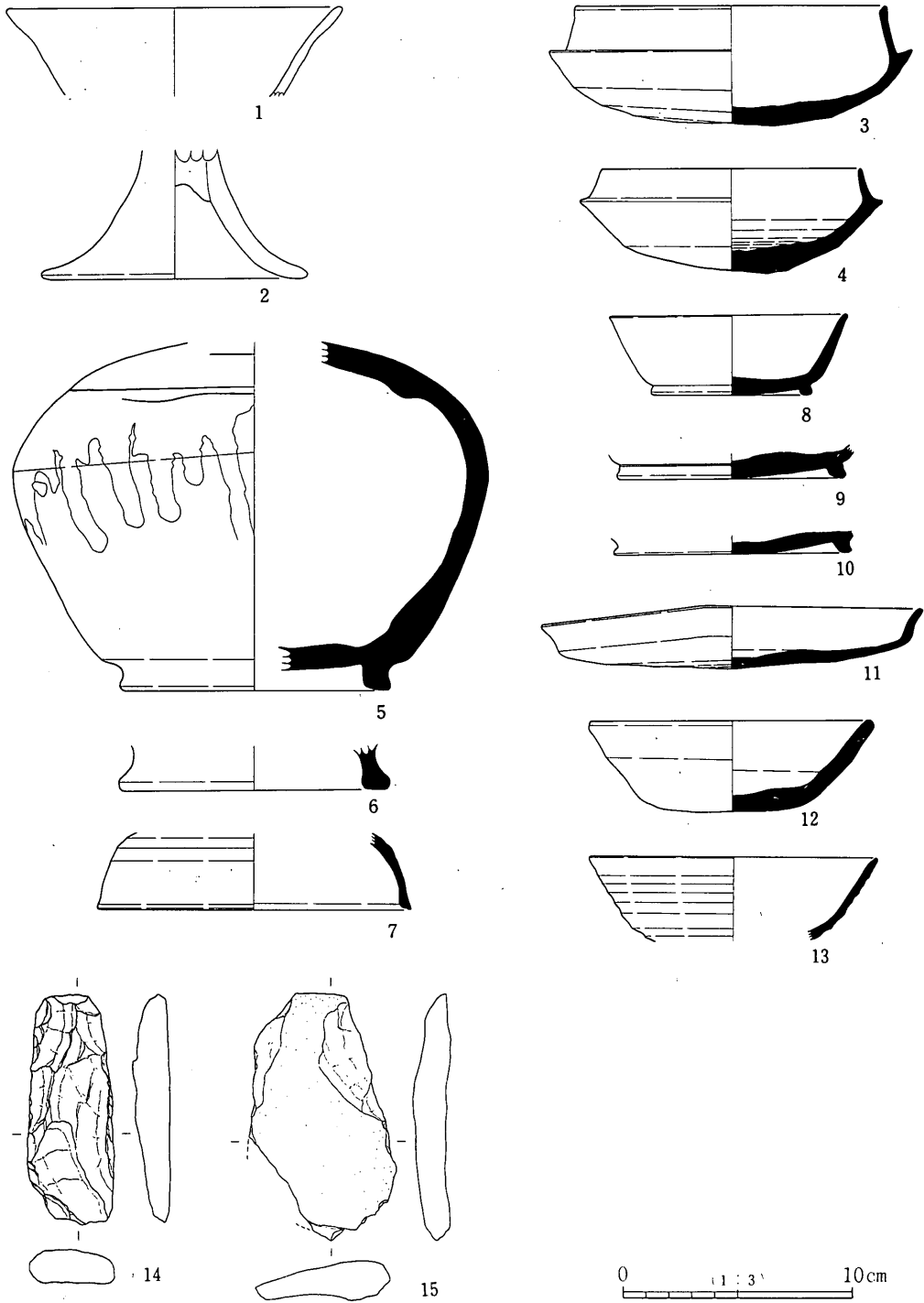
第8图 6号住居址(1~6)、7号住居址(7~15)出土遺物



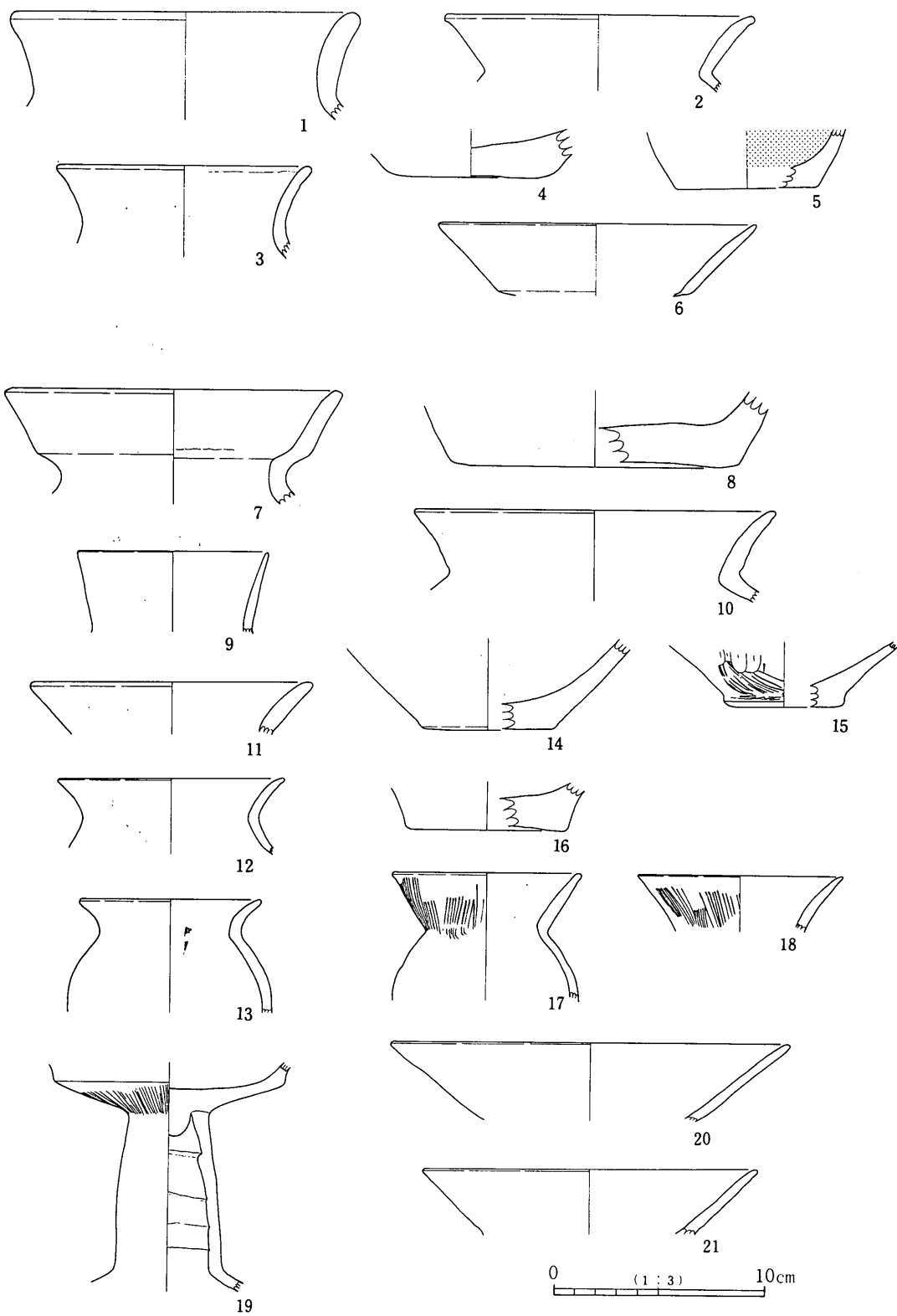
第9图 7号住居址(1·2)、8号住居址(3~14)出土遺物



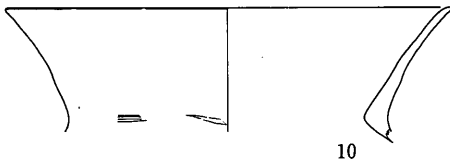
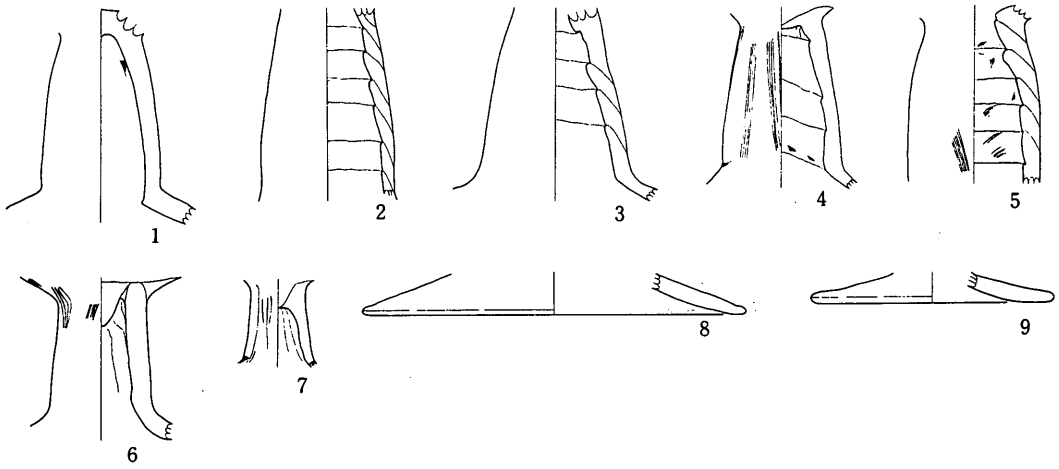
第10图 8号住居址(1~4)、9号住居址(5~11)、溝址1(12~16)出土遺物



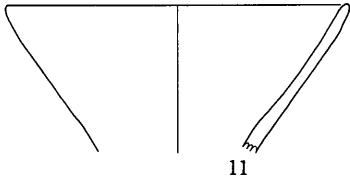
第11图 沟址1 出土遗物



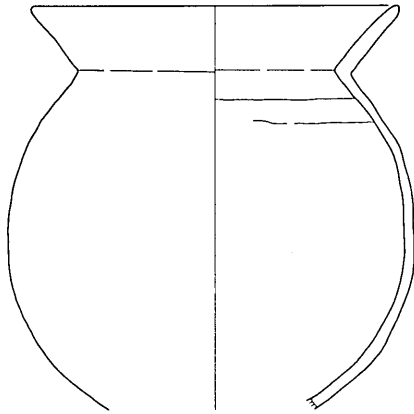
第12図 溝址2 (1~6)、溝址4 (7~21) 出土遺物



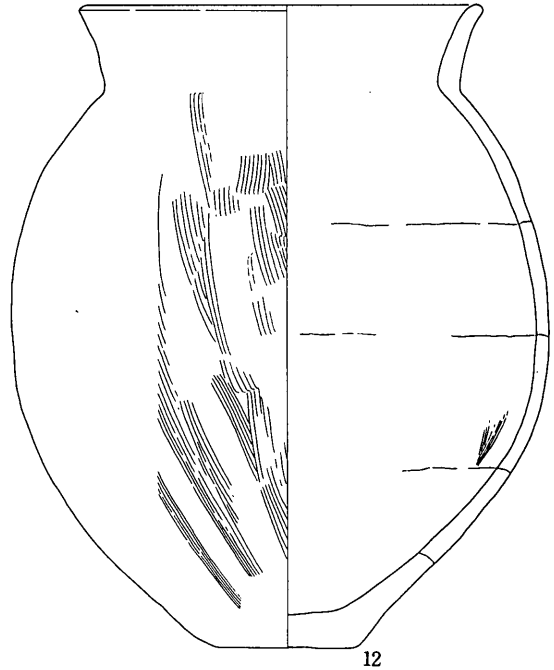
10



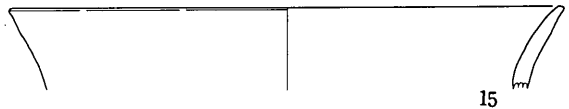
11



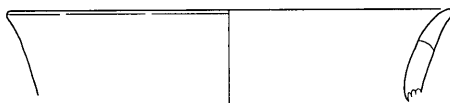
13



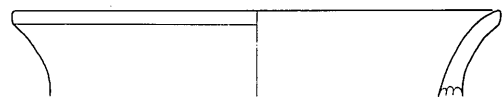
12



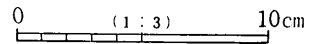
15



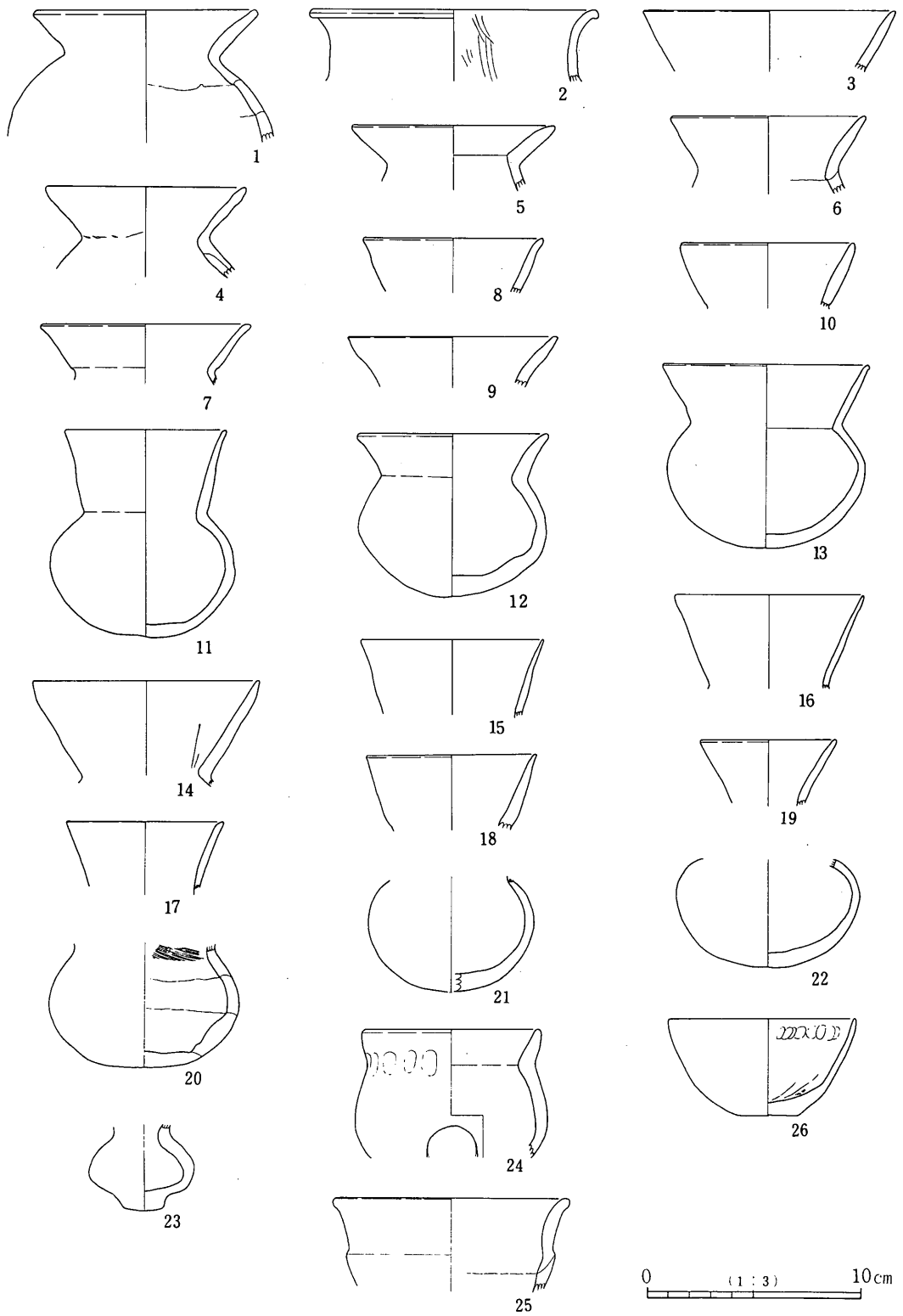
14



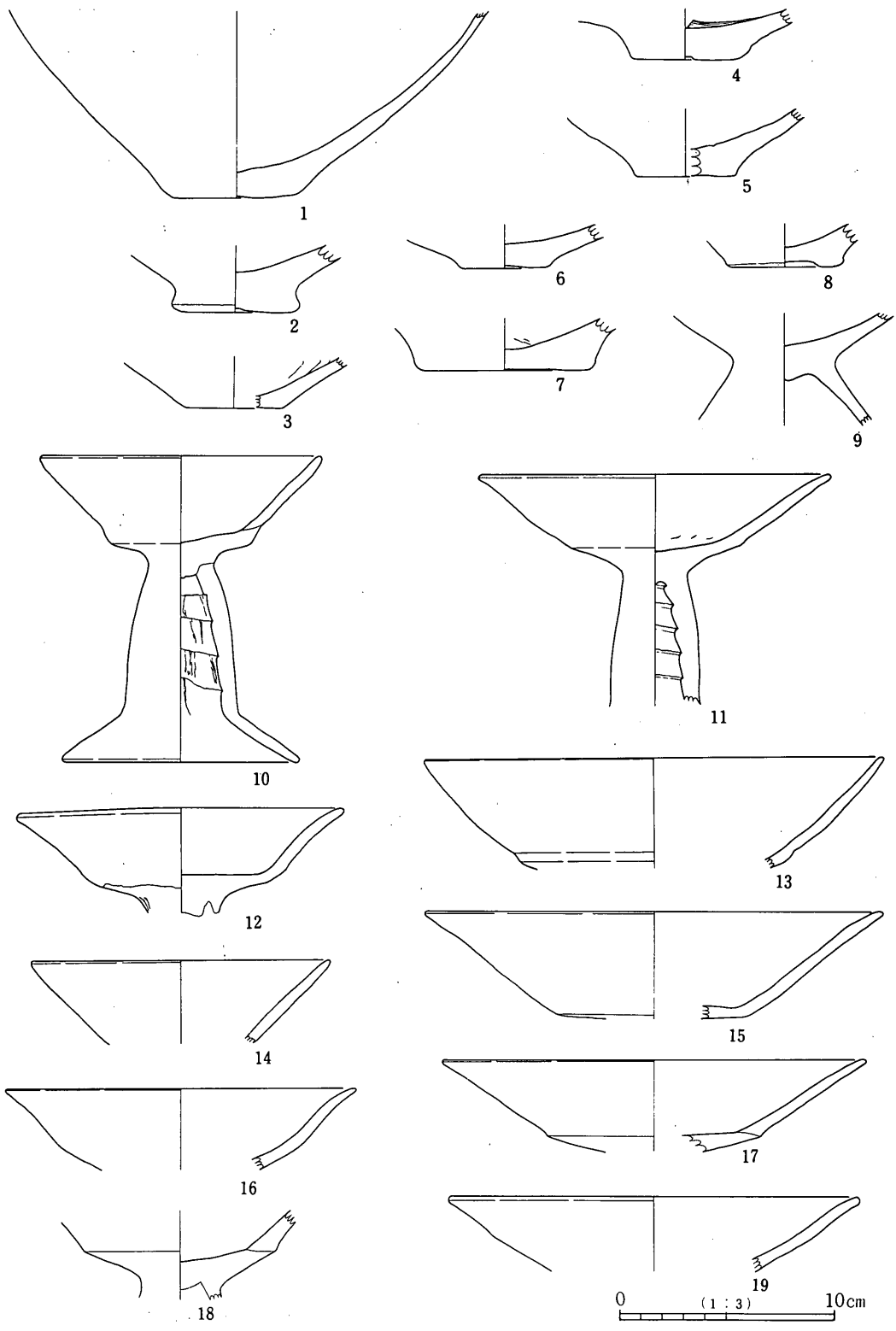
16



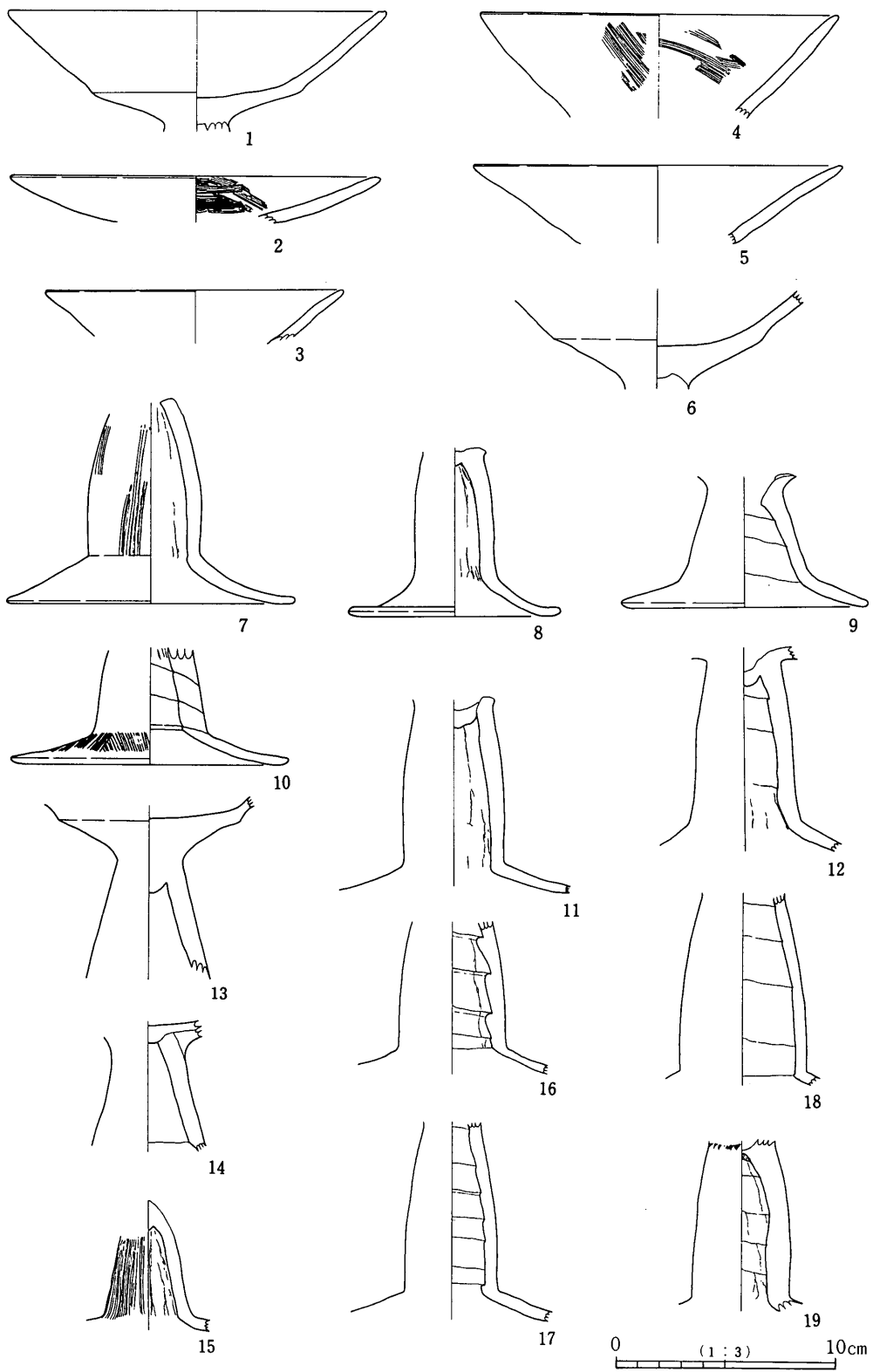
第13図 溝址4 (1~9)、溝址6 (10~16) 出土遺物



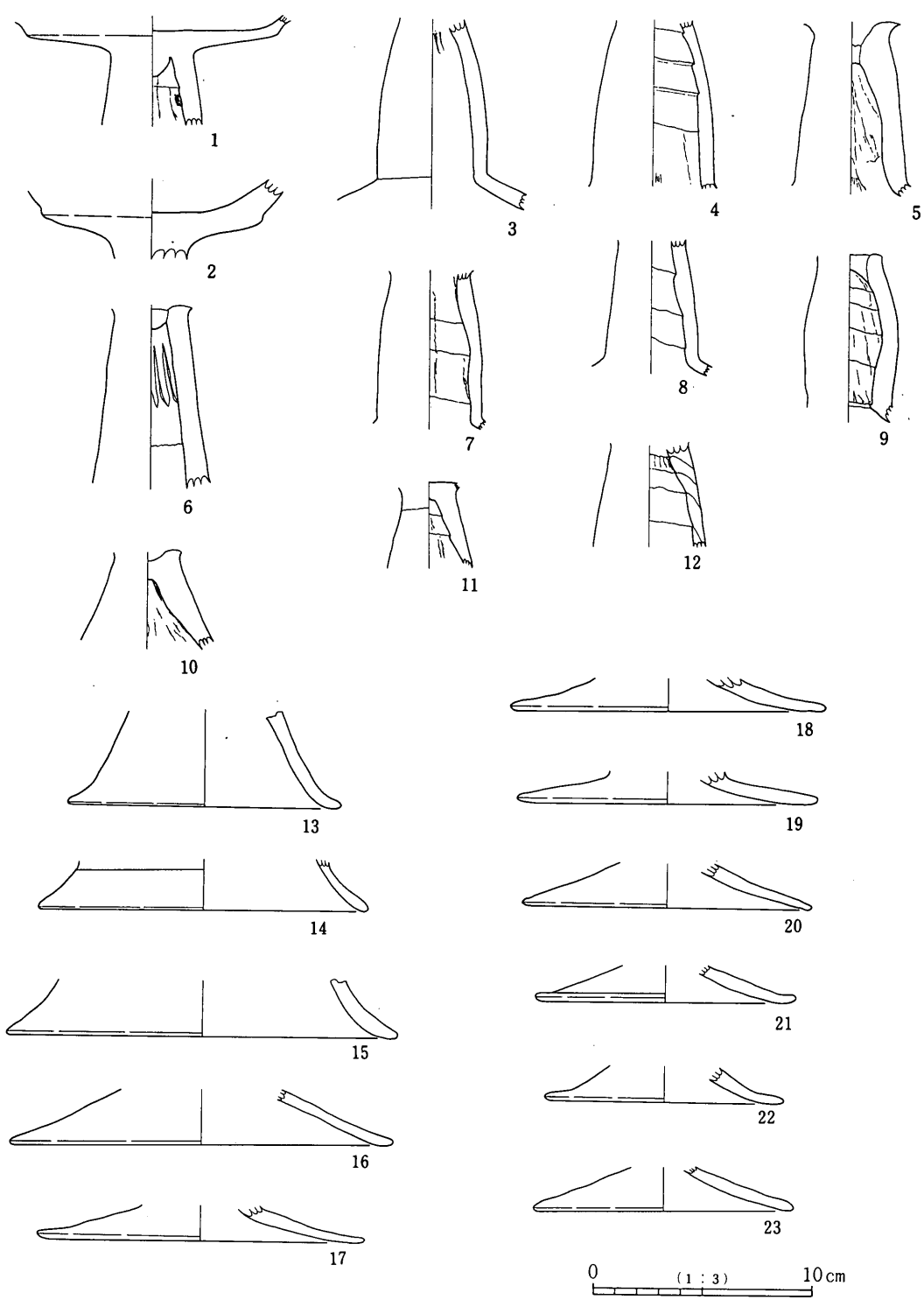
第14図 溝址6出土遺物(1)



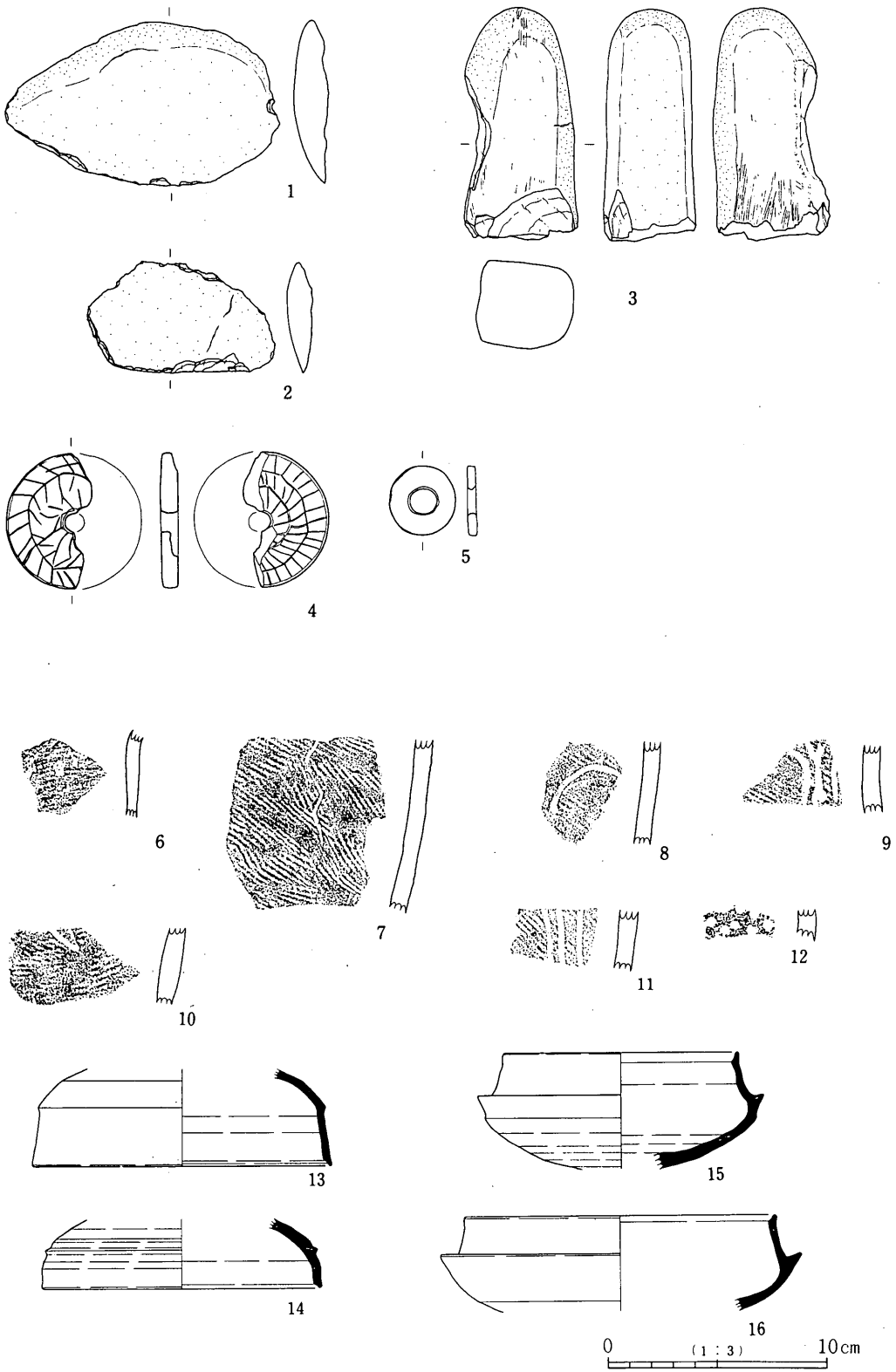
第15圖 溝址6出土遺物(2)



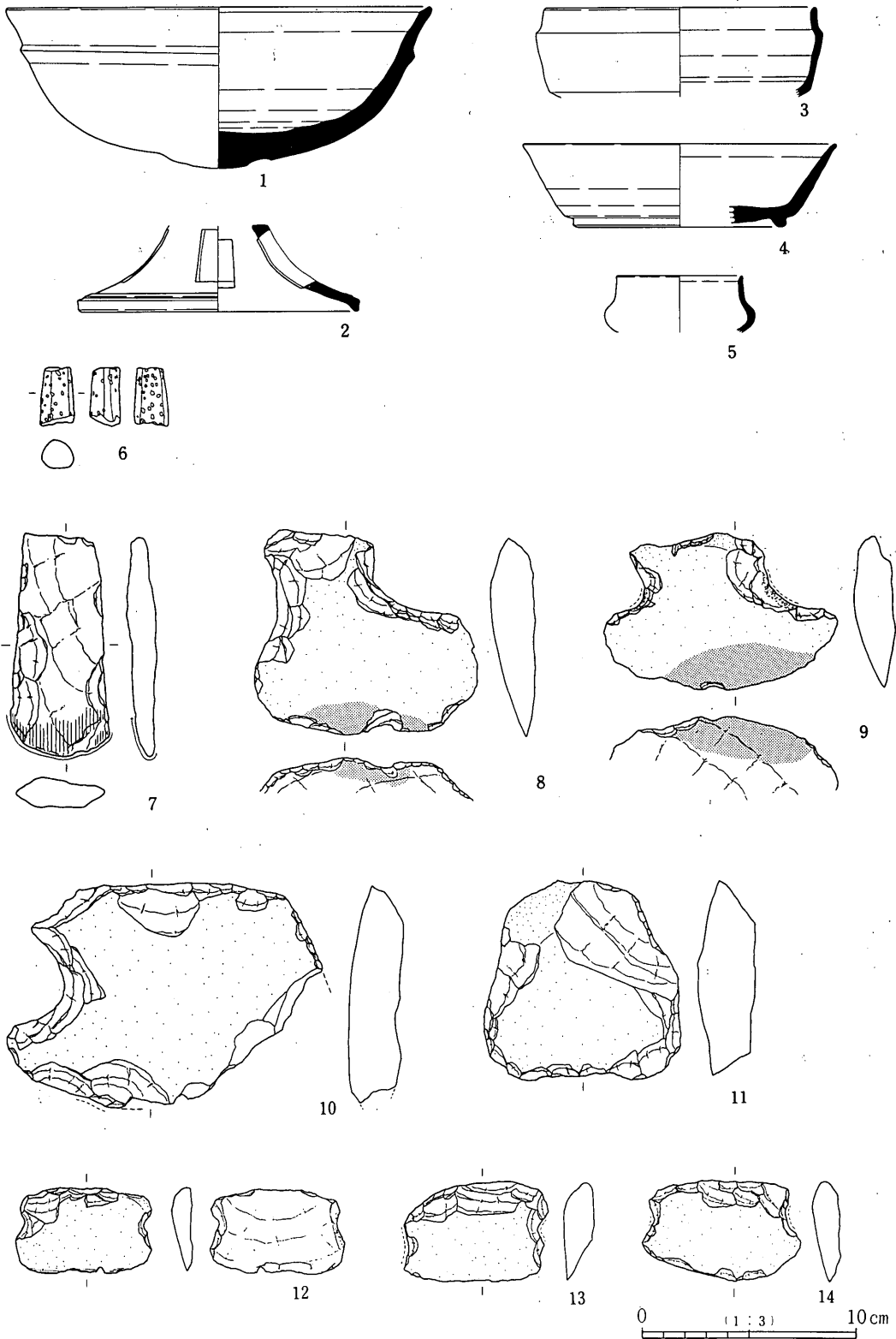
第16图 溝址6出土遺物(3)



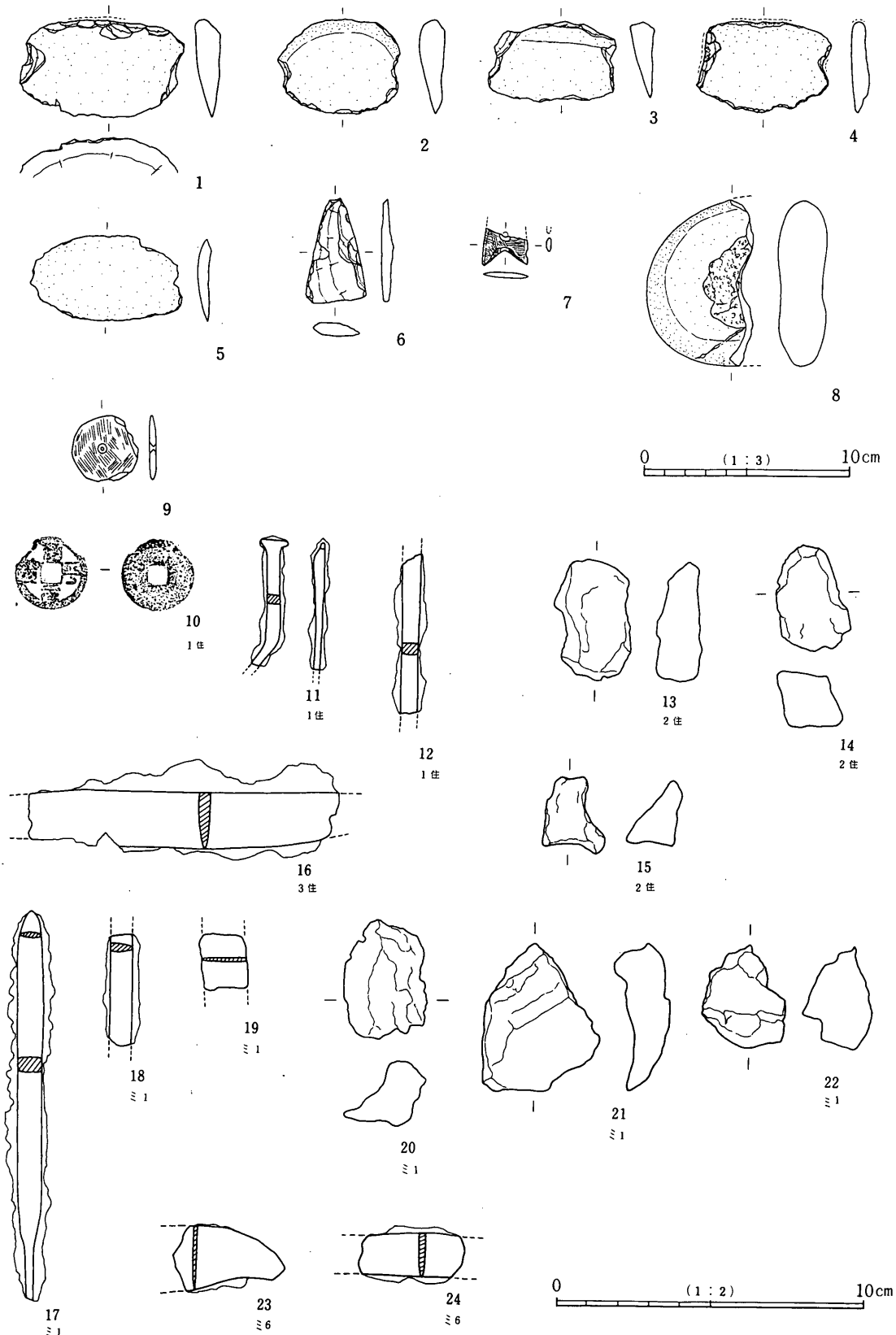
第17图 沟址6出土遗物(4)



第18図 溝址6 (1~5)、遺構外 (6~16) 出土遺物



第19图 3号住居址(1)、遺構外(2~14)出土遺物



第20図 遺構外 (1~9) 出土遺物、1号住居址出土錢 (10)、遺構出土鉄器 (11~24)



遺跡遠景（西より望む）



遺跡遠景（北西より望む）

図版 2



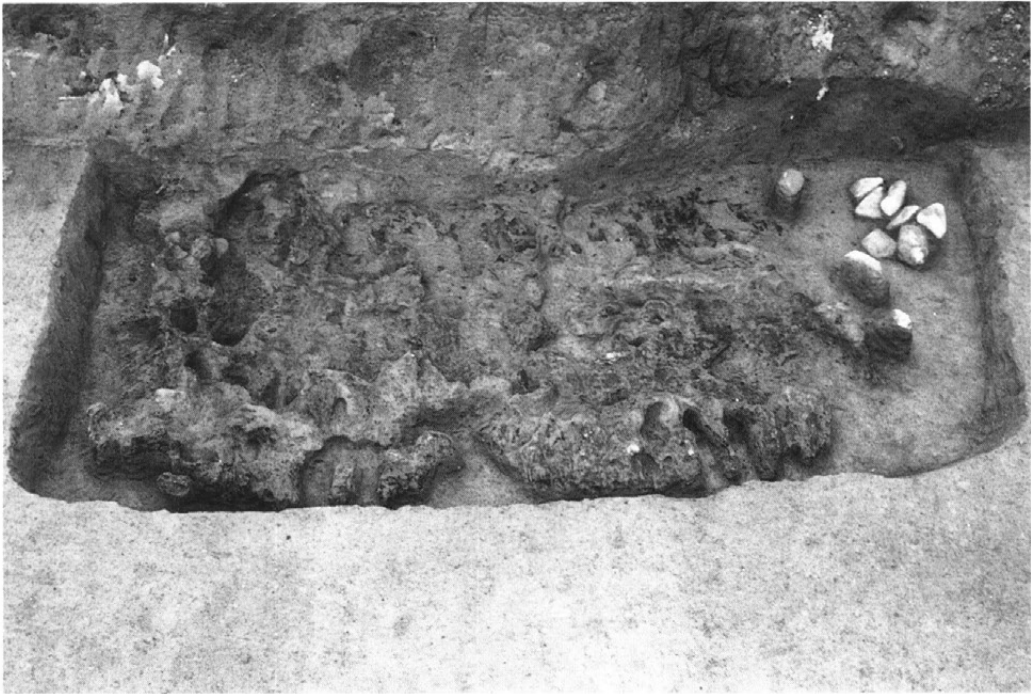
調査地遠景（西より望む）



調査地近景（北西より望む）



1号住居址



1号住居址 炭分布状态

图版 4



1号住居址 炭分布状态 (部分)



1号住居址 炭分布状态 (部分)



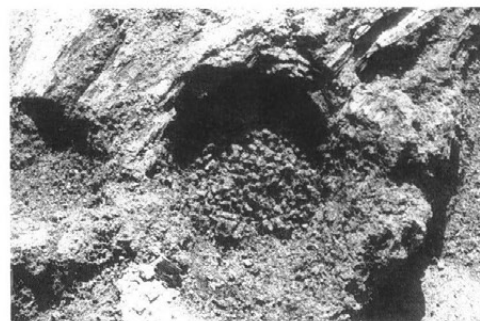
1号住居址 炭分布状态 (部分)



1号住居址 炭分布状态 (部分)



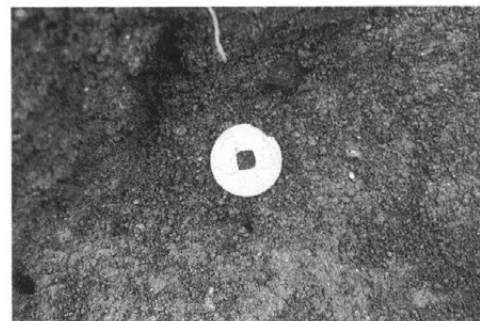
1号住居址 炭化米出土状态



1号住居址 炭化米出土状态



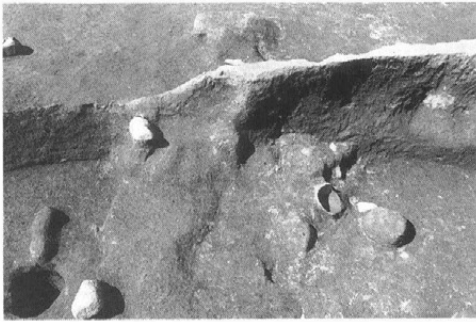
1号住居址 炭化出土状态



1号住居址 钱出土状态



2号住居址



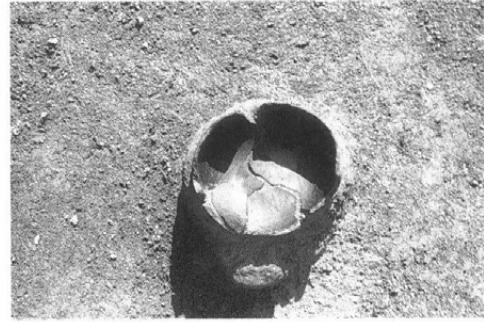
2号住居址 カマド



2号住居址 カマドたち割り

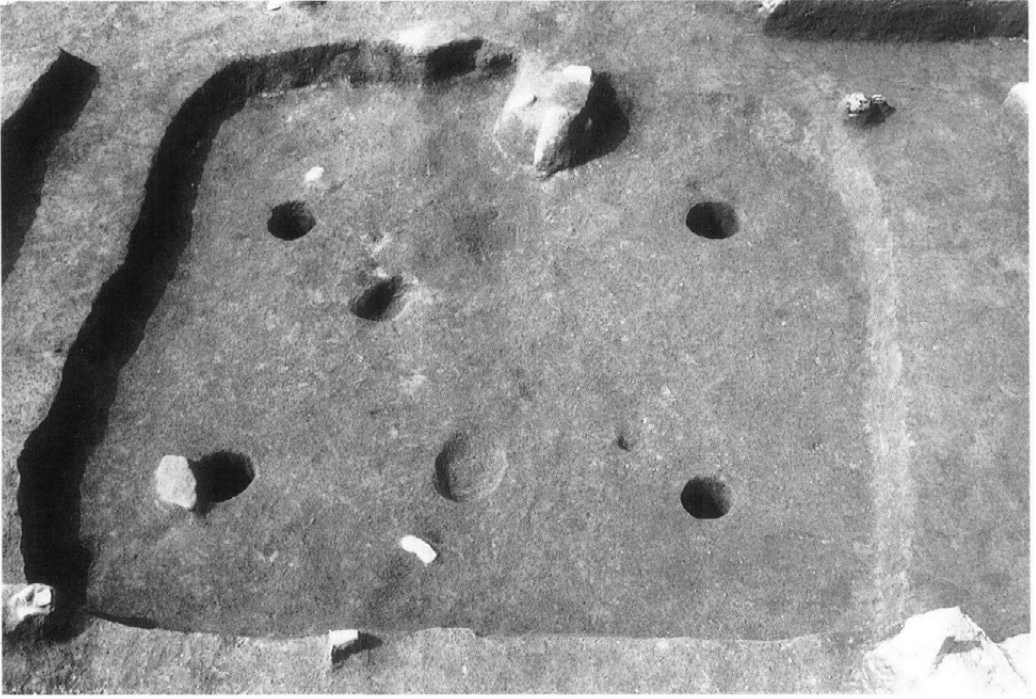


2号住居址 カマドたち割り



2号住居址 坏出土状態

图版 6

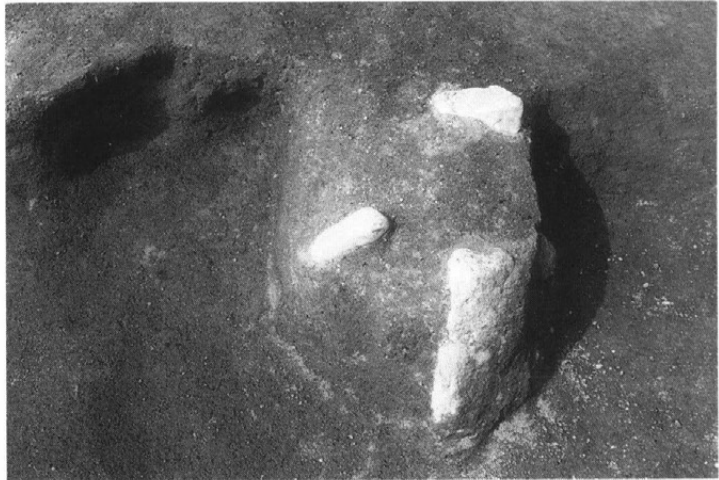


3号住居址

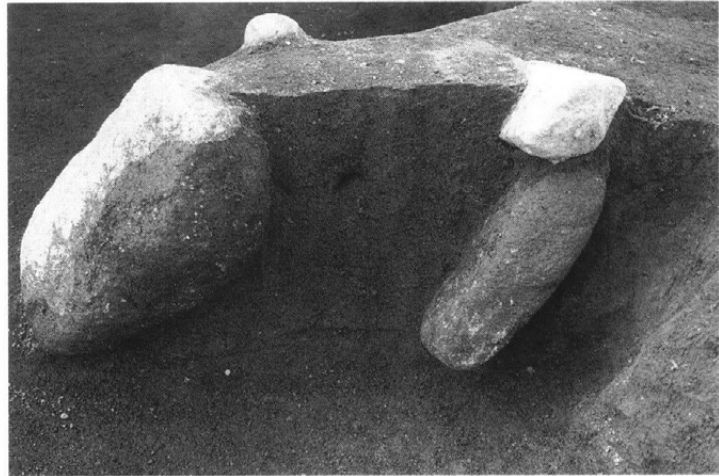


3号住居址 遺物・礫出土状態

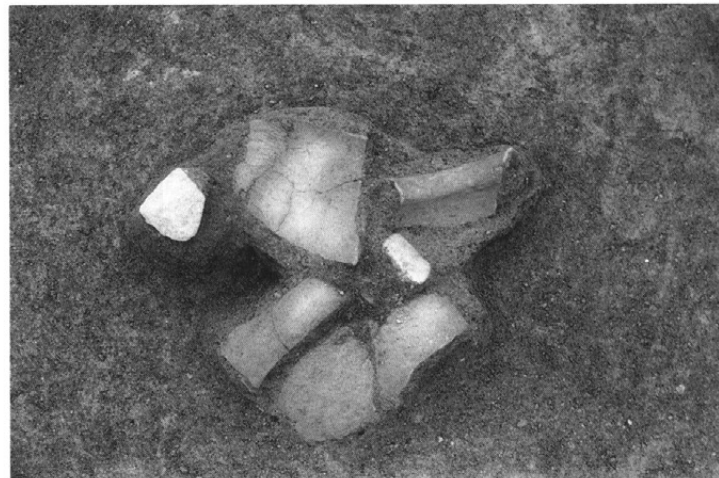
3号住居址 カマド



3号住居址 カマドたち割り



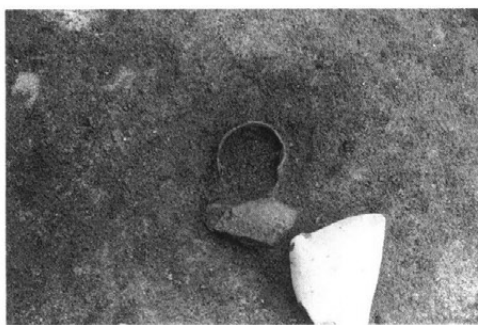
3号住居址 遺物出土状態



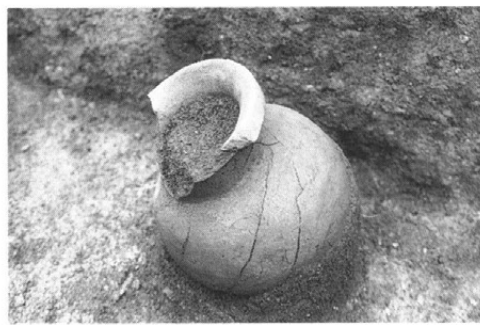
图版 8



4号住居址



4号住居址 炉址



4号住居址 壺出土狀態

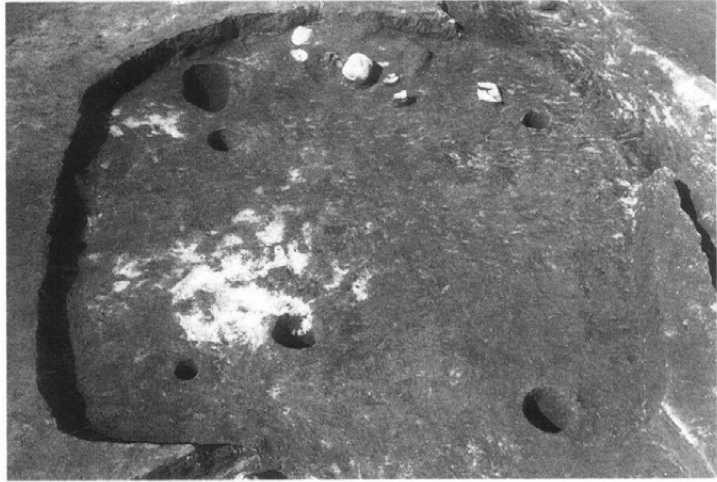


4号住居址 抉入打製石包丁出土狀態

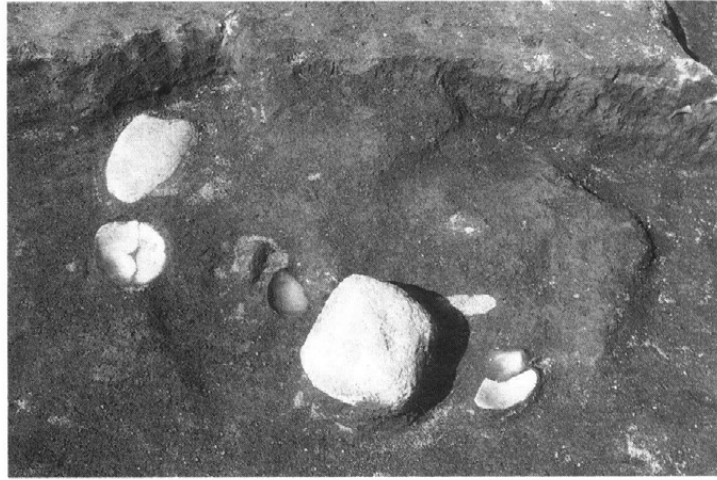


4号住居址 有肩扇状形石器出土狀態

5号住居址



5号住居址 カマド



5号住居址 カマドたち割り



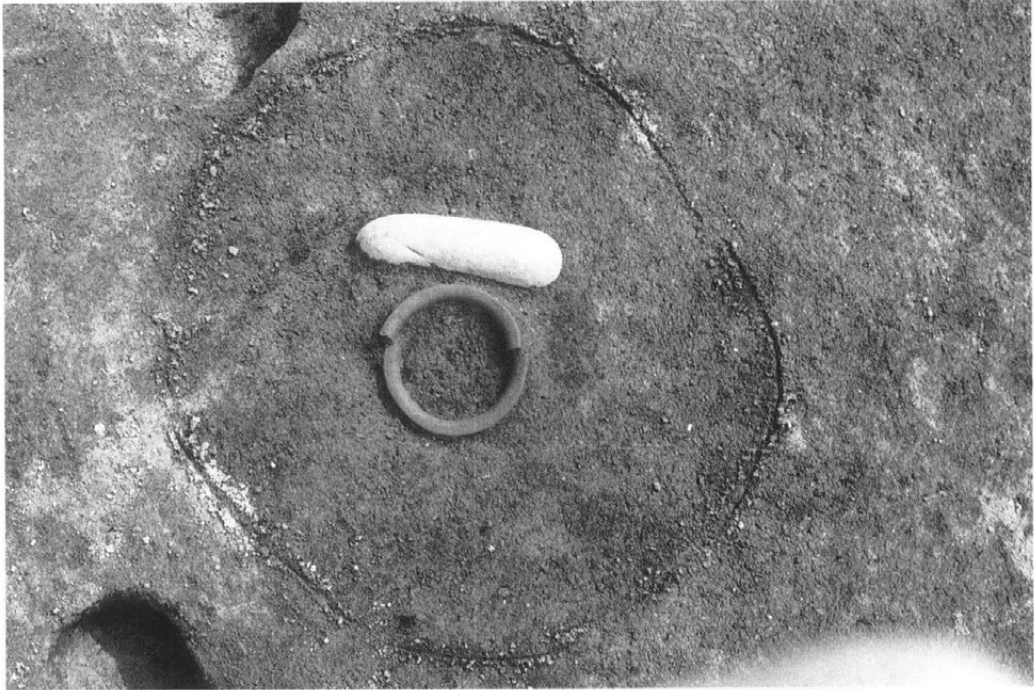
图版10



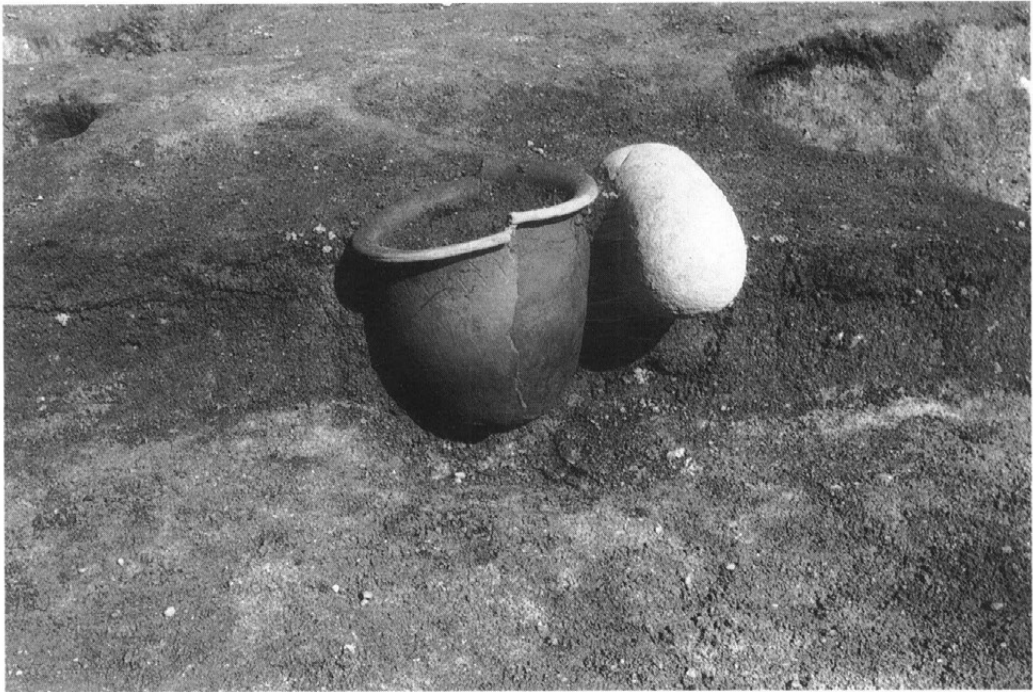
6号住居址



6号・7号住居址

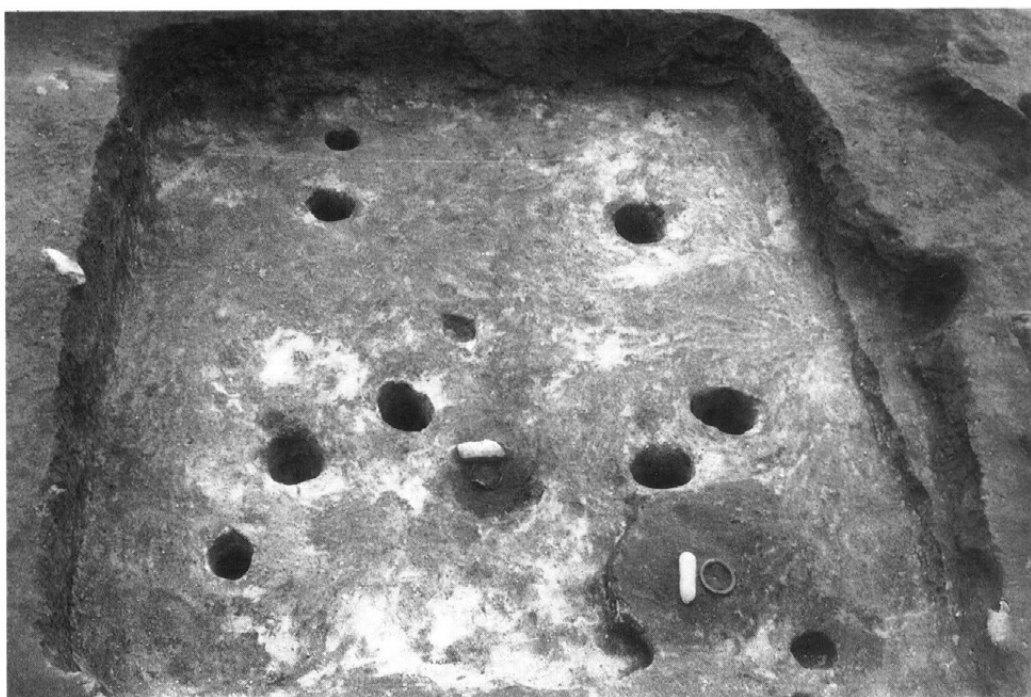


6号住居址 炉址



6号住居址 炉址たち割り

图版 12



7号住居址



6号・7号住居址

7号住居址 炉址



7号住居址 炉址たち割り



7号住居址 磔



图版14



8号住居址



8号・9号住居址



8号住居址 炉址



9号住居址

图版16



9号住居址 炭分布状态



9号住居址 炭分布状态(部分)



9号住居址 炭分布状态(部分)



溝址1（西から）



溝址1（東から）

图版18



沟址 2



沟址 3



沟址 4

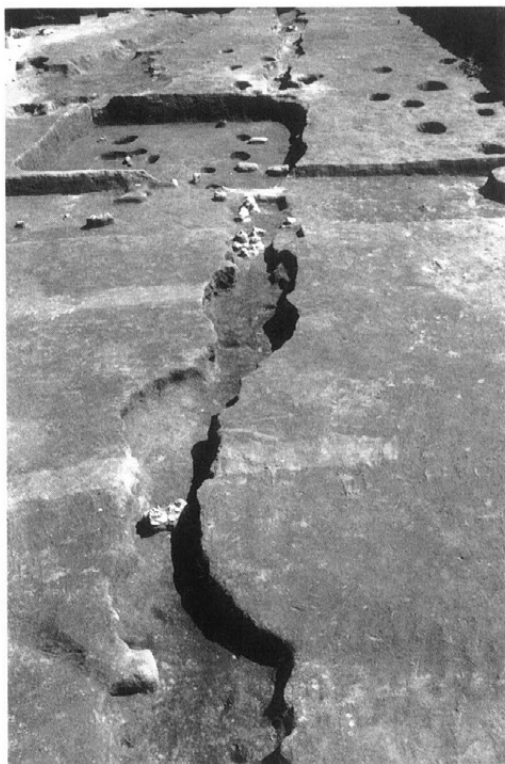


沟址 5

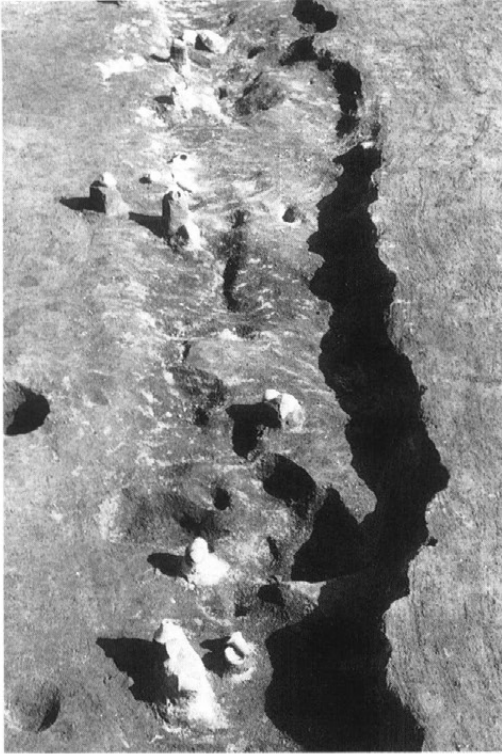
図版20



溝址6（東から）



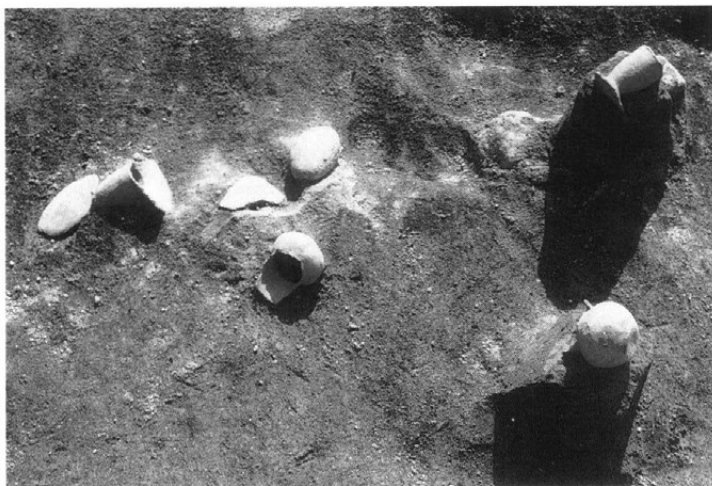
溝址6（西から）



溝址 6 遺物出土状態



溝址 6 遺物出土状態



溝址 6 遺物出土状態

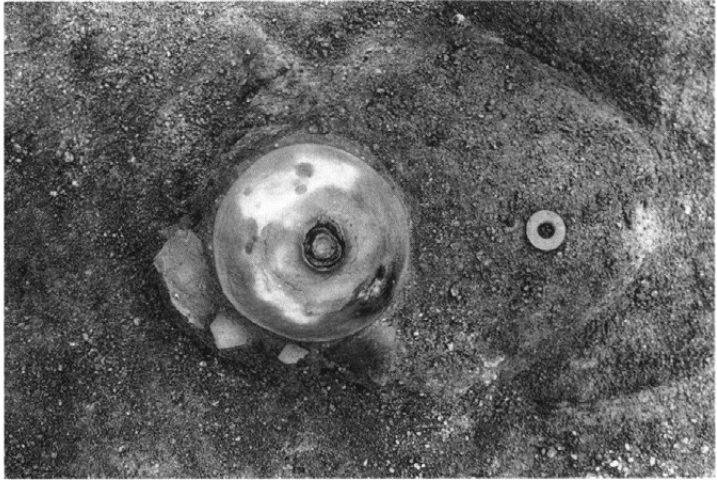


溝址 6 遺物出土状態



溝址 6 遺物出土状態

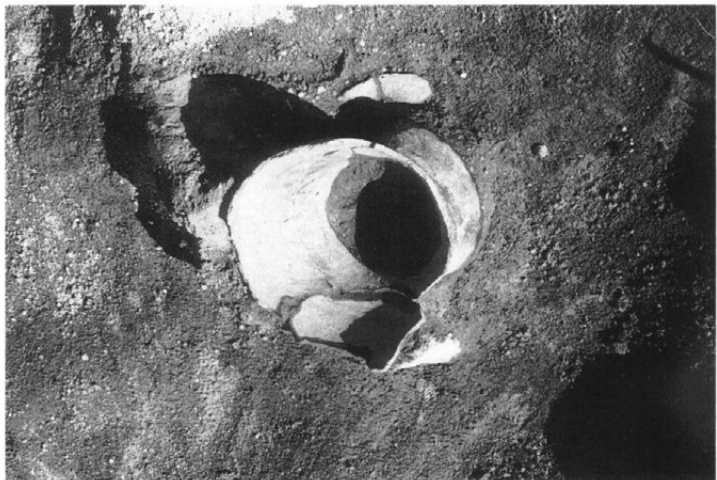
溝址 6 遺物出土状態



溝址 6 甕出土状態



溝址 6 甕出土状態



図版24



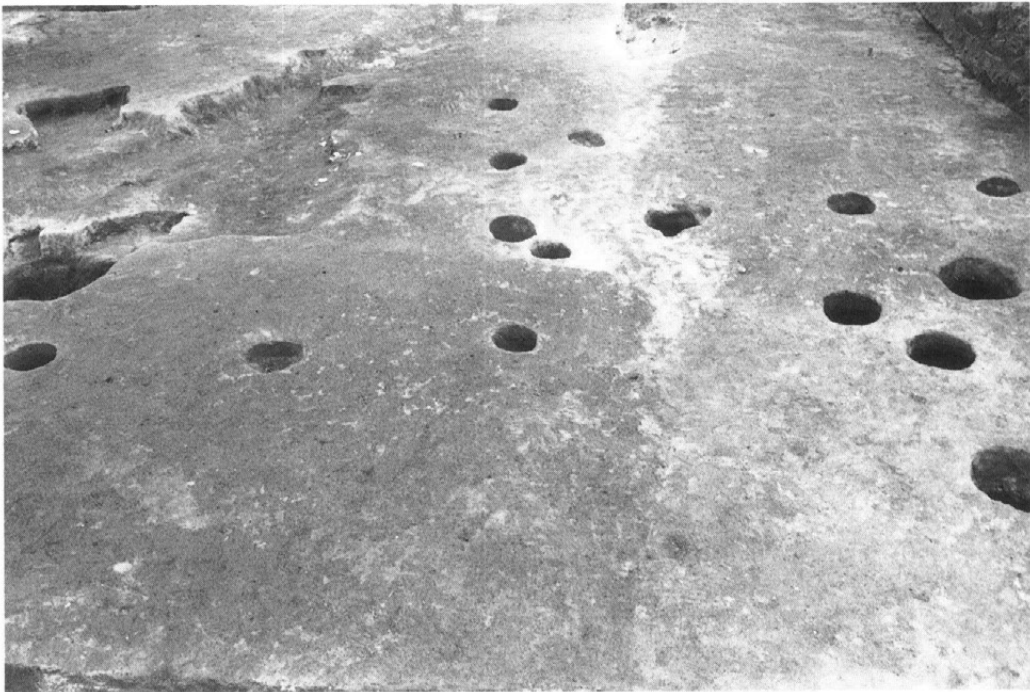
掘立柱建物址1（北から）



掘立柱建物址1（西から）



柱穴群（北から）



柱穴群（西から）

図版26

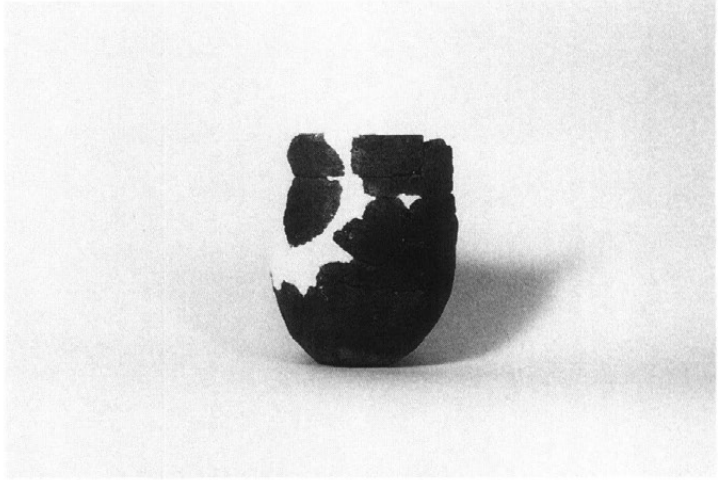


全 景 (南から)

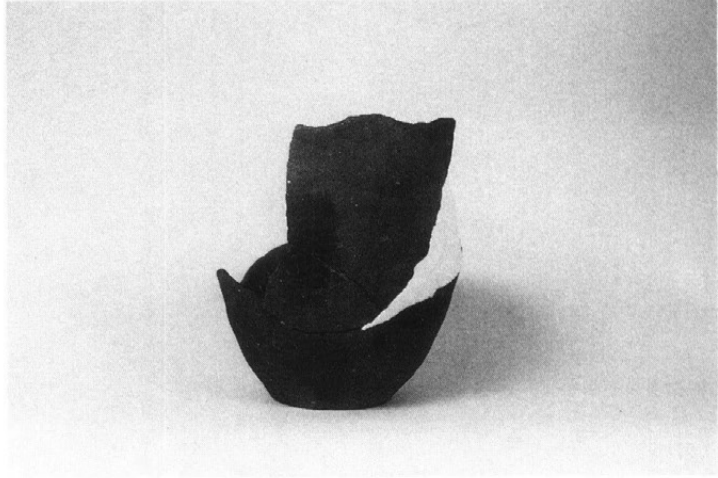


全 景 (北から)

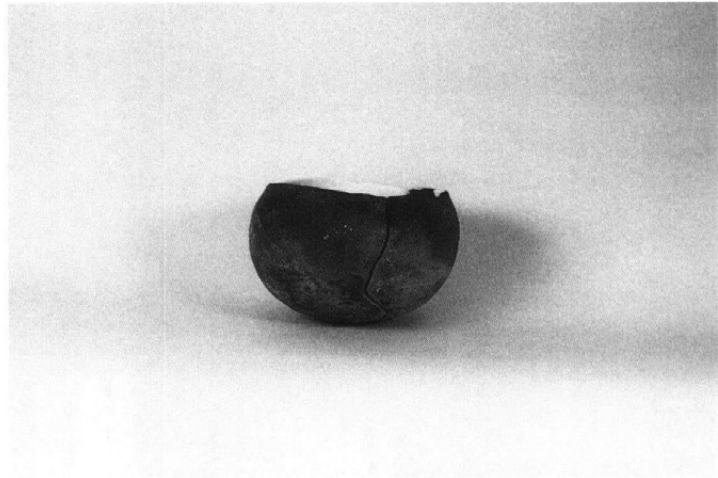
2号住居址 甕



2号住居址 甑

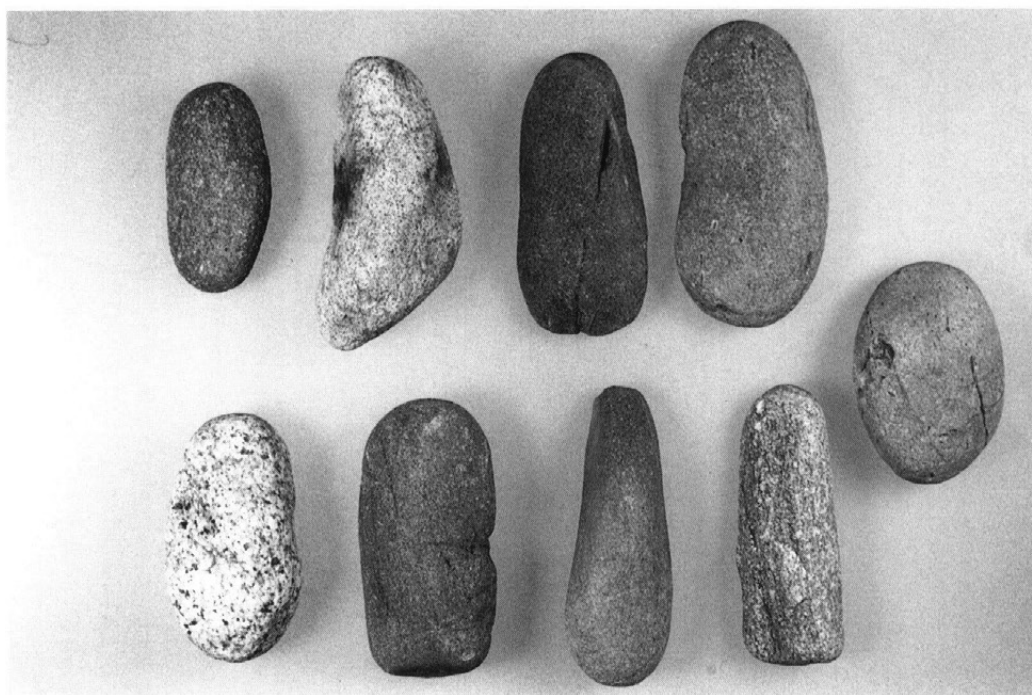


2号住居址 坏





3号住居址 甕



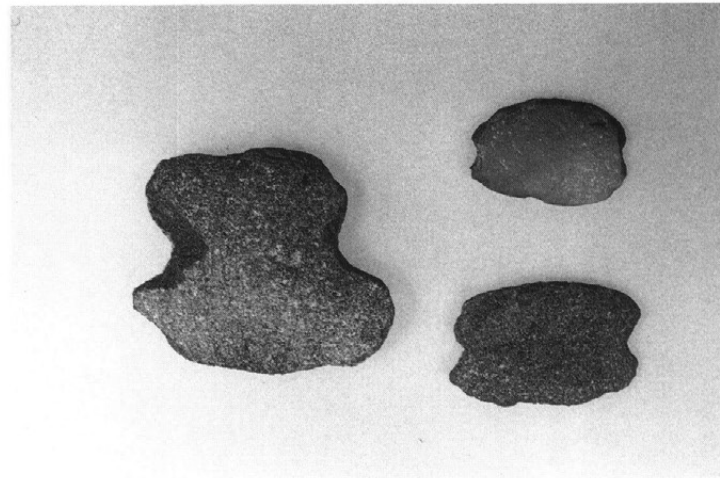
3号住居址 編物用石錘



4号住居址 壺

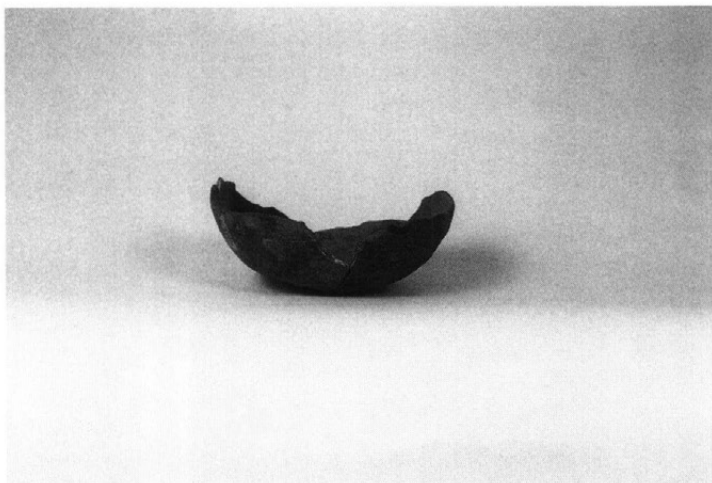


4号住居址 炉址甕

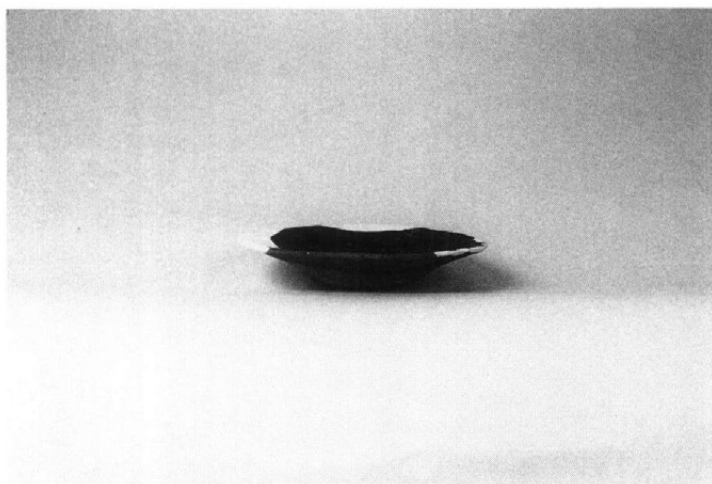


4号住居址 石器

图版30



5号住居址 坏



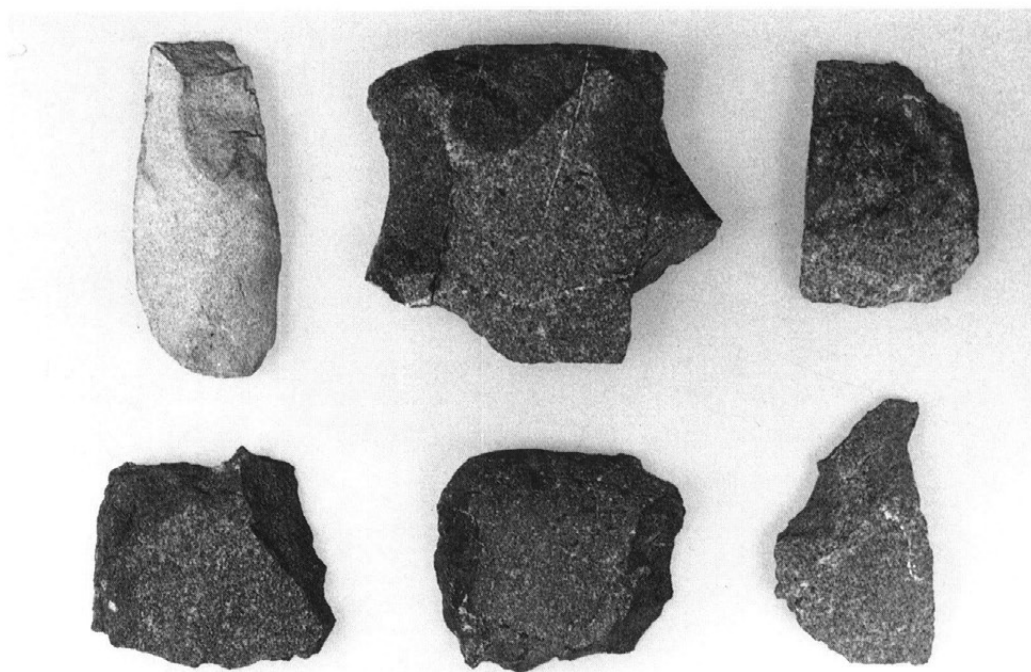
5号住居址 坏



5号住居址 石器



6号住居址 炉址甕

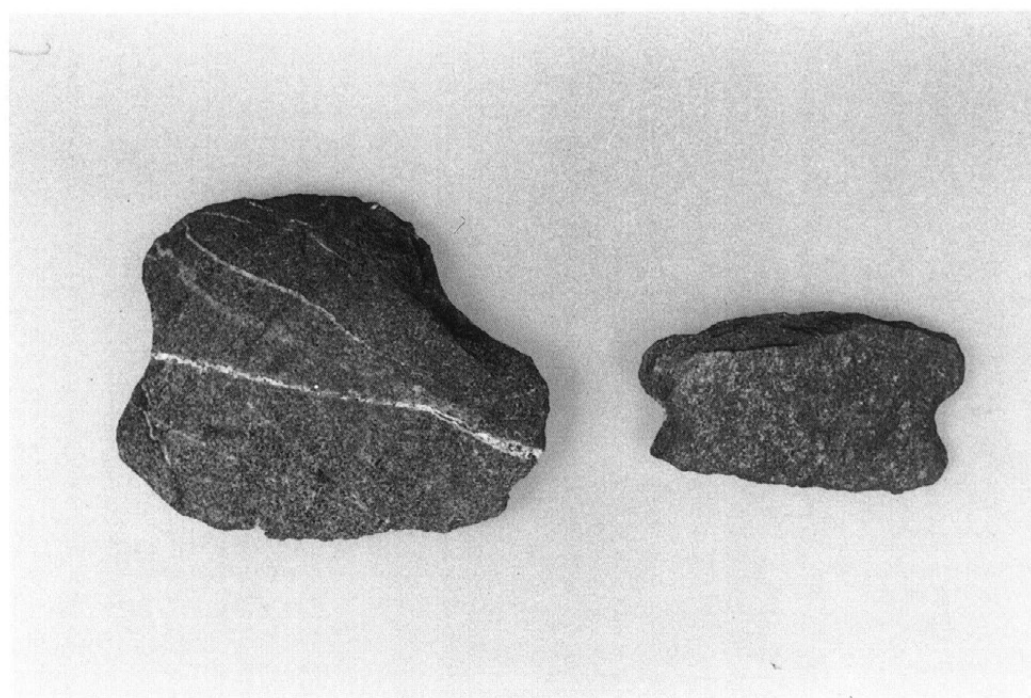


6号住居址 石器

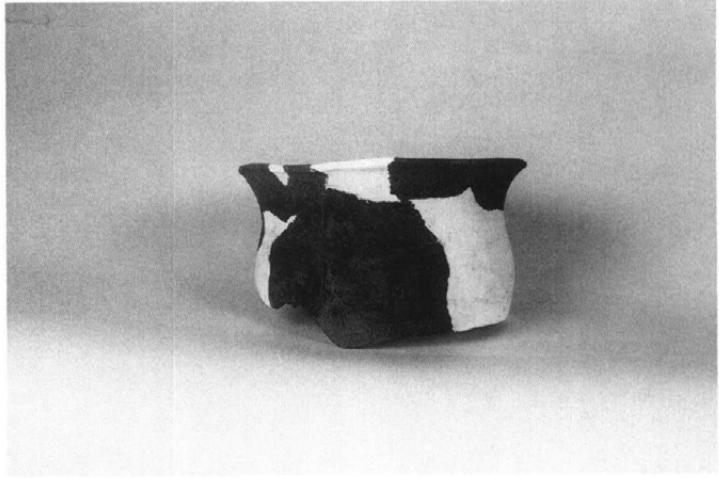
图版32



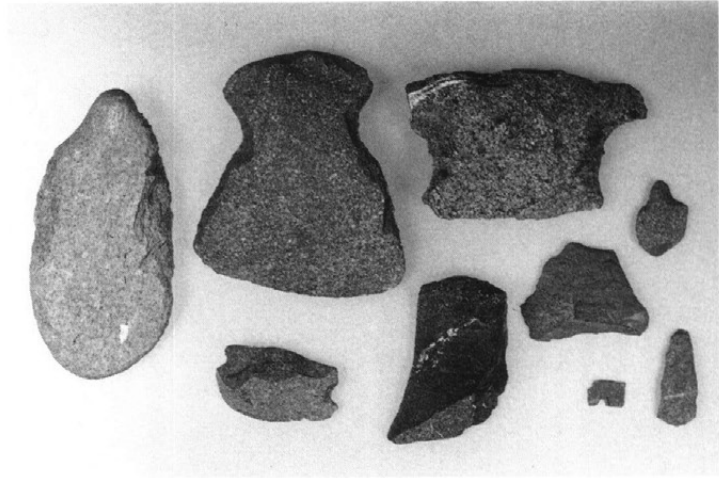
7号住居址 炉址甕



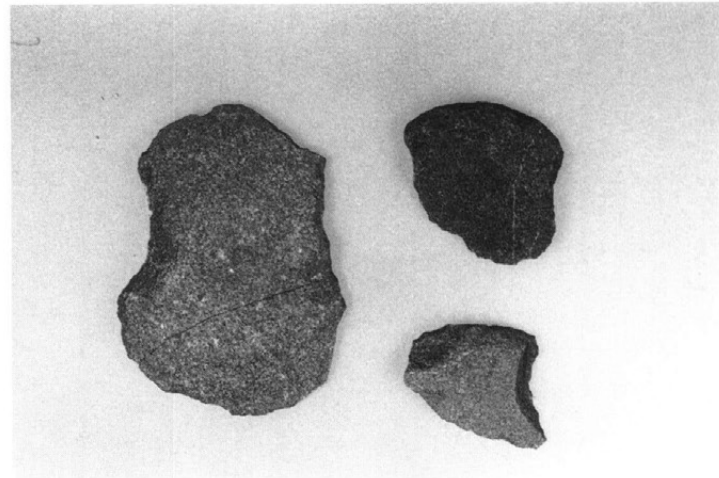
7号住居址 石器



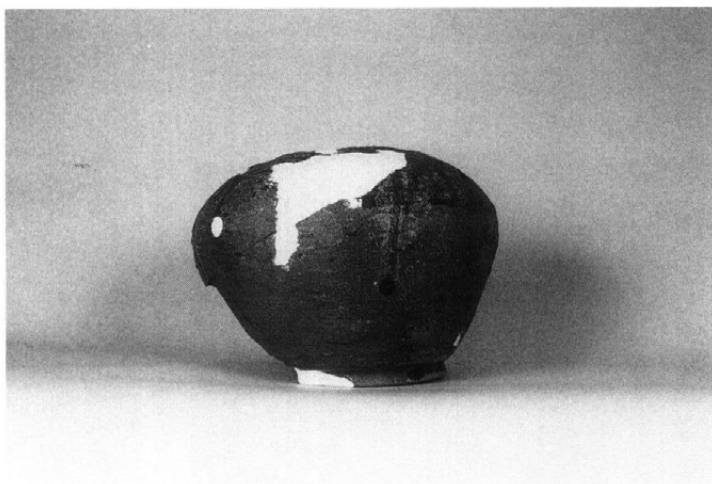
8号住居址 甕



8号住居址 石器



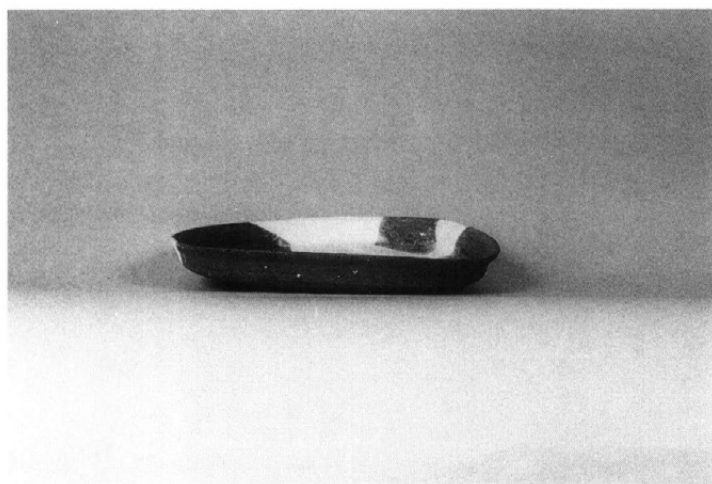
9号住居址 石器



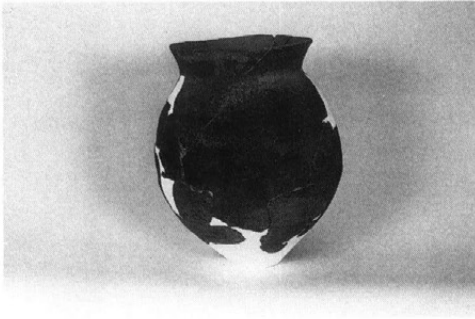
溝址1 長頸壺



溝址1 碗



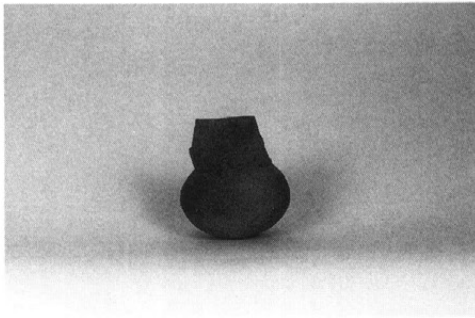
溝址1 盤



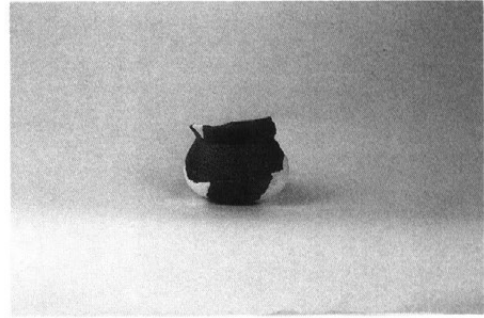
溝址6 甕



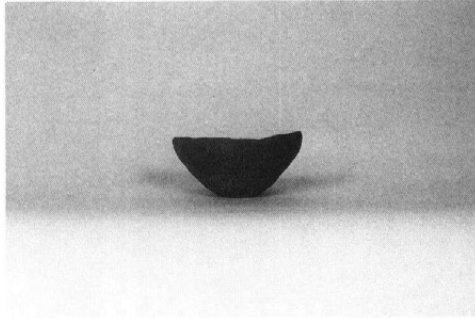
溝址6 甕



溝址6 小型丸底土器



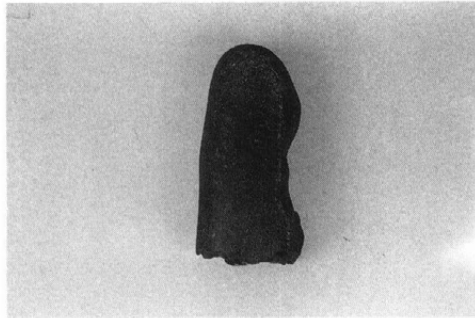
溝址6 小型丸底土器



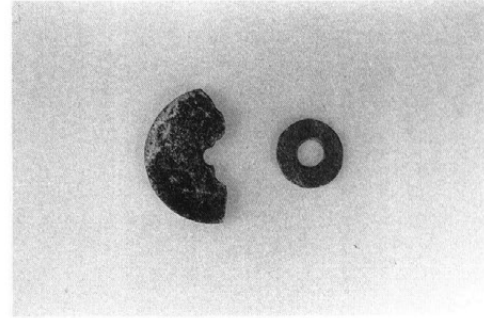
溝址6 鉢



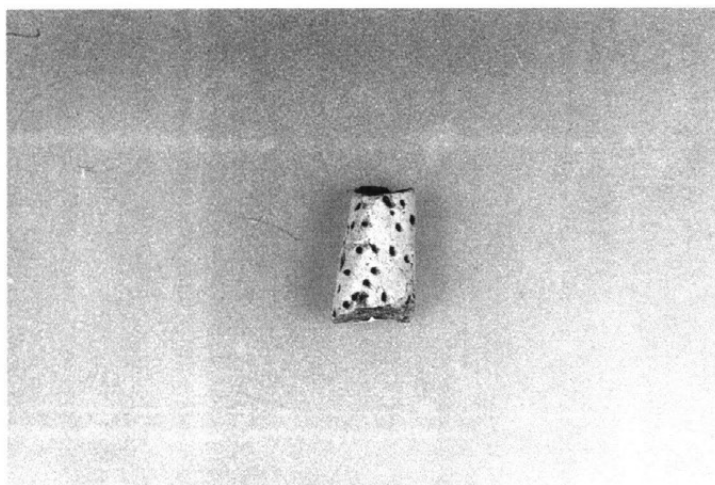
溝址6 高坏



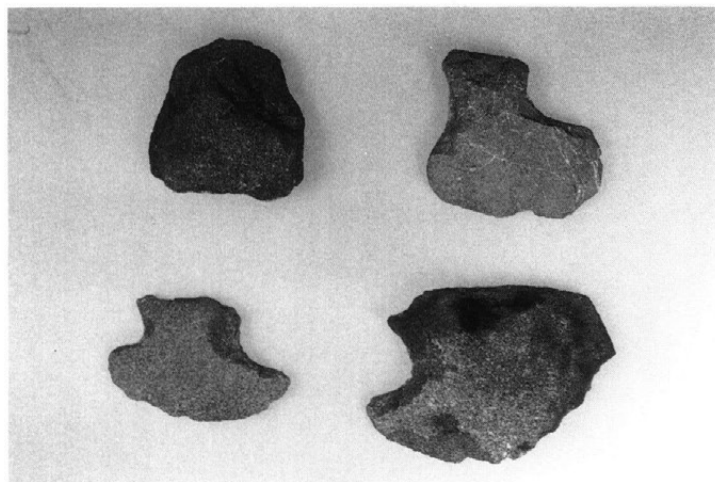
溝址6 砥石



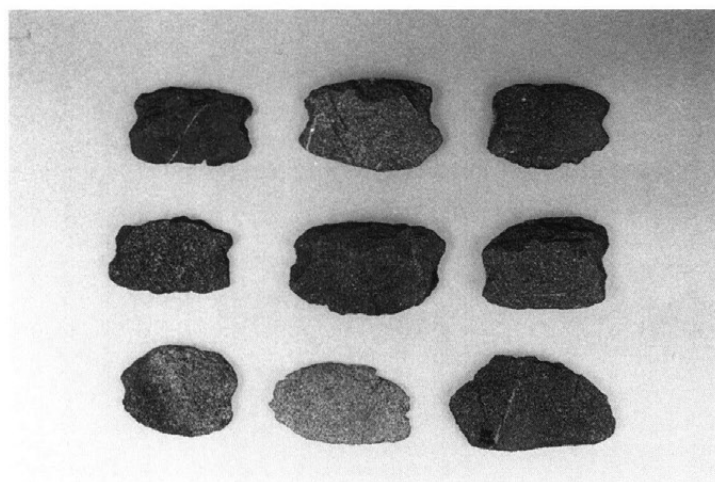
溝址6 石製紡錘車、環状石製品



遺構外出土製品



遺構外出土有肩扇狀形石器



遺構外出土打製石包丁

後 記

平成2年5月国道153号線沿い南条地籍（飯沼3,406-1番地）の梨畑へ、貸店舗建設のために農地転用申請が、土地所有者の丸山俊一氏より提出されました。

この土地は、埋蔵文化財包蔵地藪越遺跡の範囲に含まれるため、文化財保護法によって事前発掘調査の必要がありました。このため、長野県教育委員会の指導を得ながら、土地所有者及び店舗入居予定者に事前発掘調査の必要性を話したところ、幸い文化財保護に特に深いご理解を持っておられる土地所有者のご承諾をいただくことができました。

発掘調査は、平成2年9月10日から11月1日までの間延367人の作業員をお願いして実施しました。その結果、本書で述べた成果が得られて、発掘調査を終了することができました。

しかし、農村基盤総合整備事業による丹保地区の大規模な発掘調査のために作業が連続して整理作業が遅れ、この度報告書の発刊ができました。

暑い夏の発掘作業、寒さ厳しい冬の整理作業に従事された発掘調査団特に作業員の皆様に厚く御礼を申し上げます。

なお、尊い費用を御負担いただき調査に御協力くださった丸山俊一氏ならびにファッションセンターしまむら様に深い感謝を申し上げます。

最後に、調査結果と出土遺物は、町立上郷考古博物館に保管して収蔵・展示し、上郷町の歴史をしのぶ資料として役立たせていただくことを申し添え、後記とします。

平成3年3月20日

上郷町教育委員会

上郷町埋蔵文化財発掘調査報告書 第23集

藪越遺跡

— 貸店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成3年3月20日 発行

編集・発行／長野県下伊那郡上郷町教育委員会
長野県下伊那郡上郷町飯沼3, 092

印刷／龍共印刷株式会社
長野県下伊那郡上郷町黒田121-1
